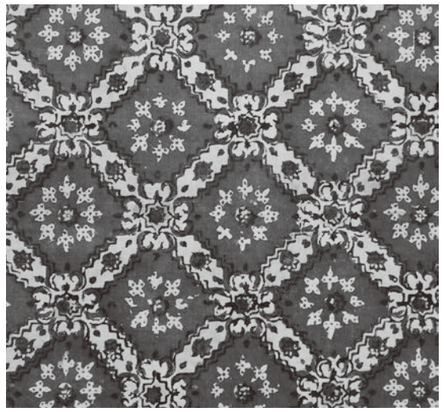


ISSN 2187-6894

BULLETIN OF FUKUOKA ART MUSEUM

No.12

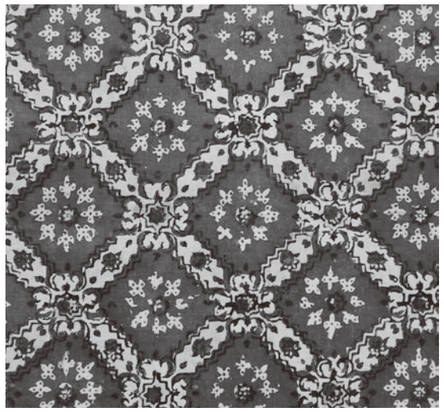
Reseach Material: Kai Mihachiro in Manchuria
Drawings and Articles Placed in the Magazine “Kyowa” 6
NAKAYAMA Klichiro 1

Report: Conservation and Utilization of Textiles as Teaching Materials
in Outreach Activities “Anywhere Museum”
WATANUKI Yuki
NAKAHARA Chiyoko 15

Transcription of *Unchuan Chakaiki*—the Tea Gathering Records by OGI Seisai 8
GOTO Hisashi 51

Edited by Fukuoka Art Museum
1-6 Ohorikoen, Chuo-ku, Fukuoka, Japan

福岡市美術館 研究紀要 第十二号 二〇二四年



福岡市美術館 研究紀要

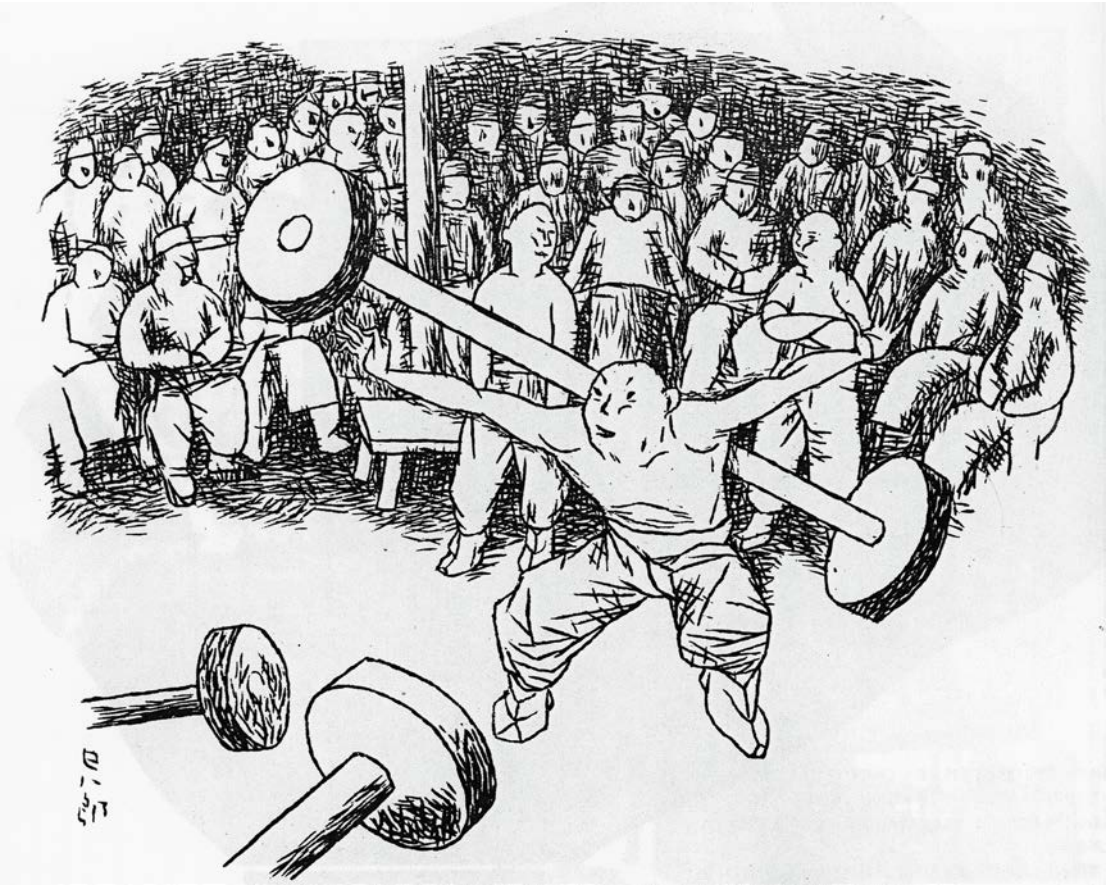
第12号

【資料紹介】
満州の甲斐巳八郎　雑誌『協和』掲載挿絵・執筆記事⑥
中山喜一朗 1

【報告文】
アウトリーチ活動「どこでも美術館」に用いる
染織資料の保存と活用
渡抜由季
中原千代子 15

『雲中庵茶会記』翻刻稿 ⑧
後藤　恒 51

2024年



口絵 1
甲斐巳八郎　満州郷土画譜72 力技

口絵２
《花格子文様更紗裂》インド、19世紀（マット加工後）

【資料紹介】　満州の甲斐巳八郎
雑誌『協和』掲載挿絵・執筆記事⑥

中山喜一朗

解　題

コロナ禍で調査がままならず３年間休載した。再開できたことに感謝したい。今回は、掲載ページの関係で前回掲載できなかった第180号（昭和11年11月１日発行）の残り（「満鉄沿線郷土玩具案内６」）から、第190号（昭和12年４月１日発行）までの記事と作品を掲載している。

前回の改題で言及したが、甲斐巳八郎に影響を受けた挿絵画家の出現によって、『協和』誌面には一見巳八郎と見まがう挿絵がそこかしこに出現するようになり、これまで以上に注意しないと巳八郎との区別がむずかしくなっている。この資料紹介はあくまでも甲斐巳八郎に関するものであるが、彼の影響の具体的状況を示すために、参考として第193号（昭和12年５月15日発行）の巻頭記事「社員会の十年を語る座談会」にあった挿絵２点（挿絵画家が明らかなもの）を掲載しておく。左が前回ふれたパンプタオ集団にも名を連ねている市丸久の作品で「街」と題されている。右は「角家」と題された内田俊治の挿絵。両作品とも巳八郎もよく使っている木炭で描いたものと思われる。

また、須知善一氏との共同作業で第174号（昭和11年８月１日発行）から始まった「満鉄沿線郷土玩具案内」は、今回掲載している第189号（昭和12年３月15日発行）の連載第10回で一応の完結をみている。

（なかやまきいちろう　福岡市美術館　総館長）

凡　例

1　甲斐巳八郎の挿絵や記事が掲載された『協和』の号数（発行年月日）を見出しとし、掲載順に配した。掲載ページは省略した。
2　自筆記事、挿絵や作品には通し番号をつけてNo.で示した。最終的には、No.は『協和』に掲載された全作品点数とほぼ一致する。
3　活字化されたタイトルや署名などがある場合は、No.のあとに[　]で記した。ない場合は、[なし]とした。
4　活字化されたタイトルや署名とは別に画中に文字や署名があり、解読可能な場合は「　」で記した。
5　ルポルタージュなどの自筆記事は、タイトル等のあとに全文を掲載し、挿絵をそのあとに配したが、紙面の効率上、先に挿絵や写真等を掲載する場合もある。文章の旧漢字、旧仮名遣いは意味が異ならないかぎり現代表記に改めた。地名、固有名詞等はそのまま記した。原文は、グラビアページの文章以外はほぼ総ルビであるが、本稿では必要に応じて一部を残し、他は省略した。明らかな誤植は（ママ）としたが、意味が通じる範囲で訂正しなかった。
6　作品や記事の理解の助けとなる情報、語句解説などは、適宜＊印で記した。
7　挿絵は原寸ではなく、それぞれ縮尺は異なる。
8　原本の文字が縦組の場合も、本稿では横組とした。

第180号（昭和11年11月１日発行）

№190－１［満鉄線郷土玩具案内６　麒麟送子］

№190－２［泥娃々騎鹿 泥娃々騎金蟬 泥娃々騎老虎］

№190－３～５［泥禄神 泥福神 泥老寿星］

＊これらのカットは、海城市（現在は遼寧省鞍山市内に含まれる）の泥人形に関する須知善一執筆の記事に巳八郎が添えたもの。190－２にタイトルはないが、文中の記述によって人形名が判明する。

第181号（昭和11年11月15日発行）

№191［満鉄線郷土玩具案内７　大搬不倒］

＊遼寧省遼陽城内の街頭で見かける人形屋に須知善一が取材したと記事と写真で、巳八郎の挿図は１点のみだが図はかなり大きい。記事によると、この大搬不倒は高さ一尺一寸で、王徳金という人形造りの作。「恐らく満州搬不倒の王座であろう」と須知善一は記している。

№192［満州郷土画譜71　榮口］

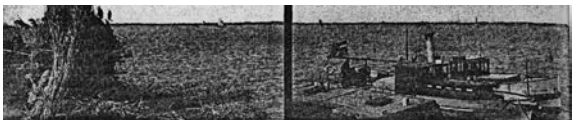
榮口も他の開港場の例にもれず、開港当時のバタ臭い建物を今に残しているが、大連港の出現に港榮口の面影は日を追うて今日の衰退をたどり、税関波止場付近に見ゆる廃屋に近い欧風建物は、殊更に侘しい情景を、遼河のドロ臭い川面にさらしているかのようである。町はしかし港町らしい複雑を織り込んで、危なげながら一種の風格を持ちこたえて今日に到っている。目をむくような大きな油房があり、大商店があるかと思うと、町なかに農家が軒を並べていたり、労働者相手の歓楽場も相当賑わっており、大きな野良犬の多いのも沿線随一であろう。わたしは榮口に行けば必ず小平康里付近の雑踏にもまれながら、漫然と歩き廻ることを忘れない。昇平舞台という芝居小屋の前の、説書場だったらしい小屋に、去年までは驢馬の皮でこしら

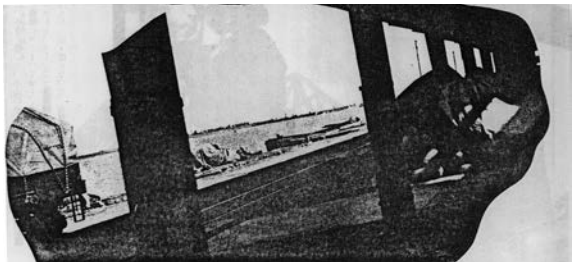
えた驢皮影戯という影絵芝居を演(や)っていた。平康里も灰色の煉瓦塀で囲まれた暗いなかに、ブリキ細工ではあるが、日本の紙灯篭のような優美なつくりの灯篭(？)が、影壁の両端に掛けられて、そのなかにはランプのあかい光がともっているあたり、歴史の浅い榮口とは思われぬ郷土色の豊かささえもっている。巳八郎

＊榮口は19世紀後半、天津条約の条約港かつ遼東湾唯一の港として繁栄したが、満鉄と大連の勃興によって衰退した。油房とは大豆などから油をとる工場のこと。説書場は日本の講談にちかい芸能を見せるための小屋のことと思われる。

№192－1「美玉書館　巳八郎」

№192－2～3（写真2点）

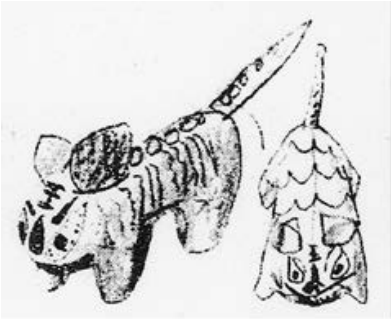




第182号（昭和11年12月1日発行）

№193［満鉄線郷土玩具案内8　泥娃娃］

№193－1［布老虎］



＊奉天の玩具を紹介した記事。須知善一によると布老虎は布製のぬいぐるみで色は黄色が多く、額に黒布で「王」の字が入れられ、毛は墨で書かれる。大小種類が多く、季節を問わず売られているらしい。

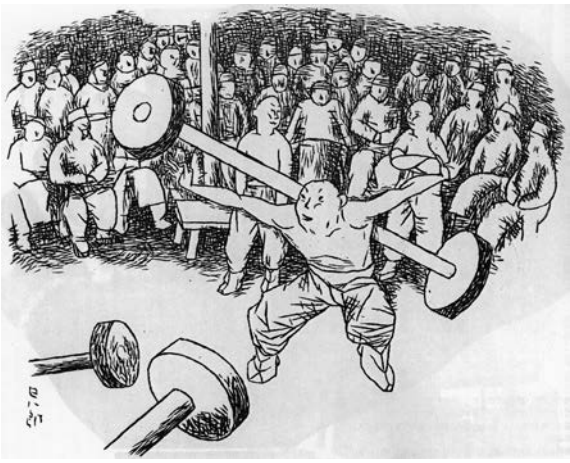
№194［満州郷土画譜72　力技］

元来支那の力技は手品と従兄弟位の程度のものが多く、見ていても大して力のありそうなのは少ない。手首でもって石を割るのなど、石の上に石をのせて割るのであるから、割れやすい位置にさえ置けば力はほんのわずかで済む筈。如何にもぎょうぎょうしく手首を白布で巻いたりしているが、顔つきほど痛くもなければ力もいり用ではなさそうである。角力にしても三人か五人の一組が、芝居の立ち廻りをするようなもので、取組前の恰好と掛声だけは仰山だが、技はなく、勝負も内輪同士が腕力で捻りつぶすといった取口である。それだから棒の両端に、円柱を平たく輪切にした石を、大小五六種揃えていて、小さいのからだんだん大きいのを、きりきり廻したり肩で芸当をして見せたりするのもある。これにしても所作や口上の方が面白く、力技としては驚くほどのものではないが、これらを大道

芸人として見る時は、さすが口のうまい支那人だと思わせる。所作の大ぎょうなこと、面白おかしくして見せる身振りの巧みさ、商売の懸引は心にくいまでにうまい。

大錚や太鼓を気狂のようにガンガン叩き続けているかと思うと。ぴたッと、大錚の余韻さえあまさず鳴を止めて得意の口上に移り、何でもない芸当を感心させてしまう。巳八郎

№193－1「巳八郎」

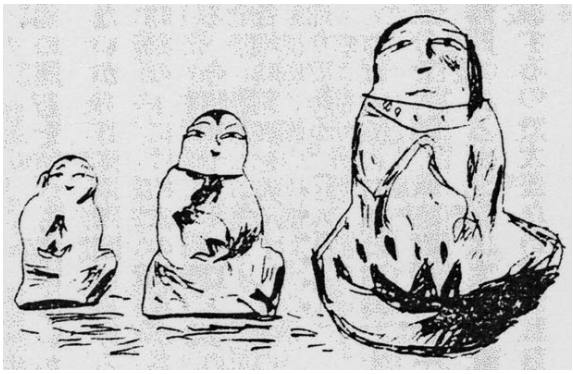


第183号（昭和11年12月15日発行）

№194［満鉄線郷土玩具案内９　鐵嶺の満州美人と泥

№194－1［鐵嶺の揺鼓］

№194－2［開原の搬不倒と泥娃娃］

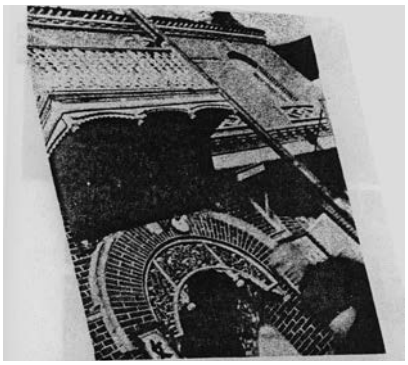


№195［満州郷土画譜73　大連近江町］

近江町はボロ屋の巣であり空箱の集積地である。空箱の製造は朝は五時から翌朝の二時頃までカンカン、然も屋外で叩いているのであの附近の者はたまったものではない。尤も屋外の仕事は夏分と春秋にかけての、屋外で仕事の出来る期間だけであるが、よくも働けるものだと感心させられる。夏の夕方になると茶壺を道路に持ち出して七人から十人が集って涼を入れているが、九時十時になると歩道は歩きもならぬほど彼等の寝床がつくられて、方々から大変なイビキだ。何処の満州人街を見歩いても此処位我者顔に振舞っているところはない。近江町一万一千の人口中、満州人が九千を占め、町は大通の中心近くに在りながら日本文化にも大連の特殊な植民地的色彩にも馴染まず、依然として山東の一小都市の出店の感が濃いのは写生して再び描こうと思って行って見ると跡方もなくとりつぶされており、次の二、三ケ月後にはもう立派な新建築が出来上がっている。こんなのを至るところに経験するのである。しかし新しく建てられる建物が、他の小崗子や奥町に見られる、幾らかでも新しい建物ではなく、何処までも近江町式であり、山東式であるところにこゝの面目がある。しかし表に見ゆるこれらの事象だけが近江町の全貌ではない。目に見えぬ諸売上の取引にも、近江町の面子がものを言い、特殊な商売道徳が行われている。ルンペン層を探ってみると、一泊銅貨二枚の宿泊所があり、闇の方面も払っても払っても次々に湧いて出て来るのに当局の人達を手古摺らせ、まだまだ特殊地域近江町はあのまゝの姿で何処まで延びるともはかり知れないところがある。巳八郎

№195－1「巳八郎」

№195－2［写真2点］



№196［満州風物詩］

＊見開きで掲載されている写真と文章からなる以下のルポルタージュには記名がない。甲斐巳八郎の執筆であると実証はできないが、内容や文章表現から巳八郎であると確信できるので文章と写真をセットにして掲載しておく。

№196－1［満州風物詩 赤峰の町］

蒙古人の町とは云え、全く漢民族化した、砂漠の町である。漸くうすら寒くなる頃から獣皮、毛皮類が出はじめる頃になって、蒙古人風景が展開する。赤峰とは町の一方にそれこそ名ばかりの赤い石山があるだけ、強い風が一週間も吹き続けたら町は一ぺんにのまれてしまいそうな、あたり一面砂漠地帯になっている。秋の西陽をうけた赤峰の山色は如何にも侘しい色である。ただでさえ赤紫にくすんだ色がくっきりとヒダを刻んで見せる日暮れの頃は、さすがに蒙古路に遠く取り残された町だという哀れを旅の心に沁みこませる。

№196－2［満州風物詩 呼蘭］

十月はじめ、例のアメリカンカアという二輪馬車に乗って駅から城内まで、冷たい秋雨のなかを走らせた。街筋は天主堂、関帝廟、娘娘様と突き当りの西岡公園まで、古さびた時代ものを囲んで、民家は悉くが満州旗人の建物だった。公園の下は呼蘭川が恰度日本の湖沼風景に似て、とても北満の地に今自分が在るのだとはどうしても思えなかった。街なかには招牌の思いきって珍しいのや、大きな熊が何軒かの薬舗に飼われて、これも招牌のうちであろうが随分とよごれた熊ばかりだった。

№196－3［満州風物詩 囲積はじまる］

満州では安平がいろんなものに使用される。嫁入の馬車から野芝居、炕の上に、これは日本の疊と同じようなもの、それと囲積。旅行者の目を楽しませてくれ

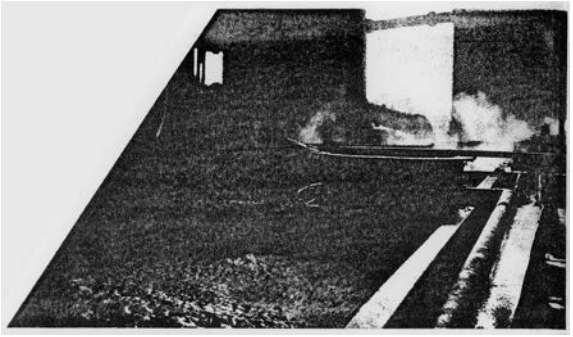
るこれら安平細工のなかでも囤積は満州の表徴ででもあるかのように、満州の至るところに、あの特異な形を見せてくれる。これからは駅と糧桟は寒い日を迎える毎に忙しくなる。ピカピカ光った帯様の安平が糧桟の院内に、小さく巻いて、小山のように積んである。大豆や小豆が運ばれてくると囤積におさまってゆく、大豆や小豆が増えるだけ囤積も高くつくられるのである。そうして一応囤積におさまった特産が囤積を出てゆくと、今度は上から段々低くなって、大豆がなくなると囤積も姿をなくするのである。

＊写真に写っている円筒形のものが安平（日本の疊のようなものとの記述がある）で作られた囤積であろう。囤積には溜め込む、買い占めるという意味もある。収穫した大豆や小豆が一旦集積されて溜め込まれ、出荷されていく様を記したものと思われる。

№196－4［満州風物詩 オイルシェール工場　撫順］

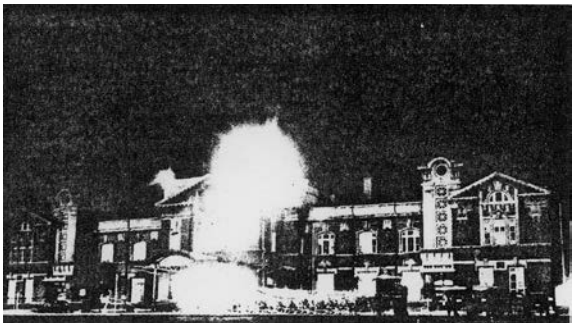
撫順の町は広ツ場に、家を並べたというだけ、どう見直しても町らしい気分が出て来ないのはどうした加減からであろうか。そのくせ一歩山手にはいると満州とは考えられぬ立派な住宅街が、町の面積ほどものあの緑林なのである。何でも自慢好きの撫順人が、一つも町の自慢を聞かしてくれないのは気づいてか気づかいでか。居心地のよい住宅ともう一つ、露天掘に龍鳳竪坑、それに製油工場という、誰が何と言おうと一歩もゆずらぬ自慢の種があるからである。

＊龍鳳竪坑とはタワー型竪坑で、今日に現存する三つの竪坑（ベルギー、福岡・志免と撫順）のひとつである。いまも撫順の観光スポットになっているらしい。ただしここに掲載されている写真・下は竪坑ではなく製油工場で、これが現存するかどうかは不明である。



№196－5［満州風物詩 奉天］

東北軍閥時代の居残りものの、あのうす汚い黄電車が、大威張りで駅と奉天城を連絡していた時代も、つい目と鼻の最近のことだったろうに、今日この頃のみじめさ、三べん位奉天に行っても電車のあることを知らずに帰ってくる人の方が多かろう。こっそり来てこっそりと遠廻りして帰って行くような、いじけた黄電車に見えるようになったのは、奉天が電車も見えぬ位大きくなったことのあかしである。夜店の賑わいは、とうの昔大連を追い越した。駅から城内へのうそ寒かった四五年前は想像もつかぬほど、軒がつまってバスが人力車をはねのけて走っている。大変な元気者奉天になったものである。



№196－6［満州風物詩 国境の町　札賓諾爾・満州里］

瞼の痛むような色の強い、大空に浮き出したロシア模様の鐘楼が、魚の乾物のように干上がっている。砂ホコリと塗りのない油気のない木材で出来上がった平べったい、満州里の町である。大まかな周囲の自然のように、この町の動きもノロノロしていて、暫らく住んでみないことには、スパイ神経の微粒子が町のゴミ溜にまで動いていることはわからない。お隣りの札賓諾爾も同じようなところだが、町の高いところに立っ

て見て、満州里よりも高いのかひくいのかさっぱり見当がつかない。炭鉱が露天掘だから、高く見えるところが或いは満州里あたりに相当するのかも知れぬ。大きな丘陵のうねりの斜面と思わるる箇所に、沼がやはり水面を傾かせて見せるのが、如何にも不思議でしかたがなかった。

＊札賓諾爾はジャライノールと読む。この記事が書かれた当時は満州里市の一部であったが2013年に分立し、現在は両市ともに中華人民共和国モンゴル自治区フルンボイル市に属す。

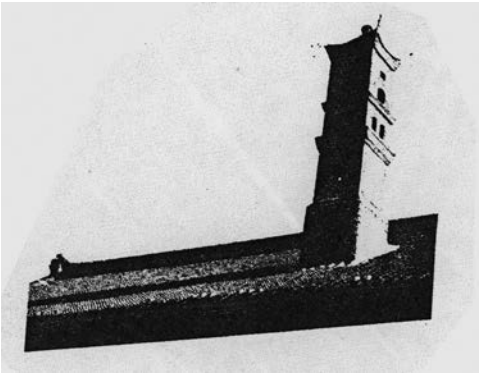
第184号（昭和12年１月１日発行）

№197［満州郷土画譜74　角店（かどみせ）］

満州では角の家を生かすことに妙を得ている。角を出来る限りつぶして、能う限りの広い間口を造作して人目をひくようにしている点、日本人より慥かに頭がよい。新しい形式の煉瓦建は角を利用してないのがあるが、満州奥地によく見る円柱（主として黒色に塗ってある）の木造建で、角の家なら、利用してないものはない。おの円柱の建物をよく見ていると、屋根の組み方から、屋根の頂ぺんの装飾、軒ひさしには板を二間位の間に三つか四つに区切り、朱青黄と塗り分けてあるのなど生粋の支那建物であろう。正月前になると大きな黒い円柱に紅紙に万事亨通とか開市大吉の文字が貼られ、街ははじめて美しい色彩に輝いてくる。平房子の泥家よりも煉瓦建の近代支那建築よりもやはり木造の、それも黒塗りの柱に、紅紙の正月気分は忘れることの出来ないものである。軒々を飾る正月気分こそ最も満州色を濃く表現したもののように思う。巳八郎

№197－１「順和増　巳八郎」

№197－２［写真３点］



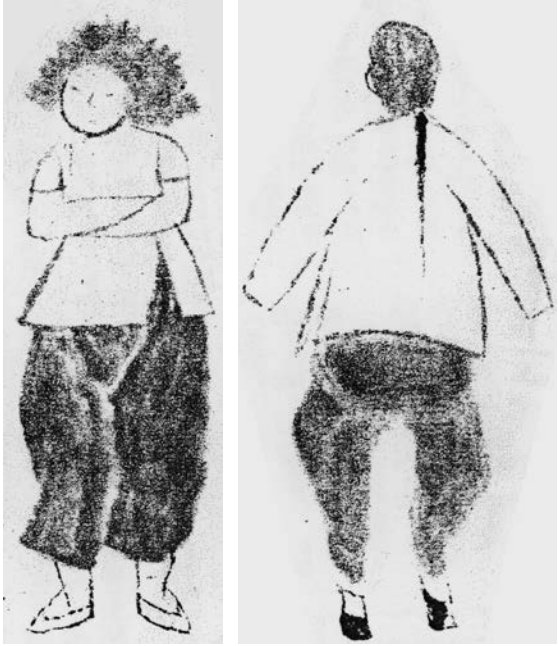
第186号（昭和12年２月１日発行）

№198［満州郷土画譜75　女の鞋（シェー）］

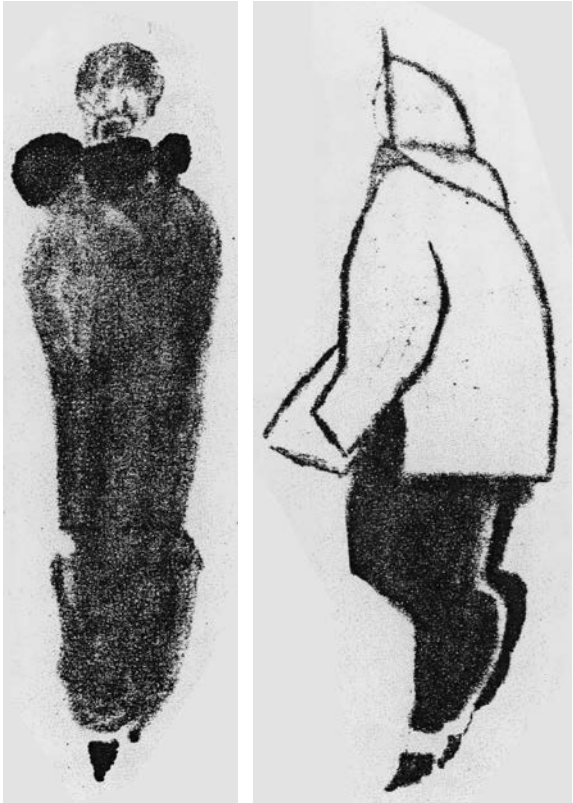
世界中の履物のなかで、支那の履物が一番色気がある。今日ではどこの国も、洋服の場合は欧風の靴をはくが、その国固有の履物はやはりそのままに使用されている。日本なら木履、下駄の如き、支那では布製の鞋子がそれである。欧風の靴よりも支那の鞋子が色気があるというのは、材料が天鵝絨や綸子綿布等のどんな細かな加工も出来、色彩が自由であるなどの条件を備えていることの他に、支那には纏足という、婦人をカタワにして社会に出場せしめたことから、さなきだに弱々しい東洋の婦人を今一歩色気を添え艶にしたものであろう。最近は年々、刺繍の施された繻子づくりの鞋子から、あっさりしたものに変って来て、甚だしいのになると纏足用のゴム鞋などが、これは日本からの輸入品らしいのを、はいているのを見うけるようになった。纏足までが、飾一つない、実用一方のゴム鞋となっては話にもならぬが、ゴム鞋はある階級のほんの一部の間に使用されるものであって、今日なお、前髪を額に垂らしている旧式の婦人達の間には刺繍入りの、凝った鞋子をはいているものの方が多い。鞋子はまた寒暑のはげしい大陸支那では寒い時暑い時で使用する材料が自から変わって来て、装飾も材料に応じて変化があり、気候風土の上から見た鞋子、歴史を通して見た鞋子と考え来ったら尽きるところのない興味が沸いて来る。巳八郎

№198－１「麺楼のおかみさん」

№198－２～３「若い娼婦」「女工」

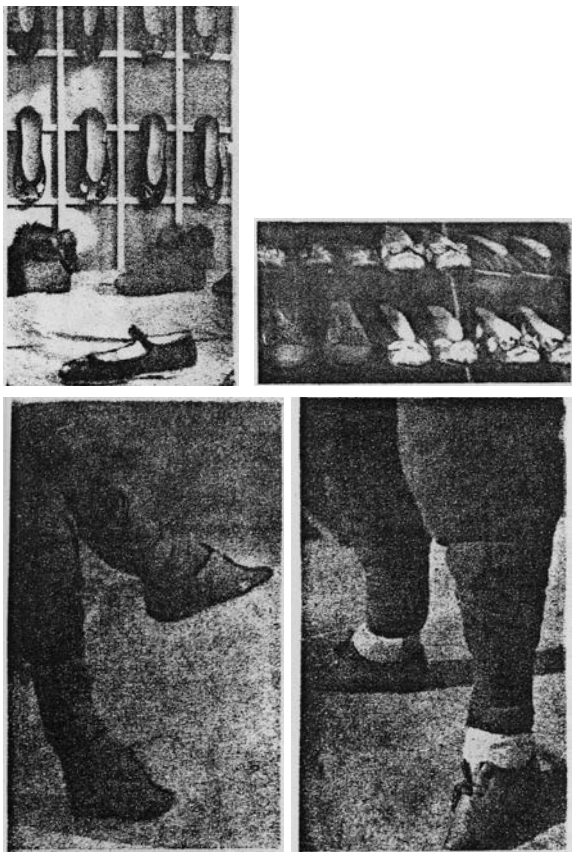


№198－４～５「若い娼婦」「女工」



№198－6「ほころび縫い」

№198－7～［写真5点］



＊本文中の天鵝絨（てんがじゅう）はビロード、繻子（しゅす）は経糸と緯糸が五本以上からなる織のことで、綸子や緞子も繻子織である。

第187号（昭和12年２月15日発行）

№199［満州郷土画譜76　男の鞋（シェー）］

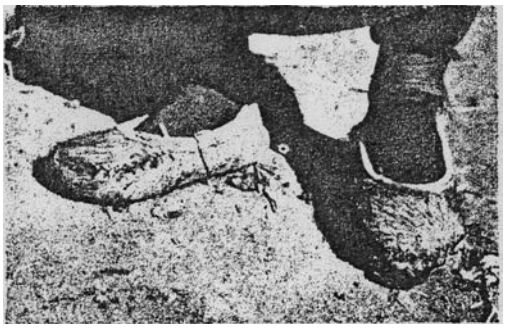
日本の履物に夏物と冬物を求めるなら、せいぜい塗に幾分の加減があり、千草（ちぐさ）草履などが夏専用の履物となっている程度のもので、殆んど四季同じものが履かれているが、満州のように寒さと暑さの激しいところでは日本のような訳にはゆかない。夏と冬では全く異った形となり、材料も違ったものが使用される。夏分は布製か薄羅紗の、どの階級も似通った、同じようなものばかりであるが、冬となると極寒に動く農夫や俥夫、その他苦力などには、同じ防寒靴にしても立居振舞の自由に出来る、割合に軽快なものが履かれ、街頭に突っ立って行人に呼び掛けている物売りや、馬車夫や魚市場などに使用されているのは、見るからにモノモノしい動きのとれぬようなものである。防寒靴に使用されている材料は、先づ動きの自由な方から見ると、農夫の足ごしらえ厳重な、日本の草鞋を偲ばせる総皮の、紐まで皮でつくられた足首をしばり上げたと言ったもの、苦力や車夫は綿布に綿の入ったものか、最近は下半分はゴム、上半分を綿布で揃えた、地下足袋を満州に適応して改造したもの、これは日本のアサヒ足袋あたりから入ったものではないかと思われる。尤も奥地のずっと寒いところに行けば苦力や車夫でも、もっと厚味のある、動きに不自由なのを履いているのを見うけることがある。次に足を活発に動かす必要のない、街頭労働者になると、人間の頭よりも大きい、革製のものが多く、割合に懐工合のよい馬車夫や、イ

ナセな魚市場のアンチャンはフエルトに底に木をうちつけたのを履いているが、多くは草鞋に豚の毛のはえたままのを下半分或いは全面蔽ったのを履いている。通りすがり二、三時間で拾っても十種やニ十種あるのだから、南満から北満と見歩いたら、相当数のものになるだろう。ついでに南支には日本の下駄に似た木履（ムーリー）というのがあり、俥夫など日本の草鞋（わらじ）にそっくりのもので、足先の紐が二本で両方に分れ、鼻緒になっていて、親指にかけるようになっているのを履くが、満州では木履（ムーリー）も草鞋（わらじ）も見たことがない。古くから満州族特有の、これは女ものではあるが、花盆底鞋など、不自由ながら贅沢極まるものであり、寒さの酷しい満州では大体に履物は贅沢ではないかと思われる。巳八郎

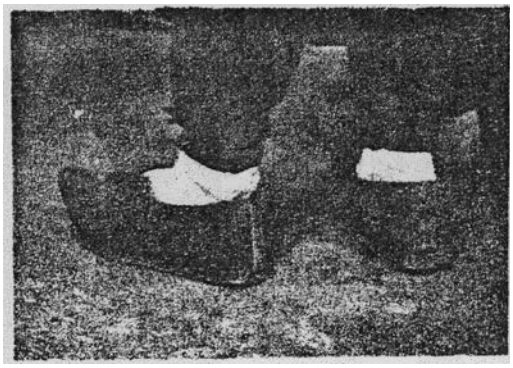
No. 199「巳八郎」

No. 199－１写真［(鞋）街頭の鞋店から］

No. 199－２写真［(皮鳥拉）草鞋に豚皮を蔽った防寒



No. 199－３写真［(棉鞋）布製防寒靴］

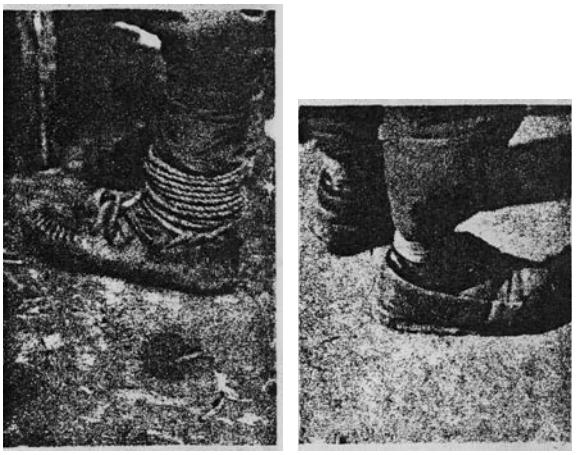


No. 199－４写真［(棉鞋）布と皮使用］

No. 199－５写真［(棉鞋）布と皮使用］

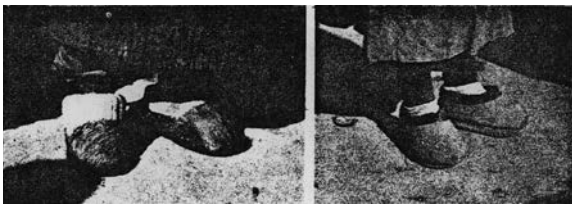
№199－６写真［(鳥拉)遠路歩行に耐える皮製防寒靴］

№199－７写真［(皮毘窩）市場に使用（底に木）］



№199－８写真［(草毘鞋）草鞋に豚皮の防寒鞋］

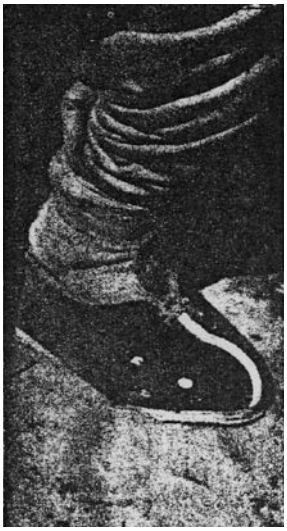
№199－９写真［(棉毘窩）フエルト製防寒鞋］



№199－10写真［(毘鞋）羅紗製の防寒鞋］

№199－11写真［(棉水棉子）フエルト製防寒鞋］

№199－12写真［(棉鞋）ビロード製防寒鞋］

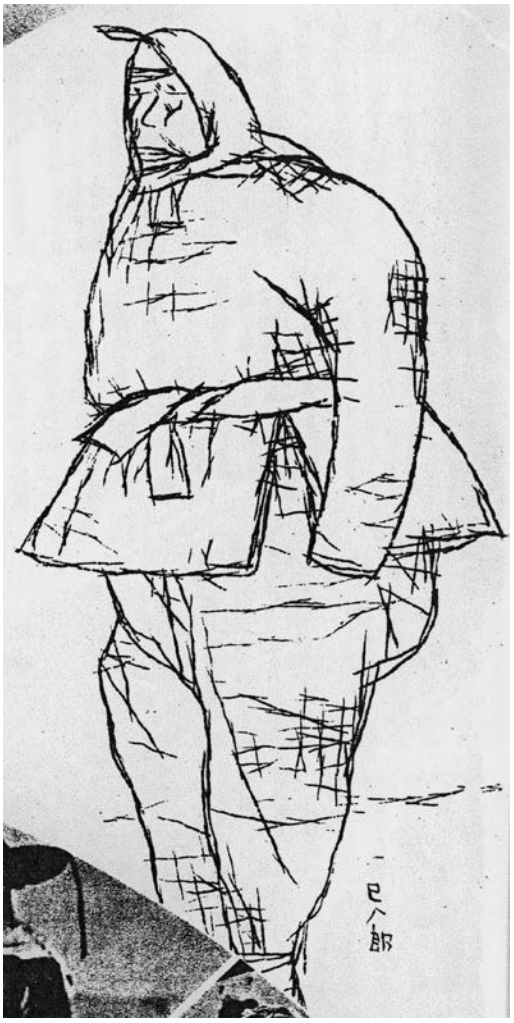


第188号（昭和12年３月１日発行）

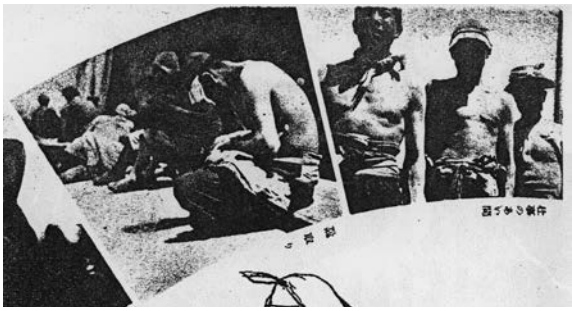
№200［満州郷土画譜77　苦力（現場)］

紺か黒字の綿服を、多なら鎧一式をかくし着(ぎ)しているのではないかと思わるゝ着ぶくれの胸高く結んだ帯、縁のないソフトを下から御高祖頭巾(おこそずきん)（？）の頂っぺんを赤い糸でキリッと結び豆粕を起す金棒を無造作に肩にひっかけたところ、正に鎌倉武士か僧兵のいでたちである。この異様な偶像(ぐうぞう)が日本人街に現れると十人見方は違ってもそこらの乞食とは違った何か強力なものをかすかでも感じないものはないだろう。私は苦力を見る時、少なくとも絵にする時は理屈を考えないでこの近代ばなれした、何ともつかぬ彼等に一種の圧迫を覚えそれが画境をつくってゆくのである。現場に於ける彼等は黙々として機械以上にも働いているが、不平も喜びもあの顔からは汲みとることが出来ない。人間らしい彼等を見るのはやはり仕事のあい間、蚤を取ったり、何か際どい話に打ち興じている時である。日頃鬱積している本能的なものがこんな時、笑いや興奮となって現れ発散されてゆくのであろう、頬笑ましい情景である。巳八郎

№200－１～２「巳八郎」

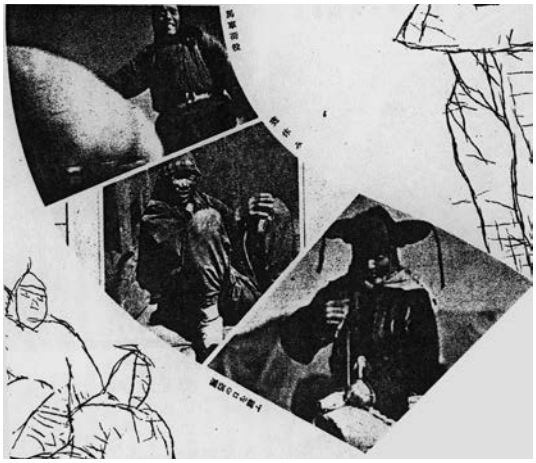


№200－3～4［蚤取り］［仕事のあい間］



№200－5～6［貨車積込］［馬車荷役］

№200－7～9［馬車荷役］［昼休み］［麻袋の口を縫う］

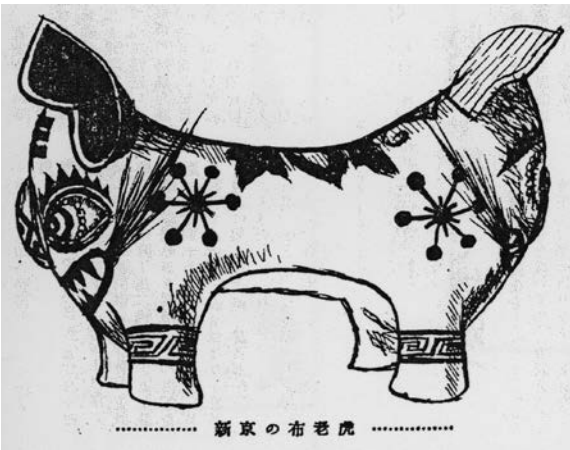


№200－10～11［昼寝］［倉庫へ］

第189号（昭和12年3月15日発行）

№201［満州沿線郷土玩具案内10　新京の元宵節の灯

№201－1［新京の布老虎］



第190号（昭和12年４月１日発行）

№202［満州郷土画譜78 帽子　－男－］

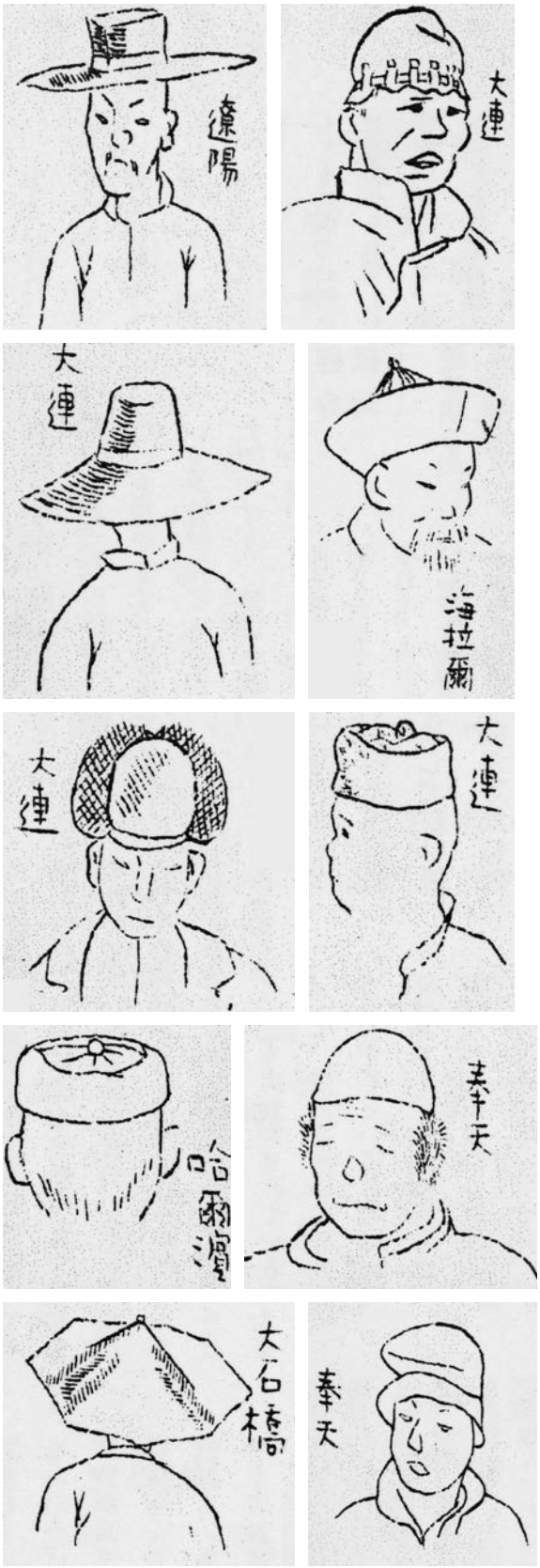
満州支那では多季は室内でも帽子を被るが、夏季は外でも被らないのが原則とされていた。それでわれわれは苦力や農夫がクルクル坊主の真黒な頭を、太陽をじかにうけて外で働いているのをよく見うけることがあるが、よくあれで平気で居れると思う。

革命後の支那は凡ゆるものが急テンポに変化を見せているが、なかでも最も目立つのは服飾の類で、帽子はその著しい例である。前清時代に着用されていた小帽兒（シャオマオアル）、官帽兒（コワンマオアル）、朝房兒（チャオマオアル）などのうち小帽兒の他は革命後廃止されて今は古物店の店頭に見る外はないが、小帽兒は今日に至るまで被られている。別の名を便帽（ベンマオ）とも瓜皮帽（コウピマオ）とも云って、球を藩裁したような普通何処にも見る帽子である。便帽は官帽兒や朝帽兒と同じく前清時代には官吏の間に日常使用されていたもので、その頃には帽子の頂点にある小さい飾り、即ち帽頂（マオジン）になかなか小むづかしい規則があって、絹糸、珊瑚、黒毛、毛糸等が普通の時、不吉の時は藍か黒を用いる習慣があった。帽辺は、大抵繻子、毛繻子、天鵞絨でつくり、色はきまって黒一色である。その内面は赤を普通とし、不吉の際は白か藍を用いた。近頃中折帽（満州では礼帽とも春秋帽とも言っている）を白布で巻いたのもあろうと思われる。古い時代からのものと云えば、便帽があるだけで、これは満州蒙古その他の弱小民族に至るまでいくらかの形の違いはあるが広く着用されている。

次に中折帽であるが、田舎に行くと中折を被ってないと一人前ではない位それこそ室内でも、十歳にならぬ子供に至るまで被っている。防寒帽に至っては鞋と同様、地方により寒さの程度により、雑多な種類のものがある。普通耳帽（アルマオ）や風帽（フォンマオ）等の改良されたもの色々である。

夏帽子はもともとなかったのであるが、尤も官吏の間には官帽の夏物として涼帽（リャンマオ）というのがあったが一般には使用されず、中折の流行とともに麦桿ものの夏帽が流行し、この頃では日本以上に沢山の種類がある。流行と言えば支那では軍人（士官級）学生、巡査が何時もその先駆者であるというから面白い。前清時代にこの三者が大黒帽を被って新風俗の魁をしたという話が残っている。巳八郎

№202－1～16「新京」「大連」「海拉爾」「古北口」「大連」「大石橋」「遼陽」「大連」「大連」「海拉爾」「大連」「大連」「哈爾濱」「奉天」「大石橋」「奉天」



№202－17～28（写真12点）「瓜皮帽、水獺皮帽」「草帽（新流行もの）、氈耳帽」「お高祖頭巾と礼帽（春秋期）、蒙古の黒帽」「綿帽子、耳帽」「蓑笠、革帽」「火車頭帽、一把口帽」

【報告文】　アウトリーチ活動「どこでも美術館」に用いる染織資料の保存と活用

渡抜由季、中原千代子

１．はじめに

本論は、福岡市美術館の教育普及事業の一つである「どこでも美術館」に利用する染織の美術資料（以下染織資料とする）の保存と活用について、その事例を報告するものである。「どこでも美術館」の始まりと概要については2019年度の報告に詳細が記載されているが、本事業は2016年に福岡市美術館の改修工事に伴う休館をきっかけとして開始したアウトリーチ活動である[(1)]。当館の美術館学芸員が、所蔵作品や美術館活動に関連した教材と共に市内の小中学校や公民館、病院等に赴き普及活動を行うものである。この活動に利用する教材は、教材ボックスに収めた形状で制作しており、2023年度現在で絵画･彫刻ボックス３種、やきものボックス、染め･織りものボックス、素材と技法ボックス５種、ワークショップボックスの計11種類となっている[(2)]。これらの教材は美術資料の保存管理の観点から、当館の所蔵品の複製品を制作して用いていた。一方で、教育普及活動の観点から実物に触れることも利用者にもたらす効果が大きいと考え、インドネシアのバティックや東アフリカのカンガ、藤浩志の《ヤセ犬》等、実物の美術資料も併せて購入もしくは制作し、活用していた。

本稿で取り上げる対象は、「どこでも美術館」の活動をより充実させることを目的として2021年度に収蔵した染織資料で、点数は21点である[(3)]。これら染織資料は、これまで利用されていた染織の教材と異なり制作年代が古く、サイズが小さい上に布地が薄かった。また、経年や使用による劣化で穴や破れ等の損傷が見られる資料も数点認められた。そのため本事業で活用するためには、取り扱いや運搬、保存環境等について十分な配慮が必要と判断した。当館では、前述のインドネシアのバティックの購入をきっかけに、2018年度以降「どこでも美術館」に収納される美術作品についても美術的価値や運用方法等の必要に応じて、正式に「教育研究資料」として所蔵番号を登録することとしている。しかしながら実物の美術資料を教育普及活動として活用するということは、博物館法（第３条第２項）で示されているとおり、地域の活力の向上に寄与することが見込める一方で、通常の収蔵品と異なる保存管理の考え方や手法を考えなければならない。そのため、これら21点の染織資料を通して、保存と活用という、ある意味では相反する目的を両立すべく、改めて検討する必要があった。2022年の第208回国会において、博物館法の一部を改正する法律が成立し、翌４月に施行された。国全体の動きから見ても文化財の活用に関する関心は益々高まりを見せるものの、これらの動きに対応できるような保存管理の手法は手探りの状況で、なかなか歩調を合わせることが困難といえる。その歩調を合わせる必要性や、活用と保存を両立するための課題等を明らかにすることで、本稿の事例が「活用ありき」となりつつある現在の流れへの問いかけとなれば幸いである。

２．「どこでも美術館」の現在

前述した通り、どこでも美術館は市内の小中学校や公民館等を対象に、当館の学芸員が教材を施設に持ち込みアウトリーチ活動を行うものである。ただし、2019年３月には館がリニューアルオープンし、来館者・学校団

体の美術館利用が再開することを鑑み、リニューアル後の活動対象をあらかじめ「美術館・博物館に来られない／来にくい」とされる市内の院内学級、特別支援学校、離島や公共交通機関で来にくい地域の小中学校、高齢者向けの生涯学習活動を行う公民館等に限定することとしていた。それと同時に学校向けには美術の鑑賞授業をサポートする教材の貸出しプログラム「どこでも美術館ティーチャーズ・プラス」を開始し、引き続き学校での活用も行えるようにしている。従って現在は、「美術館・博物館に来られない／来にくい」層を対象に館外へ赴くプログラムを「どこでも美術館アウトリーチ」、学校へ教材を貸出すプログラムを「どこでも美術館ティーチャーズ・プラス」としている。「どこでも美術館ティーチャーズ・プラス」は、学校で美術館にあるような作品の鑑賞授業をしたい、子どもたちに美術作品を実際に触れる体験をさせたい、技法について学ばせたいという学校教師のためのプログラムである。「どこでも美術館ティーチャーズ・プラス」の場合は、当館学芸員が現地に赴くことはないため、事前に学芸員からレクチャーを受けた教師が、当日に自ら教材を取り扱うという流れである。

また、ここ数年の活用として当館の教育普及事業である「バリアフリーギャラリーツアー」への教材利用についても触れておきたい。これは視覚・聴覚に障がいがある方や車椅子利用者と健常者とが一緒に作品鑑賞を楽しむためのプログラムであるが、その中の視覚障がい者向けのツアーで「どこでも美術館」の実物資料を実際に触って鑑賞する体験を盛り込んでいる。「どこでも美術館」はアウトリーチを目的とした事業であるが、鑑賞をサポートするツールとして館内でも活用の機会があるということもここで記しておく。

３．対象となる染織資料について

今回対象となる染織資料は2021年度に収蔵した教育普及用のインド更紗裂で、「どこでも美術館」で既に活用しているインドネシアのバティックと、東アフリカのカンガに関連する実物の資料として購入した裂21点である。

裂21点の素材は全て木綿で構成されており、かつ形状は全てＡ４サイズに裁断した状態でプラスチックフィルムの袋に封入されていた（図１）。生地の厚みは全て0.3 ～ 0.5mm程度と薄く、最も薄いものは擦り切れて背面が透けて見えるほどであった（図２）。織りは全て平織である。次に内訳だが、裂21点のうち18点は《インド更紗裂》で、18世紀から19世紀にインド東部コロマンデル海岸、もしくは西部に位置するグジャラート州を中心とする諸都市で生産され、インドネシアのスマトラ島で収集された。残る３点は《インド更紗貼交布》で、17世紀から19世紀につくられたインド更紗の小さな裂をフェルト上に貼り交ぜたものである。形状は違えども全て制作当初から現在まで大切に保管されたものであり、唐草文様や花文様、抽象的な幾何学模様など、インド更紗に見られる多様な文様を知ることが出来るのが特徴である。

４．保存と活用方針の検討

活用の方針を検討するにあたり、事前に保存管理担当が教育普及係にヒアリングを行ったところ、以下のような目的や利用を想定することが分かった。

●学芸員が立ち会いの上で、児童や高齢者等が取り扱う可能性がある。
●想定される持ち運び先は市内小中学校、公民館、病院等である。
●「どこでも美術館」で活用するだけでなく「どこでも美術館ティーチャーズ・プラス」で貸出しも行う。
●貸出先の教師が単独で取り扱うことがある。
●染織の表面を間近に見せられるようにする。
●状態の良いものは直接触れられるようにする。

●最大２週間、外部に保管される可能性がある。
●持ち運びの移動手段は基本的に車が多い。

「どこでも美術館」に利用する教材は、現状ある程度のルールが決められた運用、管理がなされている。特に「どこでも美術館ティーチャーズ・プラス」については教育普及担当者による貸出前後の簡易なコンディションチェックと点数確認を、全ての教材に対して行っている。具体的な方法は、図版付きの棒リストを照らし合わせながら貸出前後の状態を目視確認するというもので、教材に何かあった場合は都度棒リストに書き込んでいる。また、事業の申込用紙にも注意事項を記載し、破損や紛失があった場合は貸出先から報告してもらうよう案内をしている。保険について、ネイル・トゥ・ネイル等の美術品貸出に対応してはいないが、現在契約している館内保管での動産保険の対象には含まれている。

これらの想定される利用の現状・目的から、損傷してしまった場合の対応や修復、もしくは交換の是非についても考え方をまとめる等、作品そのものの補強の他に、運用上の方針検討とルールの作成が急務と思われた。通常、教育普及で活用する一般的な教材は、外部への持ち運び等が頻繁にあり、収蔵庫ではない場所に保管する。また、使用中に壊れた場合も、責任者に確認の上で修理、ストックとの交換、場合によっては廃棄し新規で購入するという選択も考えられる。ところが、今回収蔵する染織資料も含め「どこでも美術館」に収納される美術作品は、2018年度以降教育研究資料と位置付けられ、福岡市美術館の所蔵番号が付くため、他の美術資料に準じた然るべき保存環境にて保存管理する必要がある。また、所蔵番号がつき、市の財産としてデータベース上に登録されるため、破損した場合の対応に制約が起きる[(4)]。そのため、将来的な利用も視野に含めた損傷後の染織資料の扱いについて、教育普及担当と当時の関係者間で協議した結果、活用に耐えられなくなった時点で個別に収蔵庫にて保管することとした。

併せて、作品そのものの補強についても検討を行った。保存管理上特に懸念すべき点として、取り扱い不注意による損傷の他、温湿度変動、虫菌害、輸送時の振動、収蔵庫以外での一時保管によるセキュリティ上の問題、紛失等が挙げられる。本件は外部利用者が単独で染織資料を直接扱うことから、特に取り扱い不注意による損傷や紛失のリスクが懸念された。そのため、直接染織資料に触れることなく容易に取り扱いが可能となる、ブックマット式[(5)]のマット加工を採用した（図３、４）。また紛失予防策の一つとしてラベルを貼付し、容易に点数確認が出来る方針とした（図５）。活用する際の梱包箱については、保存と輸送の二つの目的を兼用した梱包箱とすることで、温湿度変動、虫菌害、輸送時の振動の緩和を目指した。また、梱包箱を頻繁に交換する可能性があるため、極力既製品を採用することとし、利用者による取り出しが容易になるよう、発泡ポリエチレンの設置個所には遊びを設けた。

５．保存処置工程

本作の保存と活用の方針が定まった段階で、下記表の通り処置工程を進めた。なお、マット加工作業は博物館実習の授業の一環として、令和４、５年度博物館実習生らとともに教育普及係と保存管理担当者による合同実習のような形で作業を進めた。

①処置前撮影	正常光による処置前撮影を行った。
②マット加工	ブックマットを作製した。今回、予算上の都合から保存用ではなく通常のマットボードを採用したため、台マットに透明な帯電防止PETフィルム（商品名：ルミラーX53®）を敷き、上から染織資料を重ねることで染織資料への酸の移行を予防することとした。染織資料とマットの固定は、染織資料全てが平均して0.3㎜程度の薄さ

	であったため補修テープ（フィルムプラストP®）を用い貼りしろ１～３㎜で固定した（図６）。また、特に脆弱と判断した６点については、利用者が直接染織資料に触れることがないよう帯電防止PETフィルムを染織資料の表裏両面から挟み込む手法を採用した（図７）。
③ラベル貼付	紛失予防として、出来上がったブックマットは資料一点一点に種別や所蔵番号、作品名、数量画像、管理番号が記載されたラベルを作製して、マット裏面に貼付した。また、確認用に同様のレイアウトとなるリストを作成した。
④梱包箱の作成	保存と輸送を兼ね備えるという目的を考慮し、既製品である無酸性ダンボール製の組立式の保存箱を採用した。これにより、必要に応じて再購入が可能となるよう備えた。また、内部に緩衝材として発泡ポリエチレンを取り付けることで輸送時の振動による破損の予防策とした（図８）。また、2021年度に同様に収蔵した腰布も、持ち運びや収納の作業性を考慮し同梱することとした。
⑤緩衝材準備	マットボードから発生が予想される酸性ガスを緩和するため、ガス吸着機能のある緩衝材を同梱した。
⑥処置後撮影	正常光による簡易な処置後撮影を行った。

6. まとめ

染織資料の「どこでも美術館アウトリーチ」「どこでも美術館ティーチャーズ・プラス」への運用を、2023年度秋より段階的に開始したが、申し込みがないまま当年度のアウトリーチの活動は終了した。そのため、今回の保存処置や運用方針の効果を評価する段階にはまだ至っていない。現段階で考えられる課題は、担当者引継ぎであり、そのためのマニュアル作成が必要だろう。また、事前の利用者へのより詳細なレクチャーも大切な美術資料であることを理解してもらうという意味では重要とも言える。しかし、繰り返し言うように、本稿に挙げる資料は教育普及活動のためのものであり、なおかつ一般市民による取り扱いを含めた活用が本来の目的である。他の所蔵作品と同じ水準となる取り扱い方を利用者に求めてしまうと、目的が地域の活力の向上に寄与することとは離れた方向へ向かってしまう恐れもある。教育普及資料は他の所蔵作品と扱いが異なることを前提として保存管理方法を考慮する必要があるともいえる。そのため運悪く紛失してしまった場合の所蔵番号の扱いや、予備補充の是非、修復を必要とするかどうかの判断基準等、今後起こり得るリスクについては予め想定しつつも、実際に運用を開始していきながら都度調整していけるよう、余白を持たせておくことも望ましいのかもしれない。最後に、本稿の執筆にあたり姫路市立美術館の鬼本佳代子氏にご助言賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

（わたぬきゆき　福岡市美術館学芸員）
（なかはらちよこ　福岡市美術館教育普及専門員）

註

（１）鬼本佳代子「休館中におけるアウトリーチ活動「どこでも美術館」について」『福岡市美術館研究紀要』第７号、2019年,pp.1- 6

（２）https://www.fukuoka-art-museum.jp/education/family/#content ３（最終アクセス日　2023年12月１日）、『どこでも美術館　パンフレット』2018年度版、『どこでも美術館　ティーチャーズ･プラス　パンフレット』

2023年度版。ただし、パンフレットに掲載のない「ワークショップボックス」について、現時点では他施設との連携事業においてのみ活用している。

（３）2021年度に収蔵した教育普及用の染織資料は他に腰布１点がある。《花文様更紗腰布》で、手描き媒染によって模様が描かれている木綿のインド更紗である。サイズは縦107×横234㎝で、制作年は19世紀とされている。本稿の対象としている裂21点とはサイズも形状も異なるため取り上げていないが、裂21点の梱包用箱に同梱している。

（４）かなり珍しい先行事例として国立民族学博物館は民族学資料に廃棄規則を設けている。『国立民族学博物館民族学資料廃棄規則』（平成17年３月24日規則第30号）より抜粋

（５）マットは一般的に版画作品に用いられる額装の際に余白を設けるためのパーツであり、マット２枚で版画作品を本のように挟み込むブックマット加工を施すことで、より安全に取り扱うことが出来るが、一方でマットの厚みと重さが二倍程度となるデメリットもある。

図１　《花幾何学文様更紗裂》18世紀
収蔵当初の状態

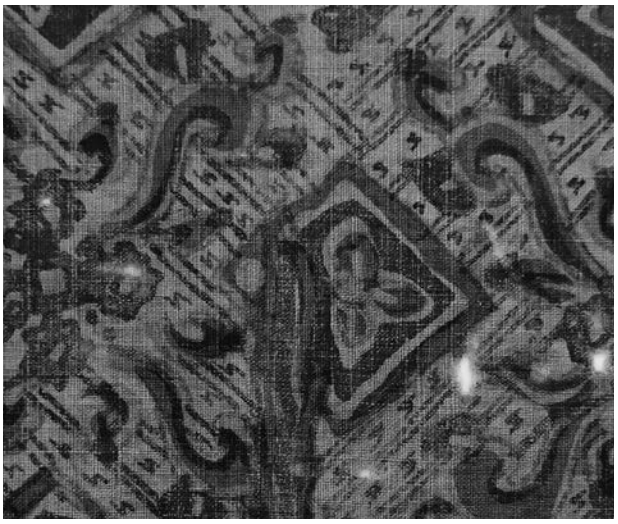


図２　《花幾何学文様更紗裂》18世紀（部分図）

図３　ブックマット加工済の染織資料

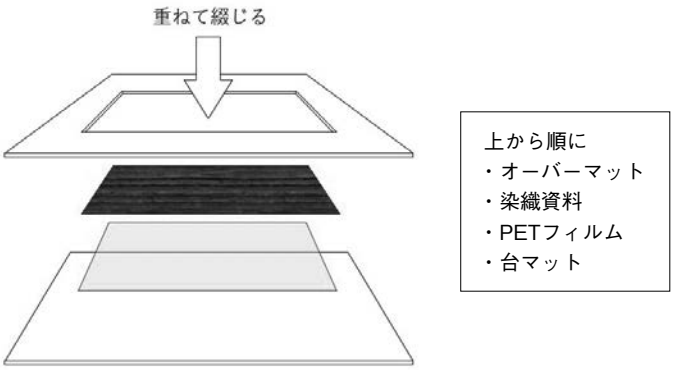


図４　マット加工 模式図

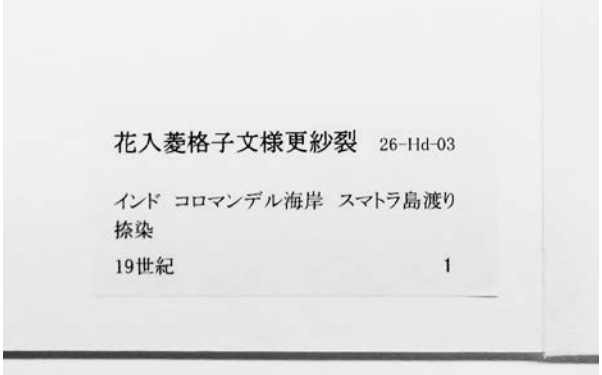


図５　貼付ラベル例

図６　補修テープを用いた固定

図７　PETフィルムによる表面の保護

図８　染織資料を箱に収納した様子

(53) 本書影印本下巻の「人物略解説」七四七頁に「安竹次郎　東邦電力重役」とある。
(54) 「常慶」（樂吉左衛門家二代）を誤記したものと思われる。
(55) 鈴木宗保（一八八二―一九八〇）、号は日日庵。茶人（裏千家）。
(56) この茶事のことは、『日本の茶道』通巻一三五号（昭和十九年二月発行）二〇～二四頁所載、耳庵叟（松永耳庵の筆名）「喫茶春秋」中の「鈴木宗保老の春茶」にも記録されている。
(57) 長尾欽弥（一八九二―一九八〇）、号は宜雨。実業家。昭和四年（一九二九）、のちに妻となる川田よねらと合資会社「栄養と育児の会」（現・わかもと製薬株式会社）を設立、酵母製剤「若素（わかもと）」を発売して好評を博し、財をなした。
(58) この茶事のことは、『日本の茶道』通巻一三六号（昭和十九年三月発行）二七～二八頁所載、耳叟（松永耳庵の筆名）「般若苑の伊羅保」にも記録されている。
(59) 鎌倉時代の職工・満田弥三右衛門（一二〇二―一二八二）のことと思われる。
(60) 現在、福岡市美術館蔵「妙総大師道潛墨蹟（与淑通教授尺牘）」（重要文化財）。

〈主要参考文献〉
『人事興信録』データベース（https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/search/who4）
『昭和人名辞典』（日本図書センター、平成元年）
『講談社日本人名大辞典』（講談社、平成十三年）
『角川茶道大事典』（角川書店、平成十四年）
齋藤清『原三溪　偉大な茶人の知られざる真相』（淡交社、平成二十六年）
谷晃『近代数寄者の茶会記』（淡交社、平成三十一年）

(24) 松尾宗吾（一八九九―一九八〇）か。号は不染斎。茶道松尾流第十代。
(25) 杉浦保嘉（一八九二―一九六三）。名古屋の料亭「八勝館」主人。
(26) 増田義一（一八六九―一九四九）。実業家、政治家。明治三十三年（一九〇〇）実業之日本社設立、社長就任。大正元年（一九一二）衆議院議員、昭和六年（一九三一）衆議院副議長など。
(27) 松本健次郎（一八七〇―一九六三）、旧姓は安川。実業家。安川財閥の創始者・安川敬一郎（一八四九―一九三四）の次男。明治二十六年（一八九三）安川松本商店創設、大正八年（一九一九）明治鉱業社長。のち日本石炭社長、貴族院議員など。
(28) 森村開作（一八七三―一九六二）か。実業家。森村財閥の創設者である六代目村市左衛門こと森村市太郎（一八三九―一九一九）の次男。大正八年（一九一九）、父の死去に伴い森村財閥の経営を継ぎ、男爵を襲爵。昭和三年（一九二八）七代目森村市左衛門を襲名。
(29) 熊谷直太（一八六六―一九四五）。弁護士、弁理士、政治家。前橋地方裁判所、東京地方裁判所等の判事を経て、明治三十八年（一九〇五）より弁護士・弁理士として活動。大正元年（一九一二）衆議院議員。
(30) 三井泰山（一八七五―一九四六）、本名は高泰、通称を守之助。別号に巍々庵、宗泰。芝浦製作所（現・東芝）会長、三井銀行取締役、三井物産社長などを務め、三井財閥の発展に寄与した。
(31) 五島慶太（一八八二―一九五九）、号は古経楼。実業家、政治家。鉄道院勤務を経て大正九年（一九二〇）武蔵電気鉄道常務に就任、二年後に目黒蒲田電鉄を設立し、昭和十四年（一九三九）に両社を合併。同十七年、東京急行電鉄（現・東急株式会社）設立、十九年（一九四四）京王電気軌道を合併し「大東急」と称された。同年には東条内閣の運輸通信大臣を務めた。
(32) 九鬼紋七（一八九五―一九九〇）、本名は徳三、号は寿園。四日市九鬼家九代目。八代目九鬼紋七（一八六六―一九二八）の長男。政治家、実業家。昭和八年（一九三三）九鬼商事社長、同十四年に三重銀行頭取。同十七年（一九四二）衆議院議員、同三十二年（一九五七）、四日市商工会議所会頭など。
(33) この茶事のことは、『日本の茶道』通巻一三四号（昭和十九年一月発行）二二～二五頁所載、松永耳庵「名残の三席三様」中の「般若苑鈍翁薦事」にも記録されている。
(34) 現在、畠山記念館蔵の「柿の蔕茶碗　銘毘沙門堂」（重要文化財）。
(35) 沢田宗味（一八七五―没年不詳）。金工家。特に銀製茶道具の製作を能くした（京都国立博物館『畠山記念館の名品』展図録、令和三年十月）。没年は不明であるが、畠山記念館のご教示によると、同館による調査で沢田宗味は昭和二十二年（一九四七）に七十二才であったという情報が得られている。
(36) 「東某」については不明。
(37) 本書影印本下巻の「人物略解説」七四一頁に「谷山　柳瀬平林寺僧侶」とある。
(38) 本書影印本下巻の「人物略解説」七四一頁に「田中健介　東邦電力社員」とある。
(39) 鈴木鹿象（一八九二―没年不詳）。大正六年（一九一七）九州電灯鉄道入社、昭和十四年（一九三九）東邦電力取締役、同十七年に中部配電副社長、同二十六年（一九五一）中部配電取締役等を務めた。
(40) 横山通夫（一九〇〇―一九八三）。鈴木鹿象と同様に九州電灯鉄道、東邦電力勤務をへて、昭和十七年（一九四二）中部配電理事、同二十六年に副社長、同三十六（一九六一）年に社長、のち会長等を務めた。『松永安左エ門翁の憶い出』（財団法人電力中央研究所、昭和四十八年）の中巻に寄稿し、松永との関わりについて「ある時は秘書的な役目だったし、代理者格であった」と述べている。
(41) 本書影印本下巻の「人物略解説」七三六頁に「金坂　東邦電力重役」とある。
(42) 田中精一（一九一一―一九九八）。実業家。東邦電力の専務を務めた田中徳次郎（一八七六―一九三三）の長男。中部電力第四代代表取締役社長、のち会長。
(43) 柳生彦蔵（生没年不詳）、号は酔古。奈良の美術商。
(44) 伊賀焼の陶芸家・菊山當年男（一八八四―一九六〇）のことと思われる。
(45) この二見ヶ浦行きのことは、本書影印本上巻・四〇四～四〇五頁所載「伊勢美濃路一週間の旅行　八月廿二日」に記録されている。
(46) 宮又一（生没年不詳）。美術商社「山中商会」重役。
(47) 正しくは「梅の花爰（ここ）を盗めとさす月か」「松島の小隅は暮て鳴く雲雀」参考：https://jtl.lib.virginia.edu/japanese/issa/KobOrag.html（ピッツバーグ大学・バージニア大学 日本語テキストイニシアチブ）
(48) 「蒲鉾」のことと思われる。
(49) 諸戸精文（一九一二―一九九八）のことか。三重の実業家。諸戸精太（一八八五―一九三一）の長男。諸戸タオル社長。
(50) 服部章三（生没年不詳）、号は梅素。美術商。
(51) 三井高棟（たかみね）（一八五七―一九四八）。三井惣領家（北家）第十代当主。男爵。明治九年（一八七六）三井銀行（現・三井住友銀行）東京本店入行、同十八年に家督を相続し、第十五代八郎右衛門を襲名。同二十六年（一八九三）三井組総長、四十二年に三井合名会社設立。昭和八年（一九三三）に次男高公に家督を譲ってからは、大磯に築いた別邸「城山荘」に隠居した。
(52) 正しくは加藤唐九郎。

お厚志を謝して置いた。翁は兎も角春草廬を実見されたしと同道せられた。元より春草廬ハ、原家所有後承知であり申分なき疎開場所でハあった。この頃既に安太郎氏一家ハ疎開していられ、附近農家にも疎開を求むる人々さえ多く見受けた

已上お茶を頂き我が身辺の保安についての厚意を萬謝し、夜ハ上京中の長男との会食約あり急ぎ帰京し、兵営より次男の届けし酒にて、各自これからの護身方法につき懇談した。

政府ハ愈々疎開重点方針を今日発令した。それによると世田ヶ谷以外全区に渉り

〈註〉

(1) 結城豊太郎（一八七七―一九五一）。銀行家、政治家。日本銀行大阪支店長などを経て大正十年（一九二一）安田保善社の専務理事、安田銀行副頭取。昭和五年（一九三〇）日本興業銀行第六代総裁。同十二年（一九三七）一月に日本商工会議所第五代会頭、翌二月に林銑十郎内閣の大蔵大臣に就任、同年七月からは第十五代日本銀行総裁を務めた。

(2) 現在、福岡市美術館蔵「清拙正澄墨蹟（与元中別称偈）」（重要文化財）。

(3) この「翌廿九日」は「翌十九日」の誤記とみられる。

(4) この茶事のことは、『日本の茶道』通巻一二五号（昭和十八年三月発行）二三頁所載「美術会館名残の展観と茶会」にも記録されている。

(5) 鷹巣豊治（一八九〇―一九六二）、号は英峰。美術史家。大正十四年（一九二五）より東京帝室博物館（後の東京国立博物館）に勤務。昭和十五年（一九四〇）鑑査官、同二十二年文部技官、同二十九年東京国立博物館学芸部美術課長。

(6) 桂又三郎（一九〇一―一九八六）か。陶器研究家。特に古備前の研究で知られる。

(7) 福岡県鞍手郡鞍手町にある「古月横穴」（国指定史跡）。

(8) 浅川伯教（一八八四―一九六四）。朝鮮工芸研究家。大正二年（一九一三）朝鮮半島に渡り、弟・巧（一八九〇―一九三一）、柳宗悦（一八八九―一九六一）らとともに朝鮮陶磁の蒐集、調査研究に努めた。同十三年（一九二四）京城（現・ソウル）に朝鮮民族美術館を設立。

(9) 名古屋の釜師・第十一代加藤忠三朗（一九一三―一九八二）のことと思われる。加藤家は江戸時代、尾張徳川家の御用釜師を務めた。

(10) この茶事のことは、『日本の茶道』通巻一二八号（昭和十八年六月発行）一九頁所載「野水庵観音堂開眼供養」にも記録されている。

(11) この茶事のことは註10前掲書の二三頁所載「山澄、細雨の初風炉」にも記録されている。

(12) この展観のことは註10前掲書の二五頁所載「根津美術館　第四回展」にも記録されている。

(13) 本書影印本の「人物略解説」七四八頁に「利恵次　新橋　芸妓（菊村）　新橋の芸者頭取」とある。

(14) 『大正名器鑑』所載（高橋義雄著・林屋晴三監修『復刻　大正名器鑑』第八編、アテネ書房、平成九年、一九一～一九二頁）。

(15) 石井光雄（一八八一―一九六六）。銀行家。神戸地方裁判所検事から朝鮮咸鏡農工銀行へ転じ、朝鮮銀行大阪・東京支店長、朝鮮殖産銀行理事を経て日本勧業銀行へ。昭和二年（一九二七）副総裁、同十一年（一九三六）総裁。

(16) 田邊加多丸（一八八四―一九五一）、号は無方庵。小林一三の異母弟にあたる。明治四十四年（一九一一）より日本勧業銀行（のちの第一勧業銀行）に勤務、同行福岡支店長、理事等を歴任。昭和二十二年（一九四七）には東宝株式会社の第二代社長を務めた。

(17) 正しくは「般若苑」。

(18) 註14前掲書、第九編、七三～七四頁所載。

(19) この茶事のことは本書影印本上巻・三九五～三九七頁所載「信濃町瓢庵の茶　四月十四日　正午」及び松永耳庵『茶道春秋』（昭和十九年刊）下巻・一五八～一六一頁所載「信濃町瓢庵茶事　四月十四日正午」にも記録されている。

(20) 亭主の補助役をいう「飯頭」の誤記または当て字とみられる。

(21) この茶事のことは、『日本の茶道』通巻一三二号（昭和十八年十月発行）二一～二三頁所載、ましら山人「箱根の茶信（第二報）」にも記録されている。

(22) 土橋嘉兵衛（一八六八―一九四七）、号は無聲庵。別号に玄琢、仲選居、未足軒など。京都の美術商「土橋永昌堂」初代。

(23) 熊谷直之（一八七五―一九七二）、号は夢香。実業家。香、書画用品専門店「鳩居堂」九代目。

と、寒さにハ何よりの牛や鶏肉のスキ焼と云ふ、クダケた会食。釣名人の主人の獲物か鯉の刺身に鯉コク、特配でもあるか鮪の刺身に焼物迄と云ふ振舞い。親(ママ)いしい連中には此上なき馳走に耳庵翁の放談縦横、沈黙の古径氏との対照の裡にお茶の用意も出来しと見へ

隣室茶席に移る

床にハ元僧、道潜和尚妙総大師の墨跡(60)、花入、古銅に白玉山吹の実を挿してある　水指　古備前　茶入、盛阿弥作下フクラ

茶杓、鈍翁作　茶碗、長次郎作赤名物無一物三溪翁旧蔵と云ふ大奮発、兼て斯くあるべしと期待はしたが主人のお手前ハ今日が初めて、手順などお構

なく濃茶を練られたが、茶丈ハよく点っている。お手前にとらはれぬ處に妙味がある。

前後したが　香合ハ乾山の絵高麗写で炭手前などはなく香丈一炷　菓子ハ羊かんであった。

茶が終って露地を広間に。彼岸を前に寒い日である。風さへ強く席を出ての寒さハ身に沁む　広間にハ何の飾もなく豊富の蔵品がありながら

只番茶水果子のみ、他は美術家を交へ耳庵翁の天狗談に吹きまくられ、縣君又近来大分小天狗振りを発揮され愉快な一時であった

長次郎無一物ハ益田家赤一文字と同じ姿の作行なるも、腰の当り少し高く、内部底の厚い為いつの時代か見込を摺り取られてあるのが欠点、品の良い茶碗である。遠州旧蔵不昧公旧蔵

○柳瀬荘政斎と兵隊の茶　　四月十日

p 478

何の意味か耳庵翁から政斎ト兵隊の茶ヲ催したいとの電話。二ヶ月以上も柳瀬には出掛けぬ自分にハ、其意味も不明、近頃売出の日野(ママ)菫平麦ト兵隊でもあるまいと、交通苦に

タメラッたが、縣君からも兵隊を一人連れて出掛るから是非腰をお揚げなさいと誘い出に、野菜でも買出気分で出掛た。東上線ハ買出人で車内ハ満員と不潔に鼻持もならぬ

然し何と云ふても花の季節、田舎道は気持よく、買出人で農家丈ハホクホク顔

山荘にハ縣君の外一人の来客さへない。流石の耳庵翁の引力にてもこの淋しさ、翁の近情ハ團家に於る美術研究会の模放(ママ)位い。それ丈戦況の非なるが偲ばれる。扨今日ハ縣君を主として余ハ相伴格、食事ハ、翁トッテ置と言はれる、糟汁に塩鰤　野菜煮と麦飯　所謂兵隊的食料、生活もドン底となって侘び茶が出来るもの、菓子ハお芋の布巾絞り

お茶とて母家囲炉里の間を構い、鉄風呂に筒釜、構い屏風に此の頃仕立られし因果経の一枚を幅に、表装ハ中銀襴小牡丹上下浅黄地一風竹屋町にて水指ハ銀薬罐　茶入備前土新兵衛作　茶杓、山科宗甫小庵の子

(宗旦の弟)　茶碗ハ熊川大ふり　にて濃茶ヲ拝服した。茶を味ふにハ少数に限る。いつもながら茶は良く練れていた。この熊川茶碗ハ初見の茶碗。

翁の話でハ、以前の熊川と交換したとの事、予もそれにハ賛成、茶入新兵衛ハお自慢に見受けたが、それ程とも感じられない。茶杓ハ良いよふに思れるが、筒書に数ヶ所消した迹あり感の悪い物であった。猶おお茶後桑時代益に、宝相華紋ある鍍金地鎮器を飾られ、至極お自慢に見えたが、其形式からでも鎌倉中期の物、翁ハ藤原と自称された。これも

最近の獲物、瀬津君当りからでもあらん。或る専門家ハ平安期と称へしとの事予ハ速直に意見を述ず観過した。

猶談話の中、東京市街の空爆も身近に逼って来た。貴所の為、春草廬を提供します　身辺の安全をはかられたい、この点につき中村君へも貴所に進めるるよふ書面を出して置いた

是非早急ニ実行せられたい。春草廬も狭いから、雑品置場の小屋丈ハ建て差し上ると心から

の好意に感激したが、予ハ翁の性格も承知であり、我まま物の予とて決意もつかず

露地行灯の点々と配置よく、夜の戸幔に見る広い園内の夜景に風致を添へる。お主人の得意も察られる内　鳴り渡る銅羅七点夜霧を破り梢につたふ。土間に寒さを防ぐ炭火、桶の火鉢、志野火入の莨盆などの心尽しを迹ニ再入席ハ流れの小川に大舟形の蹲に身を浄めて　床に春屋禅師筆白紙の詩　文ニ曰ク

「若不問床■雪知波庭穿　表装ハ遠州公特に好の仕立
前大徳三玄老納春屋叟　応ニ俗■書焉□□」　絹地に押型印金　箱書舟越伊豫守　この仕立が美に過ると正客は批評せられば、茶道からハ適言であるが、主人の説明では、元加州前田家蔵品とかを考へると加賀公と大徳寺の関係は、ただの茶の湯のみでなく信仰の点もふくまれ遠州も其の意味から指導したのであるまいか。何れにしても円鑑国師書下しを見るが如き紙中と、其条幅の上部に澄厳の書跡は春屋中の名幅である。

水指ノンコウ作　桐の絵　前後にあり

茶入唐物轆轤目　小肩衝

挽家書　宗甫　袋弥左右門漢東（ママ）（39）　外一鶏頭片身替り

茶杓宗偏作　銘五十鈴川　歌銘「神さびやふりてい寿々の川風に　ひよいひよいと鳴る御笛かな」　茶碗釘刻伊羅保　銘（両彦）　已上にて濃茶を頂いた

自分は兼て伊羅保茶碗に餘り好感を持たないが、塩原家蔵伊羅保を拝見して初めて伊羅保の真価を認しが、今又この両彦伊羅保に出合い、其姿特に高台廻りの雄渾のヘラ目使い、内部の作行を見るにつけ、其の秀れし事を改め認識した。此両彦を見て塩原家蔵品より一段優位であるまいか。猶銘両彦についてハ此茶碗元江州の或る両替屋某の所蔵なりし為と或ハ所蔵者が両替屋彦兵衛とでも言いしか、何れの伊羅保に優る名碗である。

お茶が終り長廊下を経て広間に動坐す

大広間にハ梁楷筆猪頭和尚の像　表装中大牡丹印金　上下花兎印金と云ふ豪装のお幅が掛り　床内に大籠花入に紅白牡丹が挿され

床脇棚に光悦の巻が軸盆上に飾られ　番茶水果子など数々のお振舞があった。さて自分には梁楷と云ふ絵にハ餘り接しなく、其の良否について兎や角批評は慎むべきであるが、元より宋絵にハ特徴のある物、この猪頭の面相筆致にも唐画の様式ハ表れているが、衣紋の全体特に脚部の右より左にかけ無雑作に筆太に引きし線など感服しがたい点がある。

猶この幅ハ双幅にて他に蜆子和尚の像があると、古来名画として尊重せられし物丈、見者に依って、それぞれの見解あらん　識者の意見をまつ外はない。扨光悦の巻ハ先年京都博物館に於る光悦展にも出陳せられ、下絵ある長巻、巻尾に下絵筆者の奥書がある。次に一言加えたいは梁楷の前に籠の花入ハ何にか不釣合に感じられた。寧ろなき方無難であらんに。

斯く愚案を誌したが、前後を通し流石万事お入念のお主人とて、ただただ感激する外なく、この豪華な茶事の内にも空の爆音を聞く　詢に仕合此上なく十時お開お暇した。

○好古堂主之茶　三月十八日　昼

p 477

中村氏ハ東都唯一の書画商として活躍し其の鑑識も古画は勿論上代仮名、器物にも郡を抜き才智優れながら、この時局に際し骨董界を隠退した。働き盛りの年歯を持って時代を達観したのか惜むべき人である。氏が釜を掛る事は目珍しく数日前から一同お越しをとの話が今日実現し正午前出掛ると、

客は凡テ常連（松永耳庵翁、小林古径、前田青邨両画伯　縣君に丸岡老と予の六名）

離れの広間に恩師原三溪翁筆隅田川実観と題する春雨に漁舟の幅が掛り丸テーブルの用意にて先づ食事

茶碗、白庵銘（白鷹）　已上のよふな大舊発お道具組にて　お正客ノ讃詞は申迄もなく、いまだお壮年のお濃茶は練られ、これに対するお主人にて斯く迄名器と侘びのお手練ハ岳父の御指導あるとしても末おそろしきお振舞いトただただ感激せられるのみ、濃茶一巡後お薄のふれまい

茶入ハ根来の仏器　茶碗御本、替ハ一入の黒と云ふ至極軽く取扱れた。前席の経筒花入と云い、澤庵の夢の幅、薄茶器及食器など

から考へても何にか、お供養のお催に考へられる。予期した桃の節句の気分も見られなかった点からと扨前後したが、炭具ハ組物、羽箒ハ野雁、火箸桑柄、釜敷時代籐組、灰器南ばんであった

香合ハ志野のハシキにてなかなかの優品である。猶茶碗白庵はタンパンこそなきも、其型ち姿の堂々たる、澤庵の出来、水指の良さにハ敬服しながら、戦況に焦慮するこの頃この雅席に無我の境致を与えられしお主人の厚意を深謝し十時過畠山さんの車に送られ帰廬した。

○畠山一斎翁之茶[58]（ママ）　三月十七日　夜会

P 474

朝鮮総督として赴任の小磯将軍が日支及大東亜戦に於る多数戦没した勇士の霊の迷（ママ）福を祈りたい為任地より将来の仏像を増上寺境内に奉祠したいからと其仏像附属品の依嘱を得ていたのが出来したので二三日横井夜雨老が受取りに来られし際昨夜畠山家で藤原暁雲翁お夫婦を主客で茶を催された、貴兄もお越しと思いしに田中翁及中村氏丈であったが、なかなか良い道具組であったとの話し、時節柄連会もあるまいと思いしに昨日突然お案内を受け、時刻五時に出掛けると、其の折

松永夫人が立寄れ木炭一俵お土産に、燃料不足の折とてお厚意を謝した。車上を見ると耳庵翁の外坊主刈の青年一人、それは応召の為名古屋から上京の田中誠（ママ）一君であった。

一月名古屋で別れて以来、君も亦軍人としての応召かと祝福やら何となく暗い思い、君ハ明治学院前で別れ畠山家へ。さて合客ハ（松永さんお夫婦、杉本九八郎翁お夫婦　荻野博士　と予）の六名）

沙那庵寄付壁床ニ　浄弁の短冊「やまもとのさわたの氷とけしより　万つお■きちてわかなつむや　浄弁」莨盆舟形、火入絵和蘭陀

振出朝鮮唐津汲出朝日焼　栗盆ニ間もなくお主人迎付に自然の林間長露地を耳庵翁先頭に荻野博士杉本氏同夫人松永夫人と順にお席に繰り込む

床ニ備前花入　花白玉に山山椒　釜、古芦屋黄銅蓋信長所持ひさご、細口

「紹鴎手紙ニ芦屋ふく遍金の□□天文三年極月十八日の朝信長公御受被下　このふく遍の釜御数寄屋にて拝見仕し間此趣よく覚へ可申為如此かしく」「永禄八年九月十日　紹鴎」薮内長■兄

此釜は肌色赤味をおび光沢あり　鈬ハ遠山である。見るからにウルワシく、肩より胴にかけての柔い線　古芦屋に見る鈬附細く、姿からして　ふく遍と云ふより蒲団釜とも云ひたき型、兎も角名釜である。

炉縁時代栗ヤツレ　香合、染附水牛、炭斗歪菜籠宗和箱　羽箒大鳥　鐶象眼、火箸桑柄上ニ釜敷籐組変り物　灰器長次郎了々■之

箱裏長次郎　ふくへ宗旦トアル　お炭がなされ香一炷、香器拝見、水牛ハ名物型物とて申分なく、炭具又よくスクレシ品のみ、おはりて

懐石向鯛の甘酢乾山作　絵替り汁合せみそナメコ　椀生鱈下塩ニ海草　煮者（ママ）生ゆば、白魚青野菜　金襴手玉取獅子

焼物サワラのテリ焼黒織部手鉢　進め魚源五郎鮒器呉須　文字入歪湯フキノトー　この外只今到来しましたと、鮒の刺身を織部平鉢に（ママ）に盛れ、片手にご自慢の朝鮮唐津の徳利を無地芙蓉杯を金襴手杯台にのせ悠々持出れた。正客から順に改め亦名杯を頂く。お湯に次き唐津沓鉢に香の物と云ふ有様

これが食糧に不自由する世の中かとあやぶむ程のお献立、鮪の特配など小田原流にも見えるが、先夜服部さんのお催しにも禾日庵主の特配、配給多いは仕合だが、一面にハ斯くまで物の豊富のあるべきかと、日常生活に悩む我々にハ眩惑さがある　お菓子ハ小豆の布巾絞りを美味に頂き中立ち　流れに添い林間の腰かけに

予ハ初入りとて自作鎌倉刻一輪菊の香合を呈した。

○於る禾日庵服部山楓氏の茶　三月三日

P 472

三国同盟　対四十ケ国を相手の世界戦も其の一角伊太利の降伏、独逸又敗戦に続く後退の悲境と共に、我日本も赤道迄も侵略した深入は米英の新英の猛反激に今や後退又後退の悲運

と共に輸送力は米艦の奇襲空の猛爆に甚大の損害を受け物資欠乏は其補給さえ劣へし上国民生活ハ日と共に極度に窮迫に追込まれし上　敵の空爆は本領の各地に爆撃を加え都市の住民は安全地帯を求め疎開を初め其の不安におびえている

こう情態で美術界の沈静は言ふ迄もなく、其の資材さえ入手不能の浮目となり作家の苦境はドン底に落ち入った。従って茶趣味の如きも有るべき筈なく、あるとすれば此悪環境に一ト時の慰安を求める方弁か■と言ふのが適言である。

警戒の空の爆音に目覚る今日三月三日ハ雛祭　本来ならば桃の節句に娘もつ母など楽しくも雛段飾り児女の行末を寿ぐものを、児童疎開に家庭の別離と云ふ非常事態、然し薄霜はあれど何と云ふても水ゆるみ春はおとづれた。

この朝塩原夫人から電話にて、服部が主人で釜を掛けます、畠山さんお夫婦もお越になるとのご案内。昨秋から永くお無沙汰中でもあり、よい折とてお受けをした。

時刻ハ五時　表門からとの事、自分ハここ数日防衛団からの指令で防空壕の穴堀を女中相手に玄関横に構造中、こう言ふ不安中にも一夕の雅客に列する事の仕合を喜びながら、戦況のニースを聞きつつ時刻迄土はこび

指定の通り表玄関より階下の洋間に通ると、ここには徳川初期からの見事な雛段が設けられてある。其の何れもが優美高級な物ばかり。側には名人作の羽子板の数々が飾られあり、この雰囲気ハ外部の戦々兢々たるとは餘りの相違である。先着の自分は今日の催は雛に因みし催しと思ふ内、お当家禾日庵主人が出坐され、私も今日はお客の一人と久々のお挨拶の後　時局の重大さにこん後直面する戦況の推移についての意見を述られ、従って児女の為に集めた雛道具も今年限りお別れ覚悟で取り出して見たとのお話し。

間もなく（畠山さんお夫婦も参入さん（ママ）今日のお客ハこれ丈とて　服部さんのお迎つけにて　畠山さんの正客で）

階下禾日庵に入室す　床に■合式経筒　共蓋花入、花はしばみ山椿　釜

釣自在、竹四方ハツリ　傳首坐不遠庵朱書

傳首坐ハ京都龍安寺塔頭大珠庵ノ住号ハ不遠庵　宗日判」　花入経筒にハ銘文あるも後刻である　釣釜ハ藤の巻ツルにて詢に面白く　自在との取合よく

已上にてお懐石具ハ応量器根来角切膳と云ふ趣向向平目糸造り干柿入鱠　汁合せみそ山形産ナメコ　器ハ鉄なべ

飯器木地薬師寺の焼印ある手桶　椀豆腐あんかけ　進め魚生雲丹祥瑞筒ニ　平目の刺身を長角新鉢ニに（ママ）

強魚大根輪切伊勢えび　煮込を鉄鍋に焼玉子、鳥のキモ　㊒公樹以上串刺　器永楽和全作赤絵魁写　酒器ハ銚子金襴手獅子蓋粉引ヘン壷ノ徳利

杯腰捩、唐津瀬戸椿手六角　香物澤庵薄切　三島鉢、菓子と云ふ大盤振舞に応量器に鍋の扱お主人のお説明でハ、平目の刺身雲丹

など御当家より特配との事、何れにしても時節柄ただならぬお献立にて正客初め感服やら驚きやらの内満腹の腹を抱へ敷瓦廊下に動座した。

銅羅の迎ひ付と思いしにお主人自らのお迎に　再入席すると　床ニ澤庵筆　夢の大字ニ夢入夢出云々の細字ある竪幅が掛り

水指、備前矢筈ハンネラ蓋　見込ニ㉚の窯印　茶入、凡手瀬戸銘白浪、　袋花兎　茶杓、遠州作歌銘、渋紙庵宛渋紙庵ハ小猿動閑

本来お茶は正客を主とする事ハ言ふ迄もなく、其の為一会を催すには正客に由縁のある人々を加へ、互ニ遠慮なく茶を味い、主人の心入による道具組を賞し一時の歓境を無我に娯み、主人の当日正客への心構へを深く翫味すべき物丈、正客の心構の良否により此の一時の催に主人に対し活殺再而を生するものである。

それ丈正客の任務も重く、主客一玉に融合するにハ正客次第である。現在正客の自他共に許す保の人にハ、何と言っても、藤原暁雲翁、畠山一清翁に松永耳庵翁の三長老を推けたい。他に陰ノ達人塩原禾日庵翁や加藤犀水翁あるも数寄者としてハ皆一流の方々なるも、主人側としてハ別問題　正客としてハ、自分ハ斯く信ずる

お茶にハ又お詰の役ハ正客同よふ重い役柄にて、茶の心得は勿論鑑識を備へた者でなくては勤め得ない物

然し餘り識た顔するよふでは何となく否味が感られる。話術あり茶歴に明るければ此上ないが、それ程六ケ敷物、今は骨董界を隠退悠々安房の片田舎に自適している伊丹揚山君など其一人者であった。

さて宗保宗匠の（桜新道新居を訪ると、これ又堂々たる構へ）茶匠の住と（云ふより大実業家でもあるかの門戸、これ丈でも茶匠としての真価は時の寵児と云ふ）の外ない　合客ハ例により（松永耳庵大人、田中親美翁予に福田君、瀬津君お詰役）

玄関脇待合兼席床ニ（伊川院着色お福の絵）花籠提げて讃ニ（易不不難）とあり（唐物泊絵丸益ニ魯山人の汲出瀬戸の振出しフクサを掛け）

炉に（広口の釜）蓋（置きを添へ、手附莫益ニ赤絵火入、籠の火鉢敷物と型の如くである。掛物お福の画ハ正月福を得、お福の容姿が婦人に対する男性の易不不難を表現したもの）

迎い附により廊下より縁側庭伝いに露地を、新庭の落着きなきも広い庭、蹲など真黒石の尊大的ハ宗匠好みか　正客に続き入席すると

床に（茂古林墨跡海一栗と）云ふが掛らる　釜ハ（阿弥陀堂縁ハ栗）　釣棚に（香合織部三茄子絵）炭皆具ハ省略す

お手前ハ（見事）にて懐石　向（鯛の昆布〆器ハ織部）　汁（三州若菜）　椀（えびシンジーウ鶴菜）　焼物（甘鯛塩やき）　器（染附雲鶴手鉢）

強魚（大根人参若鳥煮込）　重箱盛（進め物カニの子）　梅竹松小鉢ニ（小松菜おひたし唐津片口）　八寸（貝柱キントン）　湯（フキのトー）

香物（白菜外一）　萩　酒器（朝鮮唐津徳利刷毛目徳利）　杯（染附枯木カン鳥外肥後焼）　菓子（翁堂制鶉豆）　赤絵（大鉢に もり）

扨懐石ハ（時節柄なみなみならぬお奮発、これが連会丈に容易ならぬと敬服し横の腰掛に中立　程よき処で　銅羅の引入れ）

花入（宗旦ノン子（えとある予の旧蔵）尺八）　花ハ（酒中杯と称スル白の侘竹ニ梅）　水指（お室焼信楽風）

茶　春慶銘入　足引

茶杓（利休筒ニ抛筌斎作茶杓）　良休宗佐　茶碗（長次郎作銘枯樽）　仙叟箱　已上にてアサヤカなお手前にてお濃茶を巡服し、次て　お淡　茶碗雲鶴手歪碗

茶杓（宗中歌名）干柿　菓子お手製味噌松風にてお振舞に一同お丁重な持成に歓を尽した。さて万事が規格にはまり我々無我流の参考にもなったが、長次郎黒ハ初代作と云ふより二代常慶作と見る方正当ならん。常慶代作としても良い茶碗、口作高台作にも斯く見る方的確と信ずる。猶茂古林ハ元郷家所蔵のよし。正客近来墨蹟に執心とて満足であった。文ニ曰ク

「海栗居士親書此賦笠仙僊蔵主一見旦■我郷雖海外邦文物之、盛無今日■■各布施　春帰本國■可以終身之栄也　由是不■贈之、泰定四年九月二日休居叟清茂書」（表装中紗金襴一風印金）

番茶と（なり宗匠の話の内　近来茶宗匠は型にはまり過ぎ面白くありません。私丈ハ型破りですと如何にも侘び家に言はれた其型破りでもあるまいが、茂古林墨蹟の迹に黒く虫喰竹筒の花入は何）としても不釣り合　破るもよいが破りよふ悪ければ見苦いもの。猶氏の花入ハ自分久しく所持せるも虫食の甚しい為勘当した物で、ここで巡り合ふも何にかの因縁、釜　茶入ハ評する迄もないが、お夫人のお手料理と食器丈ハ長尾さんのお蔵か、瀬津君蔭の援助かよく取合せ楽しい限りであった。

き木賊が背負籠に入れたまま置いてある。成程畑の奥にハ木賊が密生している。土間より六畳の間に上ると

一間の床　六尺程の深い地袋がある。床にハ光悦の文　花入細川三斎作　二重切に　花白玉に山吹草　風炉鈥附鉄、板ハ寸松庵瓦

風炉先利休正宗の張交　昨夜幸楽の趣味とハ雲泥の相違、袖なし姿の朴訥な主人がこの古びし田舎家に如何にも良く調和される。さて挨拶の後　粗末な食事を差上げたいと、

運ばれしは箱膳仕込向人参サイノメ切胡摩あへ　汁椀山挽、茶碗杯など添へ　汁鉄鍋持出し地みそ　焼物塩鱈、器ハ織部フタ物

強魚山ノ芋甘煮　器赤絵丼　香の物蕪の浅漬薬味そへ　番茶と云ふ侘びに徹した献立、主人も共に相伴され老練な女中の給仕に、特に飯にハ麦飯と云ふ心入れにも敬服

した。今度の旅行ハ松永大人のお蔭で到る処精白米　ただ宮さんの朝の麦飯と当家丈この幽玄な振舞こそ真に茶趣味の極致である。こんな訳で正客の満足も一段と深く、食事が終りて、

水指黄銅手附水次茶入桃山時代時絵菊の絵棗、茶杓堀の内宗関（ママ）銘若葉、茶碗瀬戸黒平筒銘野鳥　建水曲

菓子ハ山の芋ツフシ飴かけて　已上にて主人の手前で濃茶を練られた。なかなかアザヤカさと、其の風格から人並以上の躯もすべての道具に融こみしも達人からならん

茶は良すぎてもよくない。まして慾けが見えては猶更である。杉浦さんのこの茶こそ詢の茶であり侘の真随を発揮せられた雅会であった。扨　帰京の予定が十二時半とて名残をおしみ直接駅に向ふ。駅にハ鈴木さん初め安竹重役[53]　田中君外二人の社員が荷物を持ながら見送り座席の用意も出来　至極楽楽と上車　各位の厚意を謝し熱海着ハ六時半、駅には女中の迎いで桃山着、四日間の疲れを温泉町で癒さんと娯んだも甲斐なく、温泉が出ないとて風呂ハ休み失望したが、留主中下之関より海豚（ママ）が到来とて奥さんが早速ブグ（ママ）ちりにて食事は仕合

又もお茶と言ふので清子手造の羊かん残りを奥さんに進むと、耳庵翁もアレは美味かった

私にもと小供のよふにムサボラレ共に一服し、旅中の話に夜をふかし、特に津からの車中の出来事に大笑であった。静かな夜の熱海桃山に夜を明した

未明に起ると片雲なく好晴である。伊勢の二日に待望の陽出をよく拝せれなかった私には相模湾水平線に昇る旭日にハ初島大島と云ふ島々の雄大と壮厳さ譬へよふなき壮快さである。この大自然の恵みは宇宙の世界を公平に恵れながら、文明の罪ハ強力の武器を備へ他国を恫喝し今日の如く数百年の文化の歴史と幾百万の人命の血を流す惨事をかもすとは不自然の甚しきをかこたざるを得ない

まもなく家族の方も起床、朝の食事が終ると自分ハ携帯の茶箱で一服上げたく、女中の打水、奥さんの釜の用意中　庭の野梅に山椿を青磁浮牡丹の花入に挿し　水指備前の矢筈　ハンネラ蓋茶入ハ南蛮内渋芋の子　茶杓海松自作　茶碗定慶（ママ）[54]黒筒　香ハ芝丹一炷し　床にハ主人自ら太郎庵筆玉手箱に釣翁の絵を床にかけらる

已上にて耳庵お夫婦に淡茶を振舞と翁又主人となり　水指瀬戸筒　茶入黒棗　茶杓太郎庵作銘釣の翁　茶碗粉引銘十国

にて淡茶を進られ互に旅の偲いでをたのしんだ。かれこれする内お昼となり、伊勢海老のチリにて食事を頂き、四方山の話に過し四時お暇し七時漸く四日の旅を終へ我家の人となった。東京は流石に寒い燃料不足で　了

○宗保宗匠[55]の昼会[56]

一月廿三日

――――――

p 470

裏千家鈴木宗保宗匠が近来長尾欽弥氏[57]の庇護により式守蝸牛老逝きし迹　東都に頭角を現し、遠州流小堀宗明と共に茶宗として門戸を張っている。長尾家二近キ桜新道に新席を構へ其の席開きにと松永翁を正客に、瀬津君を通し正午の相伴を受けた。

扨予定の食事ハかつて、柳瀬に来た事のある幸楽と云ふ肉屋主人の案内とて二台の車に分乗して同家へ　居ハ中中繁昌と見え満員　階上に通され、スキ焼やチリにて鱈腹の馳走になり階下板敷

椅子間に移る　ここには　鈍翁筆　一笑の一字が掛り三尺の大炉に蒸籠を掛け湯気が立登っている。さては饅頭　むしと見える。予想とうり美人の女中が大饅頭を名々盆で進める

温いので　美味こと、ここで淡茶でも出る事と思いしに又も動坐、朝からの疲れに少々自分にもヘタバリ気味　なのに庭から田舎家風の然も俗悪な部屋にガッカリさせられた。肉屋の主人の趣味はしかたなきも

こんな家に案内する人の趣味の底さ、同席した八勝館主人は、同じ旅宿旗亭の主人でも非常な趣味家丈我らと同感でハあるまいか、さて床を見ると

松花堂の東坡の絵に　江月の讃　花入ハ■金作　伊賀写　花ハ太郎庵に蝋梅　長炉に釣釜、水指ヘシギ薬かん　茶杓三井さん作

茶碗ハ瀬戸織部沓形　替御本松竹梅にて女中代点でお淡、ここで主人ハ初めて出坐　耳庵翁初め挨拶　いろいろ何にか説明した末、あなたが仰木さんですか　実は先刻仰木さんと云ふ方がお見へになりましてお帰りになりました　会社の方と聞きました。よくお出くださる　詢にお立派な方ですなーとトンダ処で倅が誉られた。先刻横井で田中君から仰木君は今夜お客を招きし故お会い出来ぬと話されたのを思い出し、さてはここでの会食かとうなつかれた。

偽物の松花堂を掛けて得々たる主人に罪はない。之れを売り込む骨董商のまだある世の中　多忙をさいて多くの費用をついやし一会を催す主人こそ気の毒である。要は趣味の底（ママ）い為である。

千代崎の朝からのお馳走攻め　胃も身も疲れ十一時過ぎホテルに松永大人と共に帰った。松永さんの部屋には長男誠一からとて耳庵翁へはマホー瓶に酒　予には果物の包が届けてあった。

ナントいそがしい一日でありしか

△十八日　時計を持たぬ自分は、窓外の明りに目を覚す

観光ホテルの階上窓のカーテンを捲ると名古屋市中も夜の帳幄は開け薄ボンヤリと金城は高く浮き出ている。七時の食事時間、松永さんの部屋をノックしたが翁も昨日の疲れでまだ目覚ずにいられる。暫くして漸く目を覚され、共に食堂に。朝の食堂ハ至極閑散宿泊者も少ない様子、食事はパンにオートミル、紅茶に目玉程の蜜柑　質粗な物だ。八時に社から自動車が来た。今朝の予定ハ熱田宮参拝　車は目珍しくもカソリン車　ヤハリ大会社である

△熱田宮　附近も防火の為の強制疎開で民家は取り壊されあり、それ丈に神域に壮厳さがある。然し皇軍武運を祈る参詣の民草は織が如く玉砂利を動っている。敬虔な祈りを終り

△八事山　八勝館に向ふ。杉浦氏にハ柳瀬で再三度席を共にし昨夜も会い料亭主には目珍く落着き趣味も豊である事丈は知れど自宅を訪ふは今が最初、八事山は市の郊外　車にてもかなりの道程、この不弁な時節と思いながら八勝館に着く。なる程静かな丘陵の場所、耳庵翁ハ玄関に上らず勝手知られし横より裏庭に通られる。松の大樹　楓の老木と自然の庭　女中の案内で広い庭内を丘に上ると園の名に均しき景色、名古屋市街は元より遠く小牧から岐阜養老の山々が一望の視野に入る。只然し時局の為人手不足に庭の手入も届かぬよふだ。今一ツは家業も時節の影響もあるらしい。

母家に近き中坂にハ田舎家らしき茅葺の一棟がある。裏から母家の縁側迄帰ると前夜から泊り込の加藤藤（ママ）九郎が出迎へ用意の待合に案内された。ここは楓谷と称する庭に面した部屋、庭を透し田舎家の棟を望む好位置である。

この寄附にハ織田貞置　筆茄子の絵　と　光広卿の歌断欠張二枚　折が部屋の角にあるのみにて何となく幽玄閑寂さがある。藤（ママ）九郎君とハ旧知の中

柄とて、昨夜の噂など語る内長躯を綿服姿の主人の迎いつけに露地に降り立つ。折柄横山五郎君も馳せつけ共に田舎家へ。この田舎家前は野菜畑となり　如何にも無雑作の構へ、之れを見る丈でも主人の趣味の深さが憶れる。然も土間の入口には、今朝刈り採られし如

床に熊野懐紙「詠花有歓色和歌　きくまてもあまねききみのめくみかな　大君の恵をたたえる歌意は右中弁藤原長房　つゆによりめるはなのくちひる　申分なきも、歌物重なる」のみか床脇に又も寿老の置物長寿長寿繰返しにハ少々相伴人にはアテられ気味である。

囲炉裡を見るとジンギスカン式の大金網が掛り炉を囲いての食卓。卓上にハ新物唐津の深向に杯が添へてあり、平鉢に鰤の刺身にウドの盛合せの採り廻しでお酒と云ふ趣向、其の内津市から出張の料理人に依って大金網に近頃見る事も出来ないロース肉が焼き初めら[ママ]た。伊勢名代の牛肉、固唾を呑んで焼るのを待つ内正客から次ぎ次ぎと分配、トロケるよふな柔い肉調味の良さが美味い

又格別、酒ハ灘の生一本と主人の自慢、豊富な肉ハ主人の配給でたえず分配され、思ふ存分の賞味であった。焼肉が一通りおわると土鍋と掛替わる。之れは又蟹を主として色々の鮮魚野菜入りのチリ鍋　この大盤振舞に流石豪服揃いの連中も驚ざるを得ない。極度に食料不足の折よくもこれ程の材料入手と主人に聞くと実はこの点で苦労はしたが、幸ひ千歳山半泥子の尽力で意外の大漁、また鰻も用意してあるからおゆッくり召揚りくださいとの言葉に一同又ビックリ

其内予ハ電車の時刻もせまりしゆへ耳庵翁に耳ウチし三時と云ふに豊富な馳走に名残をおしみ連客に中坐しお厚意を謝しお暇す。主人ハ玄関迄見送られ予に握手され又お越しはれとの言葉に駅に急ぐ

扨駅に着くと名古屋駅着時刻打合の電車に乗るにハ三十分前の余裕があるのに電車が来た。跡の電車に乗ラなければ迎いの者との打合がある事を翁に伝へたが聞き入れず成行にするとて飛び乗られた。酒も過し大食中飛び出し相当道のりヲ急ぎし為食事ハ折り合はず注意はしたが例の性分、白子駅に着くと名古屋行急行の来たのに直ぐ乗かへる。其頃翁の顔色ハ真青になる。之れは変だ、電車ハ満員座席もなく脳貧血でも起さねばよいがと心配する内通路にヘタバッて苦みだした。これは困ったと、座席の人に頼み漸く腰ヲかけさしたが其頃から病癪がおこり初めた。自分は元来時計と云ふ者を持たない人間、然し旅行にハ不自由はよく感じている。それ丈注意はしているつもりで殊に松永さんとの旅行には、処が病癪を出すと手の附られぬ翁とて、時計を持たぬよふな人とハ旅行は出来ぬと喰くて掛る有様。お可笑しくもあり、良い気にもなれば、気を揉みながら名古屋に着くと、私は之れからホテルに行くから正面出口で自動車を雇ッてと言い出された。社の人とも打合せ迎いに来る事になっており横井山王老に行く予定もあるので兎も角降車口に出るよふ進めたがイッカナ聞入れぬ。止むなく正面に出たが到着時間も三十分早く迎いの社員の居る筈もない、自動車又一台もないと言ふ有様でますますお機嫌が悪く、[illegible]ハダルイと見へ又も駅前にヘタバルと言ふ仕末。其内漸く一台のタクシーを見付て乗車した。スルト横井の方に又行くと言出した。運転手ハ行先町名を聞いたが、私には不明翁又町名がわからず、マー行ッみよ[ママ]凡そ知ッているこれこれの処を横へ這入ば判るとトマドウ運ちゃんをドナリ飛出し行けども行けども横井の処に出ず凡一時間も掛り漸く横井を探し出した。驚いたは社の連中一時間も前から駅に迎に行き降車口で待ったがお着がない。不思議だと関係方面に問合したが行衛不明と心配のあまり、社員四五人横井に来て相談中であった。

予ハお可笑さのあまり事の次第を物語ると、松永さんも初めて苦笑、社員連もそれは定テお困りでしたろうと、横井には八勝館杉浦君や加藤藤九郎[ママ](52)君も待ち合せていた。間もなく鈴木副社長も田中精一君と来り大笑の内横井老の手前で淡茶が出てホット一息ついた。

床ニ　藤原為相　六ツ半切「はかやとにさけるさくらのハなさかり　ちとせ見るともあかしとそ思ふ」　かね持「きみかためけふきるたけのつえなれは　またもつきせぬよにもこもれる」　よしの婦

花入　青磁尊式　花椿　紅白　水指　備前種壷　茶入　唐物大海　茶杓　耳庵作銘神路山　茶碗　鈍翁作筒　 　にて

との鎧りあり、茶杓鈴鹿も伊賀を越えての正客へハこれ以上心入れあらん。殊に搗立の餅ハ予が聞きし朝の砧の音がこの餅であった事、私ハ宮さんがこれ程の茶人であらんとは、ウカツにも考へない為予想外に感激した。然も朝とて濃茶でなく淡茶を進ぜるとの挨拶も意義深き物がある。

松永大人も宮さん一家のこの厚遇に対し心から謝意を表られ、それに従ふ我々も深く御厚志を謝した。こうして一泊し望外のお持成しを受けた一行は同じ伊勢湾そい、鼓ヶ浦なる京都土橋老の別荘を訪ふ為名残おしきもお暇し宮さんに駅迄見送られた

ここで一寸書いて置きたい事ハ昨秋から別れる二至る迄一方ならぬお迷惑を掛けし其の間宮さんの夫人が陰の苦労ハ一方ならぬ事と思れるが、只の一度も表面に出られず、別れにのみ初めて見送りに出られた心ゆかしいお心構に少なからぬ其の人となりを感じられた。斯くあってこそ主人の光彩ヲ一曽放つ訳である　△鼓ヶ浦は餘り遠くはないが、乗物不弁二一度白子駅迄に乗替なくてはならぬ

此の行程ハ津市ヨリ約三里ノ道のり、駅より海岸別荘迄土地不案内、鈴木さん丈ハ名古屋に帰られ翁と二人道ゆく人に土橋別荘の処在を尋ねつつ白砂青松の海岸に出ル。天気は晴朗　冬日にも汗ばむ程の好日、海浜の熱砂を別荘裏につく。この邊より先きハ海軍立入禁止の標示があり我らハ紫外線をあびながら海浜に憩ふ内、いつか土橋老我らを見附　裏からの迎い入れを得た。

親みある特徴の早口な老は気軽るにも私は今日の為昨秋京都からここへ着いた、心配なのは魚の事であったが幸ひ千歳山半泥子主の尽力で沢山の獲物が然も山海の珍味大沢手に入りましたと前ふれ。

先づ塩風呂の用意がしてある　是非一風呂浴びてくださいと、自ら袴のまま縁側より湯殿に飛び込み案内、湯加減を見　熱いからと水を入れると言ふ親切ぶり。七十七才の老翁と思へぬ矍鑠さ、現に東西斯界の長老

の一人者でありながら（如斯き気安に人に接する襟度あってこそ此大成の原素とも云へよふ。予ハ松永さんや翁の進められるまま、お先に一風呂あび良い気持となった。）

彼れ之れする内合客も到着された（諸戸清文氏[49]お夫婦　名古屋からは　耳庵翁と　六人）森川如春老、服部章三[50]と云ふ陶工なり骨董商ニ　予の

待合ハ（海岸一望の縁側そい　次ぎの間）この部屋（壁間に　長楽）と刻せる（古額が掛り　隔の襖に）抱一筆「（楽茶碗と　白椿の画）」が懸けてある

歌ニ「（玉椿八千世[左]こめし黒茶碗　長寿老とそいふゆかつ■れ）」（古稀叟　家鷹）の讃があり、さてこそ今日ハ長次郎老黒茶碗でも出るかと噂の内に真紅の椿型の菓子を主人自ら持出し、掛物が白玉であるから紅椿を用い松永さんの七十の賀と私の七十七を寿ぎたいからとの挨拶、さてハお芽出度の趣向と察られる。席入ハ松永さんを先頭に如春老諸戸氏に続いて夫人　服部老のお詰に繰り込む。

ここハ奥の間に炉が切られし　二間続き　床に（為家卿豆色紙）「ちとせまでかきれる松もけふよりは　きみにひかれてよろつよやへん」　右能宣」（床脇上ニ一重切花入　近衛公作銘五十鈴川）

花白玉（囲炉裡ニ　釣釜）　先づ（お炭がある、炭斗灰器）　兼用（千歳山川喜多[ママ]　半泥子作）　南蛮写、水指（信楽矢筈口　森川如春作）　茶入（信楽緋袴[ママ]　銘　箱ニ

如心、裏書了々斎の筆　茶碗、長次郎作黒筒　銘遠山筒（今日庵所持　千家名物）」　茶杓（原叟作　銘柳）　箱了々斎　猶香合ハ志野宝珠

火箸ハ皮巻長、羽箒青鸞　已上にて濃茶を練られ（巡服した。為家の歌味正客の長寿を祝せられる　松もけふよりとあるなど此上なき適幅を初め）

茶入の緋袴[ママ]（などから予想通り初代長次郎黒筒の出現　それに次客手造水指と土地の名家半泥子翁　手造などを取合せられし手腕ハ流石老巧の主人と敬服せざるをえない。殊に近衛公近作一重切銘五十鈴川花入を用ひられしは伊勢の宮居に程近き鼓ヶ浦との由緒は申迄もなく正客翁とも近しき公とて意味深き心入である　前茶が終り元の待合に動坐すると、

寿老の幅が掛っている　（筆者ハ三井高棟翁[51]　ここで考へるのは、長寿を祝すにハ家鷹の狂歌に重分ふくまれし上為家卿の賀の歌今又寿老の画とあってハ主客二人の祝とて、餘り重り過ぎる感あり、水指茶入又信楽など非難はあるが作者に対する接待の意味もあらんが土橋老としてはこの点無頓着でもあろう。扨再席すると

輪郭　この容貌にハふさわしきも、洋食ならで支那料理でもなき蛮的料理に宮さんの趣味の変化の深さが如何に我々に適応せるか、それ丈他の追従を免さぬ点がある。次ハ大鍋と懸かへ伊勢湾鮮魚野菜のフライ之れハ又ウマイ事限りなく鱈腹頂

戴したのに耳庵翁から胃は大丈夫かと注意を得た程に、一休和尚筆ト称する「応無所住云々の一行」食事が一応終ると、掛物のかけかへ　それは

水指根来仏器、茶碗唐津の水指、利用　茶入菊蒔絵平、建水火消壺代用、何と云ふ奇抜さ　滑稽もこの位い人を喰った道具組も目珍しく、さてこの大茶碗を持ち出されし折　不思議にも湯気の立ち登っていた事からか不思議に思はれたそれが茶碗に化けた訳、宮さんとて正客が松永さんでなくば、この荒事も演じられまい。只深い水指に茶を点ルには余程自信なくばと見てあらば、茶杓ハサジにて無雑作に茶をツギ大長茶筅にアザヤカにも見事に茶は練れた。こうなると正客もさる者　大砲の如き大茶碗を小脇に抱へ、物の見事に一啜一啜亦一啜湯タンポでも抱へられし如くこれハ結構との挨拶と共に悦に入られた。

茶道始まり空前絶後と言ふこの茶は宮さんにして発揮される勇猛ぶりである。

邪道と言えばそれ迄だが印象の深い振舞に夜を徹して一泊した。宿所ハ母家風呂の用意もあり浴場も家外に設られ下陰の残月を眺める場所ながら伊勢湾の海温に寒を感ぜず、良い気持となり余ハ鈴木副社長と同室に湯タンポ迄の心尽しに夢をむすぶ

△明れば十七日　いつもの通り未明に目覚た。鳥羽港から前夜の暴食で胃の調子もよくない。早起を幸い浜から日の出を拝せんと鈴木さんの夢を破らぬよふ床を抜け出し家外に出た。家族の人々も昨夜の疲れかよく寝っている。外ハまだ薄暗い。素足のまま海岸に出掛けたが日の出にはまだ時間がある。静か[ママ]から波打きは、遠くアツミ半嶋は朝靄に浮んでいる神秘的の朝の光景に体操に海気を満喫した。此の壮快に名状しがたいものがあった。日の出を待つ間に汀通ハ雲泉居裏の小川を渡り海岸を一巡した。暫く逍遥する内渥美半島の緋の幔幕を張ッタよふに朝日に浮び出た。右方遠く神路山を仰ぐ　昨日参拝した壮厳さを新二した。洋々たる伊勢湾神秘感に打れながらも、この海底に横行する米英艦の潜航を憶ふとき洋上の平和感も消散すかである。只然し自分ハ皇祖宮居近に趣味の茶興を友とし一夜を安じた多幸を喜ざるを得ない。夜は漸く明け放れた。宮家近く迄帰ると砧の音らしきが聞ゆる。それは宮さんの台処であった。

間もなく松永翁や鈴木さんもお目覚にて、サー仰木さん海岸に運動を試みましょふと言れたが、既に運動は先陣として今帰った処ですと答たのにハ、流石に驚れ今一度お出掛なさいと誘れ老ハ雲泉君ヲ訪ふと、同君も起きていた。囲炉裡にハ前夜の善哉鍋が其まま、それを見つけられた耳庵翁ハ鍋の蓋を採りマダマダ残っている　これを温め一服喫ましてと翁らしき注文　然も自ら粗朶に火をつけての所望、止むなく横山君の手前で一服点たが予ハ運動後とて殊更愛服した。斯くして海浜を一周する内　宮さんから田舎家にお這入り被下との案内に雲泉君も共に前夜の大炉の側に坐を構ゆ　囲炉裡にハ桑の根の節に釣薬罐ハ煮え立つつある。主人ハ早速鉄鍋に味噌汁と掛かへ沙魚の蒲■[48]、葱の細切、カマスの干物を炉中で焼き麦飯と云ふ農家風の朝食ハこれ以上の馳走はない。蒲■丈ハ油でイタ[ママ]テあると主人の説明

食事が終ると茶席の方にお越しとの事、夜目にハ気もつかざりしに、朝見ると離れニ小間のあるのが茶席であった。

△磯の松原を透す朝日にスガスガしき打水の清らか、四ツ目垣の囲の露地にハ、之れ又スパラシー伽羅の蹲い、主人に聞くと元奈良元興寺礎石との事　然も角柱用の為其一方が出た処あり、誠にたまらぬ味

この蹲に対した侘びの燈籠の調和を賞し入席すると四畳台目席、古くはないが京都からトラックで移建したとの話し　床にハ

大津絵梅に鶯、花入江岑作一重切、一燈銘再来　花寒菊ニ白梅、水指真の手桶、茶入薩摩銘残雪、茶杓宗甫作宗中箱銘鈴鹿

菓子飴餅、茶碗ハ御本替ノンコウ、黒筒　已上至極軽く侘の中に真の手桶　これこそ寂中の美にて、主客に対する敬意がこもり批評すべきでなく、残雪茶入もお幅

店閉鎖後氏ハ大坂本店を根拠にここ千代崎と交遊していられる。

海外貿易に従事した氏とし意外にたえないのは其の建物が野趣其の物にて粗野農家に劣る程の簡粗な生活ぶり、従って氏の風容農夫に均しき様、生活様式にもバタ臭い気配さえ見られない閑雅な日常に見受けられ、其人格の程も思ばれる。横山五郎君も松永さんの千代崎遊訪に名古屋から特に出張し一夕の茶事を開くよしにて、一行の遅着に今駅迄出迎い留主中との事、田舎道ドコで行き合はなかったかと噂の内提灯を便りに帰宅された。

△お二人の話し合いにて先づ横山君宅にてお茶の接待が催るとの事で宮さんの案内で横山君の宅に。同家ハ海岸近く松林中にある。奇意を感ずるハ門の構えである　この門たるや寺院山門を移建せる丹塗ではないか。場所柄この位い不釣合もあるまいと、門に対して住いも宮家とは相違な構えであるが、土間から大炉に釣釜の板の間にハ炭火に釜ハ沸立っている。

側には茶飯釜よふの土鍋がおかれてある。扨改めてお挨拶に遠路お越でもありお着きの時間も遅れられし為夜道の事ゆえ駅迄お迎に出ましたが、田舎道とて道が違い失礼いたしました。お隣りとも話合い茶丈手前の方にて差上げ、お食事とお泊りはお隣にねがうことにいたしました。お寒い折から温い物だけ用意して置きましたと、側の土鍋から善哉を小丸椀に盛られ進められる。何と言ふ心入の深きことか、流石名古屋茶人の思入れと早速頂戴する。コレは又善哉ともおしることもつかぬのに折角温い物と思いの方良く温ッていぬ冷い善哉であった。宮さんハお自分の仕度もあるとて、ここでお帰　残る三人は改め隣室六畳に通された。時代の建物丈落着きハあル　照明も行灯が用いられている

床にハ西蓮法師三月八日々附の消息　春の日になにあしつみの宮まへにのとけかれとやよおいのるらし　花入、古銅花太郎庵ツクバネ

釜広口水指南ばん共蓋

茶入、一閑小棗　茶杓元節古作　菓子山の芋蒸物、干柿など、前の善哉にて菓子ハ重分なのに又改めての丁重さにてお濃茶の振舞

さて西蓮法師ハ鎌倉期藤原康頼の子、後鳥羽院の頃、康次左エ門尉従五位下にて浄土因果集の作者である　花入ハ図の如く下蕪　下に四筋の耳よふのある姿もよく金ケもよく目珍しき物、大切な茶碗がなんであった

か失念したのは、頭に残らぬ程であっと見ゆ。水指も良く茶杓ハ珠光とか紹鴎とか言ふならんも、昨行の技工すぎるは、其頃の職人作ならん。西蓮の歌意は重節と云い一行の神もうでの帰途に対してこの上なき意味もこもり、古銅花入の見事に挿れしお手並にハ感服した。只海浜の田舎家にハ掛物の花入共今少し侘びてもらいたかった。菓子又善哉丈なら無難なりしに過ぎたるは及ざるとても言ふべきか。之又商人の欠点の現れである。茶の終った頃宮さんの食事の案内に、提灯の光を裏口から、雲泉を別れる

宮さんの席ハ雲泉居とハ打ッテ替った田舎家農家其のまま台所の調度迄其の一ツ一ツが乏し農家のかまへ、部屋の中央には天上に竹竿を釣し引臼迄あると言ふ謂ハ鼻につく程でもある。洋人対手の宮氏にこの半面を意外に感じる

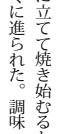
台所近くの四畳半に通ると乏れは又三尺四方の大炉が切られ、煤けた自在に同よふの大薬罐を釣られ、炭壷や火消つぼ迄備てある　板壁床にハ小林逸翁から到来と云ふ

小林、一茶十句書入の幅題独坐「梅の花夏お盗めとさす月か　松島の小隅にくれて鳴く雲雀」題京島原と云ふに入口のあいそになびく柳か那　等々数句であるが、自分は一茶に興味を持ぬ為

其の良否判断ハ出来ぬが、僅か尺餘に窮屈に十句に書き入れる一茶でもあるまい。文字にも無邪気さを欠いている。然し句丈ハこの家に適した物とて善否を捨てハ感興はある。

扨豪傑肌の主人ハ手伝もなく自ら台所より膳を運び　向沙魚甘酢　下手物に　ツマミ物　お酒は薬かんに沙魚の子　ジカかんして

古九谷の野弁当徳利へん壷



にうすし　先づ一献と進られる。焼物ハ鳥の股を串に刺し囲炉裡に立てて焼き始むると言ふ野趣ぶり　これが焼上ると大平鉢にナイフを添へ名々に進られた。調味ハ塩トバタ

白髪まじりのイガ栗坊主の此動作に少なからず驚されたが美味である事タシカと早速ホーク、ナイフで食って見て又驚しハ其の鳥ノ堅い事、ツリ上った宮さんのあの眉、顔の

をつげている。窓にもボンヤリ明るみがさしているので、薄明りを便りに二階にベランダに出ると、思いは同じ田中君も起きてこられた。正面の山の端にハ残月や星さえ残っている　宿のこの裏ハ深い谷をへだてて東より西へと聳ゆる山、地理不明で田中君の話ではあの山こそ一名朝熊さん即ち金剛證寺と言ふ巨刹が頂上にあり　戦争前迄ハケーブルにて登山した程の高山御寺であったが　それも戦争の犠牲で撤回されたとの事、こんな話の内朝熊山にかけ紙赭を引いたよふに真赤に色彩れしは朝陽の登ったから[ママ]れである　神秘的なこの光景も宮居近く丈に何となく崇高さを感じ予期せぬ眺望に払暁の新鮮味を感じた。

一月中旬と云ふに古市の宿ハ東京より温く、これも伊勢湾を控ゆる潮流の関係ならん。七時を前に全員朝の入浴をすまし、食卓についた。この頃の旅ハ宿の食事にも事かぐのが普通なのに食膳にハ純白の飯料理も朝食にハ過る馳走　不思議に思い聞いて見ると、米は元より味噌醤油調味料迄出張所の胆入との事。それにしても食料不足の折、之れ程の食料補給は松永さんの多年蒔き附けられし巧[ママ]績の芽生と敬服した。食事中営業所長田中さんも来られ、昨夜途中夜目に顔さえ知れぬ初対面に、其の労を謝する有様。

食事が終り二台の自動車に分乗す。松永さん　鈴木　田中の人々と我ら同乗　その頃より空は雲におふはれたが静な路を内宮に向ふ。五十鈴川の神橋前にて下車　神橋より望む神路山、右に島路山を仰ぎ、干天続きに水渇れてはいるが清流は河底の玉砂利に銀鱗の上下するさまを眺め、神代ながらの老杉巨樹の聳ゆる参道を宮居に進む。

国軍の武運、我子弟の無事を祈る赤子、朝がけの参詣者引きも切れず、皇祖以来厳[ママ]として精素の宮居に敬虔新に皇軍の武運は祈願し、天を摩す神杉の幾千代へし我国がこの緑の如くイヤ昌へまつらんことを胸におさめ、御裳濯川のほとりを神橋に下り、坦々たる参宮道を外宮に向ふ駅に近いこの外宮亦参詣の群れ、玉砂利敷つめられし神前を拝し　山田駅に出る。

間もなく鳥羽行列車に上車　凡、二十分にて鳥羽駅着。

△鳥羽駅から湾内の風景は、去年長男と共に行きし二見ヶ浦[45]の俗悪に引き更へ流石風光明媚である。駅にハ更生車の出迎もありしが、この風景を車上で眺むるより一同徒歩を望み、目的地に向ふ。碧海に浮ぶ小島、湾曲の海岸を十二三分も過れば眺望佳絶な好位置に中配の慰安建物松風荘がある。言ふ迄もなく松永さんの頭字松の一字からの荘名と見える。寮の玄関に掲げられし松風荘三字額も耳庵翁の筆跡

私は我ままに物にて耳庵翁とは時折衝突する事があり、其都度交歓を絶つ事があるが、翁は流石に偉大な足跡を各地に印していられるにハ尊敬せざるを得ない。

この建物ハ相当広い寮にて名古屋を初め岐阜　津の関係社員の休養所専用で絶好な置位である。正午近るとて溌剌たる大鰤の外湾内の鮮魚が数々大盤台に盛られた豪勢ふり。刺身に塩焼煮〆と酒間の飽食に湾内の勝景を眺めながら大歓待にしたった。

平和に見える[ママ]この湾内にハ舟形一ツ見づ、只一隻千噸保の機船が鳥羽港に入港するのか速力を落し航行するのを見た丈、紀州沖より相模遠州灘にかけ、敵の潜水艦は夜と昼となく襲い来る此頃　航海も不安は漲っている。

食事が終ると、予の携帯の茶箱開きを求られ、予亦この風光を賞して喫茶ハ望む処

茶箱ハ時代籠地　茶入南ばん芋の子　茶杓自作芋杓　茶碗二代長次郎常慶黒筒　一燈の箱　青磁の振出し

香合古染附海老吹墨等にて先ず耳庵翁に進め、一行巡服し鳥羽湾を賞した。猶予ハ紀念の為一行を撮影に試みた。

扨て今日の日程ハこれより千代崎迄の行程あり、食後おしくも出発、耳庵翁ハ予丈途中の疲れを心配せられ輪タクを進められ駅に先行し、鳥羽発上り列車の客となり、山田駅にて山田の人々と別れ、津の駅迄田中君ハ名古屋に直行、ここにも津支店社員の人々によって荷物の整理を得て電車に乗替えた。千代崎行きにハ白子と云ふ駅で下車、ここ迄横山津支店長が見送られてお別し、鈴木副社長と三人は千代崎海浜に着きし頃ハ夕陽落ち宵闇におほろゲの頃であった。

この千代崎海岸にハ大坂山中支配人でありニウーヨク支店長であった宮氏[46]の別野があり、其隣地にハ名古屋横山五郎君の別荘があるのを訪はんが為であった。かねて予約があったので宮氏ハ提灯片手に迎られていた。宮さんがここに別荘を構えられしは氏がニエーヨク在勤中其の妻女の不健康を療養する為特ニ設けられしと聞く。大戦後米国支

都会を放れ　雪見の茶に一日の静閑に親む我らにもこの記事を誌すかたはら大東亜戦ハ刻々と苛烈を極め米軍の猛反撃ハ島から島へと飛石伝に本土に近く多くの犠牲者に対し

何ら報ゆる道のない老人ただこの戦況の将来に憂色を深むるのみである

情報局の報道がドノ点まで信じえべや心もとなき限りである。

○伊勢参宮と茶脚行　一月十五日

p 456

関西旅行中の耳庵翁と　今夜伊勢の山田にて落ち合ふ為朝九時発急行に上車、二等列車にも長蛇の列、漸く座席を得たが座席がなく通路ハ立つめの列

その為沼津通過後ハ座席の交替を命せられ、自分又立往生と云ふ交通地獄、要意（ママ）の弁当も立ちながら摂ると言ふ訳で、旅行に娯みな窓外風景など望むべきもなく、便所行きにも不能の苦み、浜松駅で又座席の交替　朝の九時から名古屋駅迄湯水も呑まぬ旅行であった。

△名古屋駅にハ長男夫婦義郎らの親子四人連が出迎ひ直に（スグ）鳥羽行列車に乗り替へた。この列車は本線とは違いカラ空き発車迄三十分の間があり嫁の携へし重箱詰の弁当熱かんの酒迄用意してくれ、漸く人心ちがついた。長男対手に熱かんを傾け清子手製の羊かんお茶も廿匁一かんを用意し旅行の娯みにと届けてくれ喜しく感じた。扨山田駅の時間を聞くと九時を過ぐよし　予定ハ八時頃と聞きしに、一時間も遅れると初旅の夜道を一寸不安に感じた。長男一家にハ帰途会へないかも知れず別れをおしみて発車した。九時過ぎの山田駅ハ下車客も少なくイタッテ寂しく駅前に出ると大安と印のある灯提を掲げし客引らしき若者と、今一人東京の仰木様と半紙大に書いた建札の人が迎えてくれていたのでホット一安心ハしたが、扨人力車を頼むと、古市迄ハ途中坂があるので行くのハイヤだと断られ、道程を聞くと平道以上あるとの事で当惑すると、一人の老車夫がお困りでしよふから私が送りましよと親切に引受くれて仕合であった。

駅に出迎いされた人々ハ二人共中配電山田出張所社員であるよしお迷惑を感謝して別れた。

駅からの　道ハ燈火管制で真の闇　凡そ物の十分も行くと成程カナリの坂がある　老車夫には気の毒な坂道である。この坂ハ何と云ふ坂だと車夫に聞くと、これは逢の坂と言いまして昔お玉お杉と云ふ二人の姉妹が親の仇を討ちたい為この坂にて三味遊芸に道行く人をあつめ、仇を探し其の孝心から仇に巡り会い本望をはたしたと言い伝へられていますと話してくれた。坂を登ると家並も多くなる。車夫の話でハ、これからが古市にて以前は有名な遊女町油屋初め多くの女郎家街であったが、明治の中頃から大半ハ旅館業ニ転更し残る数軒と駅附近に少しばかり名残を留めていますと、ひやかし客さえ目にふれない淋しい風景。

暫く行くと仰木様の車ですかと言ふ人あり。車夫はさようですと答えた。其の人ハ気を附て送ッてくれるよふにと行き違った　翌日聞けば其人ハ営業所長の田中さん[38]と言ふ人であった。

大安旅館ハ　山田でも高級宿にて本店ハ一般宿らしく別館に案内された。ここには松永さん接待の為錦木中配社長[39]を初め津の支店長横山氏[40]旧東邦重役金坂氏[41]田中誠（ママ）一君[42]も

名古屋から出張と云ふ人勢　松永さんは待わびられたと見え大歓迎　トモ角お風呂だお風呂だと進められるまま一風呂浴びた。風呂から上ると、先ずお茶御携帯と思ふ是非一服と着早々の所望、予期した事とて宿の茶碗と清子の羊かんで一同に一服進め途中の難行談や耳庵翁大坂より奈良柳生老人[43]に会った事　伊賀の上野で菊山君[44]を訪ねしことなど十一時過る頃まで語り合い明日の日程打合せ山田の宿に一夜を明す

自分は旅に出ると宿の床でハ一寸睡につけないクセがある。睡られぬまま浮んだのは明朝早く起き二見から揚る陽の出を拝するも神路の街に来た想い出など考へた。然し何としても旅の疲れ　いつとなく夢をむすび目を覚ました頃ドコからともなく聞ゆる鶏鳴は夜明

も戦争の為の供出犠牲か松根油でも採取するならん　数百年の樹齢を保つこの松林の運命の果かとはかなきハ人生のみかをかこちつつ柳瀬に着く。山荘の雪景色は又格別　降雪迹の静けさに、これは又主人の大声、さてハ奥さんえの小言かと縁先を見ると奥さんハ干大根のお手入れ、松永夫人でさえ食料不足に悩み食料保存に餘念がない。それとなく雪景色や主人のドナリ声について尋ぬると、アレは平林寺の谷山さん[37]に朝から茶の講議[マヤ]との事、其の話の内にも挽臼の音さえ聞ゆる。主人ハ仰木さんが来るのお娯みに土橋からの茶を自ら挽いていますよと、ナント言ふお心入か、近頃淡茶を求るさえ不自由の折昔に還る茶臼の音、それも耳庵翁自身の手にて、私はこの雰囲気に強く胸を打れた。松永さんが自己の娯みと共に我々茶友に迄趣味の割愛の志に感銘せざるを得ない。翁がここ迄茶に悟入せられる心境も察られる。

近来の翁ハ　富者隠棲の茶三昧と見るが如きハ大きな相違と思いながら縁外から到着の挨拶をすると臼挽の手を休め雪の道中定めし寒い事ならん　先づ囲炉裡の側にと自ら番茶など進られ、抹茶の不自由ハ全国的とて土橋老より葉茶が手に入ッた、それも宇治の上林から無理に譲受け送ってくれた、茶友の志ハ難有い、今日ハ幸いこの雪、家内と三人挽立を喫みましよふと娯げであった。

翁ハ曰ク　今日ハ家内の手を借らず私が料理をして家内もお客に　炉辺であるが懐石風で食事を差上ると台所にての指図に恐縮した。料理の出来迄之れでもお覧と持出されしは、

鎌倉期の　因果経　である。この巻は数回拝見せしも今日の如き機会にこそ観賞に興味は深く全巻一巻　仔細に拝見した。天平因果経とハ時代の関係上色彩も筆致にも強い処はあるが流石は得がたい名経である。然し色調の濃厚から見ても天平経丹厳さと相違するのは顔料其物が当時唐より将来品を用ひし点とこの経の顔料が既に国内産であった点から察しても発色に劣ル点があったと考られる。こんなことを考える内食事の用意が出来たと進られた。

向は　晒鯨味噌かけ　椀雑煮　焼物鰤のテリ焼　唐津の片口に

強魚　山の芋　お正月料理を美味にいただき、お主人よりお都合よければ庭伝いお席へとのこと
トロロ等　にていま庭に出んとせるに、奥さんハ少しお待ちください、お菓子の善哉がまだ出来ませんからと、処がお主人大変失望せられた。それは我らが席入後暖い菓子然も心入れの善哉を進めたカッたからである。正直な奥さんの事前に発表せられたからである。こんな事でおこったり笑ったりで席入り植込の疎林より白妙の富士ト残雪を踏んで

席中にハ名香が炷こまれている。床を拝見すると雪に対する其角の消息

「宿にとも少侘ひ居り候共雪中の使い痛いたしさに酔色おうる本し
申候先次て御巻驚胆のみ、この志だらにて中々金籠懸ハ見て居られぬ苦と似也病もと申出候
当日の吟　めつらしき物が降ります垣根可那　なんと茶味津々たる風流な消息か　降る雪に文もて友
淡茶御味ひか被下候　十一月廿一日　翠風■其角」　と雪の情を語い交し茶を贈り雪を賞した表現で
あろう。それにつけてもいつになき耳庵翁今日の心情ハ其角の文をそのまま我ら一人の為お尽し被下し
ことの喜しさ、強い翁の性格の半面この熱情あり　これを見ても人頭に立つ程の偲ばれる訳。

釜ハ春とて松竹梅地紋　お炭にも数々の名器を用ひられ　香合ハ織部　重ね餅にて重て香を炷せられ　水指ハ木地の釣

茶入も盛阿弥黒棗　茶杓ハ遠州作　狸火　歌銘　筒に「年くるるあ里明の空の月かけに　不のかに乃こるよひのうつミ火」茶碗長次郎作　銘尼寺　にて

お茶名御代の春を練られ菓子ハ前に書きし善哉を秀衡椀に温く進られた。引立の茶薫と云い甘みも濃く誠に結構に頂いた。自宅とは言へ今日の寒に我ら一人の為料理にも年頭にふさわしくお道具にも心入れに娯み深き物、特に茶杓の歌うつミ火など限りない斗りであった。猶自分の感激のみか主人ハ其角の雪の文を一度用いたいと思いながら雪を見ず今日これを用られしは何より、茶は相手次第で主客の娯みがある　それ丈今日程真にお茶を味いしは近来の快事と満足せられた。

お茶が終りし頃ハ五時を過ぎていた。冬の日を短く農家から灯さえさす頃となった。夕闇の道も案じられるので十五日から伊勢参拝同行の日程など打合せ、途中の寒を防ぐ為と、奥さんから温き餅をホッケットに入れ辞退せるも聞かれず寒い夜道を氷川神社のほとり迄耳庵翁の見送をうけた。夜途と云へ月は光々と輝し残雪を踏つつ人の影一ツなき志木迄の道を帰宅した。

○南平台の小集　十二月十六日

p 452

霜濃きこの朝中村氏より伊豆土産鰹が獲れた、松永さんもお越し縣君を交へ会食したいとの案内あり。正午に出掛た。先着であるべき耳庵翁の姿は見えず、気安い中とて時間お構なしと見えて、

間もなく鼻水たらしアタフタと　床に守景筆帆舟雁行の図　筆意雪村風の強い筆　が掛り　先づお食事と鰹の刺身、同じプツ切青豆葱などの煮〆を鍋をツツきながら寒さの折とてなかなかの美味いつか数杯を傾ける　食事が終り離れの茶席ニ　床に実朝筆日課の観音　十六日々附は今日にハ此上なき適幅と感嘆す花入古銅 白玉添を挿し

釜ハ与次郎作阿弥陀堂　水指春慶釣　茶入盛阿弥黒小棗　袋島漢東片身替　茶杓石州作如心箱　茶碗黄瀬戸替り物 口に柿釉アリ

建水ハ与次郎作阿弥陀堂　砂張と云ふ名建水　お茶を好古主が練るのハ目珍しい出来事。それ丈興味あり親みあって茶趣酒井家伝来　深く、猶日課観音に対す法華経冊子八部入の装填見事な写経　続て伝公任筆と称する藍紙萬葉数首を展示され古筆に対する参考談あり

松籟を聞きながら歳末厳寒を忘れ、無我の境致を味い散会した。

△昭和十八年末ハ　極月押迫り柳瀬荘餅挽き茶に田中翁らと出掛しを最後の茶事これとて、毎度の催丈何の変化もないので省略して、この深刻極る戦局を見まもり、新年を迎ゆる訳だが、戦況ハ益々楽観を許さず、或ハこのまま続行せんか勝算見通しなく不幸本土空爆の浮目や必至を想像する。為政者の無暴とや言ん。

○新年柳瀬荘恒例之茶　昭和十九年一月二日

p 452

旧臘廿七日餅挽の茶から日数としてハ僅か一周であるが歳改ると何となく途中の田舎道より仰ぐ富岳も白妙の崇高さが感られる。暮れからの干天に通路も干き切り風さへあるので砂塵は強い。

山荘にも安太郎君一家の年頭客に正月気分も漲り、賀詞を交す間もなくお寒いからと炉端を囲いお主人自ら番茶の用意、この折粟田老来訪、東某(36)と云ふ発送電社員君らと共に屠蘇のお祝い。

お雑煮焼物芹のお飯など春らしき食事を頂き　記録切　白翁(フヂナ)の面を三宝に母屋の広間の正月飾は定家の大吉野出土三個鈴　等々

茶席にハ鶏の画、花入ハ園内出土の神代土器に花太郎庵が挿れ皇祖神代の鶏鳴を象れている。何となく厳粛さがある

釜ハ梅竹地紋、炭斗荒組時代三溪翁旧蔵、羽根鶴、火箸桑柄外灰器南ばんにてお炭があり愈々お香となると香合の　行衛不明　主人は水屋に出たり這たりして水屋話に在りケを尋ていられる。其アハテ方　其内懐中に手を入れられ、アッタアッタと取り出されたハ、鎌倉刻香合の蓋丈身と香は見えぬ。それも其筈、蓋と香ハ懐中に散乱　フタは袖に姿を隠している。其の滑稽さに一坐はドヨメク騒ぎ。耳庵翁年頭の失敗ぶり、其のそこつさに正客の自分はスカサズ香合が呉須でもあったら懐中に這りますまいに鎌倉刻であったからでしょと挨拶すると主人曰クいやモー七十にもなると耄碌しますと答へられた。余ハ少し耄碌してくだされれば皆が仕合せますが益々お元気でと一同哄笑、初笑に春を寿いだ。この寿老香合ハ翁が七十の賀に当られしと思ふが今頃鎌倉刻でも季節に合はず、そこにも耳庵翁らしき振舞がある

扨茶入は唐物朱独楽甲青漆にて丸く、日の丸にも見え　茶杓道陳作　茶碗ハ織部小服銘若草と云ふ魯堂旧蔵は如何にも良く焼餅飴かけの菓子にてお手前を頂く　お詰役の奥さんもノンビリされ　正月気分に親みながら夕刻帰京ス

○雪見の茶　一月六日

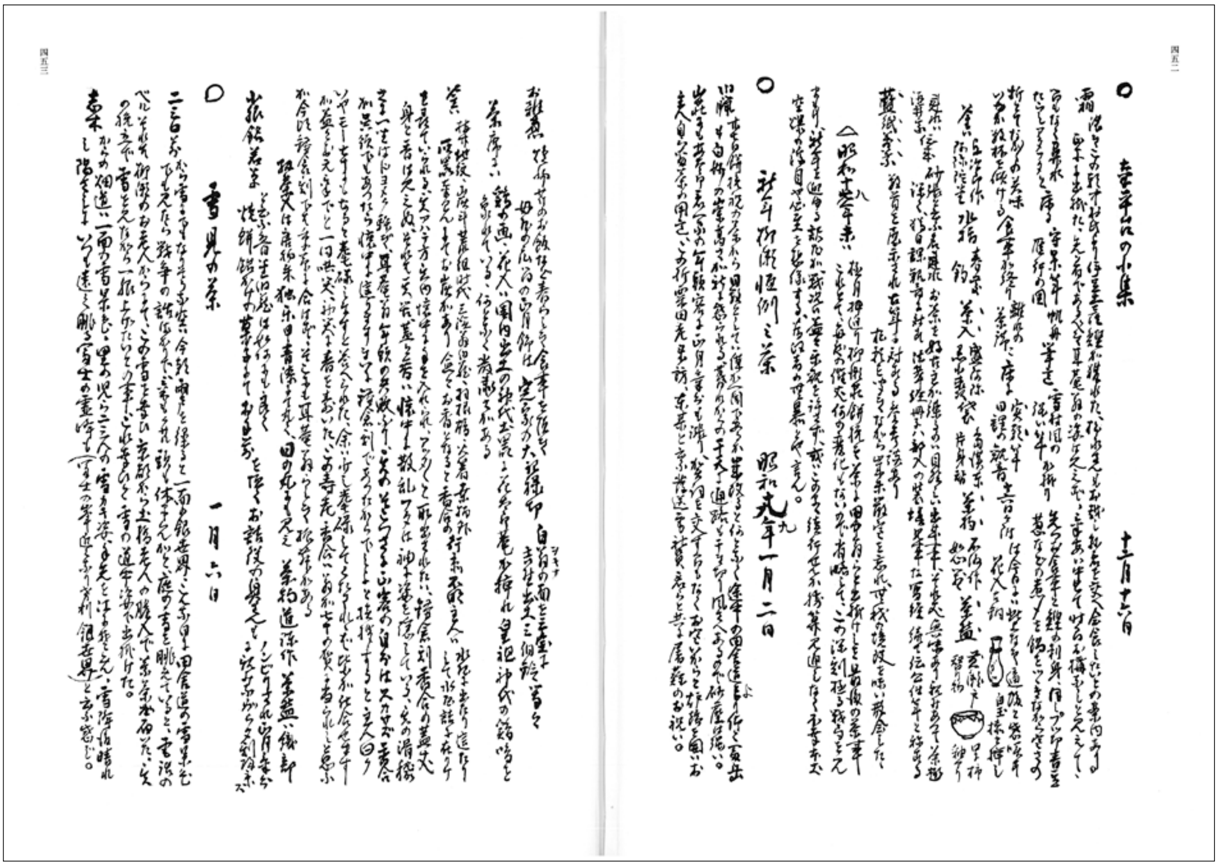
p 453

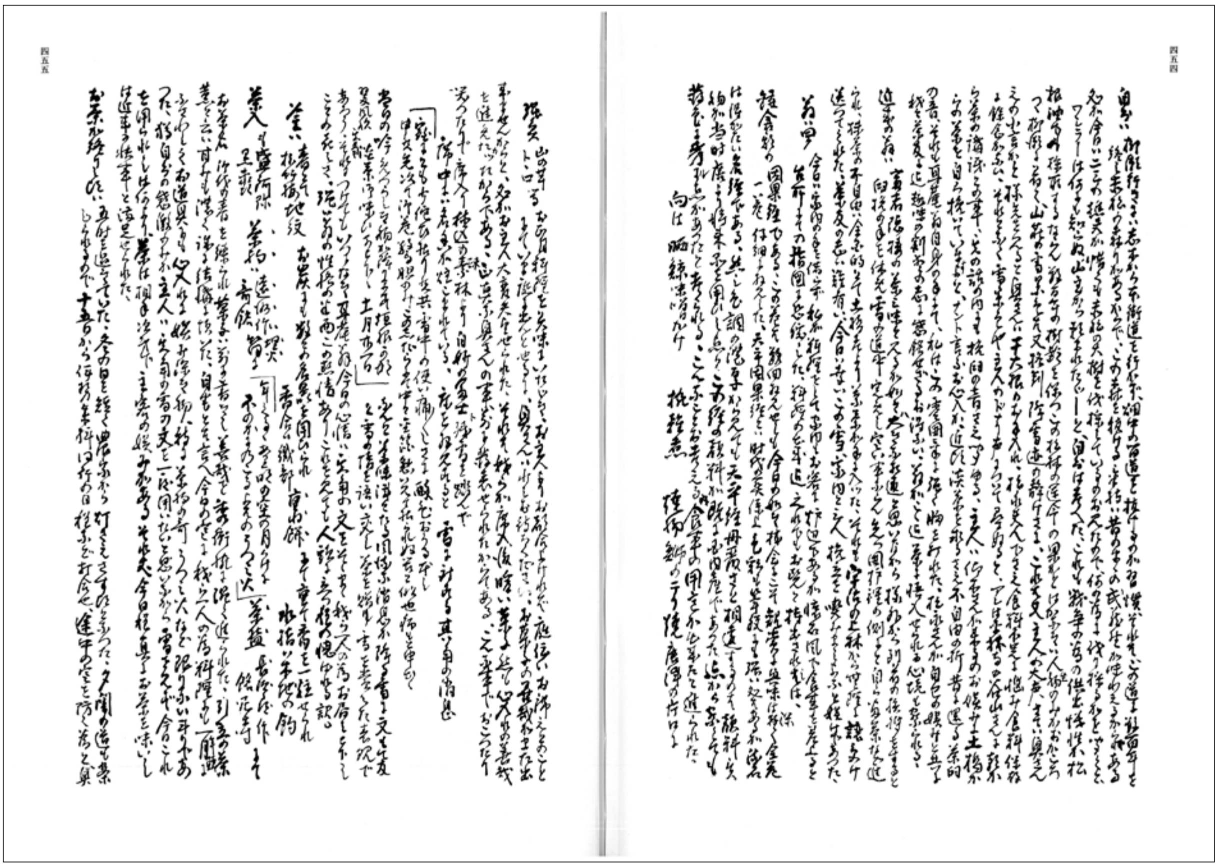
二三日前から雪にでもなりそうな空ハ今朝雨戸を繰ると一面の銀世界。こんな日に田舎道の雪景色でも見たら戦争の話ばかりで、気もクサル頭も休まらんかと、庭の雪を眺めていると、電話のベル　それは柳瀬のお老人からにて、この雪を幸ひ京都から土橋老人の膳入で葉茶が届いた、其の挽立で雪を見ながら一服上げたちとの事、これ幸ひと雪の道中姿で出掛けた。

志木からの畑道ハ一面の雪景色。里の児ら二三人の雪カキ姿、手先を紅にそめ、雪降後晴れし陽さしにいつも遠く眺る富士の霊峰も（富士の峯近くなりけり銀世界）と云ふ感じ。

自分ハ柳瀬行きにハ志木から本街道を行かず、畑中の間道を抜けるのが習慣、それは、この道に数百年を終し赤松の森りがあるからで、この森を抜ける気持ハ昔のままの武蔵野が味わえるからである

処が今日ハ二三の樵夫が惜くも赤松の大樹を伐採しているのを見たので、何の為に伐り採るかを聞くと、ワシラーは何にも知らぬ、山主から頼まれただーと。自分は考へた、これ





本書影印本（戦前・戦中）452-455頁

と言ふも過言でない。

松永翁の延着に業をニヤシテか、お主人ハ入席を進られ入席すると、床ニハ道安作一重切

二筋割れある漆シウメ

花ハ 虎の尾、女郎花都忘の三種 が挿らる 鉄大風炉妙喜庵籠 釜天猫尾タレ

この折松永さんもアタフタと馳付られ三客に着席された。主人又出坐お挨拶に実は

案内状にも 申上た通り故益田夫人偲い出に故人も縁故深き方々のお出を乞いたく、先ず初日に益田さんお一家のお出を乞い今日二回目、処が突然今日正午京都野村得庵氏らをお招しかたがたお粗末であるが先日松永さんのお口切に推参したのに、名残構への略式申訳もない次第と、長々のお挨拶 先つお炭ハ唐物四方の炭斗、火箸時代捻、羽箒野雁 鈌ハ張抜

香合、鎌倉刻大振り 布袋、地ハ具輪ゲ風の雲形刻 扨懐石は向 蓬蓮草あへ物 器寄せ向 金襴手、乾山四方、唐津割山椒赤絵、祥瑞松竹梅 ノンコウ

汁ハ三州小芋 椀甘鯛海老 青味 焼物車海老器ハ尹部 強魚人参キンコ の甘煮 進物雲丹黄瀬戸 鯛ニ平目の刺身 器丹波長方手附

アミの塩辛器粉引グイ呑 徳利粉引 八寸炮ロク蒸 香の物白菜澤庵 織部沓鉢 銚子竹の根形 已上の大振舞

これも鈍翁好み其のまま お菓子赤かご(むし)を頂戴して中立ハ腰掛に 間もなく迎附して再入席すると、床に「定家卿の筆 あきのよハなかめすててもいてなまし なかめすてての詞 このさとのみのゆへとおもへは」表装古金襴大牡丹上下丸文人物緞子 一風紫印金

水指備前緋襷 国宝

茶入、八幡名物唐物老茄子 袋剣先替り緞子 茶杓、宗中作 歌銘 あらましにききし山路をきて見れば浮世の空をはろふ谷風 この歌宗甫大侘

茶碗、柿の蔕銘比沙門堂(34) この茶碗ハ元比沙門堂蔵後平瀬家に伝り益田翁 執念深かりし名碗 蓋置長閣堂作小枝二本附寄附掛物添い（ソイ）

建水南蛮砂張 已上床の掛物に季節をそそられる外、道具組の配合、備前水指に柿の蔕ハ同じ寂とも考へられるが緋襷の自然の赤味は寂より美と云ふべき色合が茶碗との置合せに少しの矛盾なく 予ハ鈍翁亡後間もなく紅葉館追福の際四五の縁故者と共に、拝見した事あるも今改め茶席に於て再見し、この茶碗の非凡ならざるを深く感じた。茄子の茶入又松花堂秘蔵の侘び物蔕の作行漆の色調等支那漆の味ハ申分なき茶入とし 特に名残にハ此上なき物である。これらの取合でお手前上手のお濃茶を頂く連客の感激云ふ迄もなし 扨居抜のままお淡が進られた。

水指、唐津手附

茶入古瀬戸一重口 茶杓、鈍翁作歌銘 山月、「庭めくる我あしもとのうすあかり うしろの山に月やいてけん 鈍翁 箱書 瀧夫人 」

茶碗呉州山水絵 替唐津片身替り 干菓器青海波砂張 宗味老(39)の代点にて お濃茶に重点を置れし丈イト軽く茶杓の歌にすべてが引メッたお手ナミに敬服すお開きハ般若台 に移ると因陀羅筆芦葉達摩 讃中峯明本 文に曰ク 紅菊里■一華要識達摩大師■剣去■夫 ■進明本■牛元旦清斎■為奇石珍■心■ 前ニ名物浅間香炉古青磁筒形 羽田五郎盆上ニ「光広、澤庵江月添状付」 井上家伝来が飾られてなる因陀羅ハ伝来にて確證なきも古来伝称されあり、その何れにしても元僧の筆たる疑なき筆と 思ふ 只我らにハ其筆の柔弱なる点から見ても若しこれを因陀羅信筆と云ふならば筆者其人の真価を疑はざるを得ない 識者の教を乞ふ

猶 表装丈ハ中 浅黄地印金上下唐緞子 一風茶地印金と云ふ豪華な仕立であった。何れにしてハ名器を囲み時局下ニ如斯お振舞を得た事ハ無上の仕合を萬謝し茶果のお持見事にて成に預り退散した

○式守蝸牛翁の病床を訪　十一月十八日

p 451

宗匠八月以来病を養ふと聞き、山澄氏を浜町に訪いし折、たまたま耳庵翁と落合い、共に両国橋畔老翁の病いを訪ふ。翁ハ香道茶道の宗匠として現に、都下唯一の先輩表入口ハ角力道に由緒ありし家柄とて、何にかそれらしき印象を受ける構へ。裏口から入席すると、病に臥ながらも流石のたしなみ。床に蓬雪の小色紙、宗全籠に紅葉に野菊が露を ふくんでいる 耳庵翁突然の見舞に翁の喜び。愛嬢のお手前に互ニ淡茶を啜り合ふ。予又耳庵翁携帯ノ茶箱を取出し、大宗匠を前に盆点して進めた。翁幸ひ病も快気に向いつつあると、耳庵翁と共に其再起を祈り辞去した。人ハ日頃の心構こそ肝要 突然の客来にも花に露、病床にも名香の薫りかくあってこそ雅人の生涯である。

○柳瀬明治節の茶　十一月三日

p 447

明治陛下のお遺徳ハ天に通し例年明治節にハ恵まれし好天に民草の感銘も深く戦局好転を祈る　天長の佳節、柳瀬荘に招かる。途中の難行書くもおろかである。

ご案内によれば御入園ハ東山からとの事にて稔る田甫側より春草廬前を登る。紅葉にハ迹一周間ならずは　それでもドウダン丈ハ錦に染ている。松永家守護神社頭を過し処老松林間に緋毛氈腰かけ、立木ノ枝に釣釜と云ふ待合の構えは暖い今日林間の秋色を賞するにハ此上なきお主人の趣向。遠来の客に対する思いやりからである。

扨今日のお客ハ（畠山一清翁お夫婦　塩原禾日翁お夫婦　田中親美翁に予の六名）

粗朶烟る釣釜の場に渇をうるおし、お主人の先道で母屋の前を且坐席に繰り込む。

床にハ茂古林墨蹟、釜ハ芦屋　馬地紋　縁時代島柿と言ふ先頃鴻の池入札にて落札され名幅に釜ハ土坡に秋草放れ馬四古作と云々品々

改めお主人挨拶に交通の難の折お来駕恐縮と語られ粗飯とて懐石は運ばれる　向カンパチ細切わさび　器唐津割山椒　汁地味噌小蕪

椀車海老松茸　蓬蓮草　焼物さわら織部角　強魚小芋赤絵小鉢　進魚雲丹黄瀬戸銅鑼鉢　八寸百合根鮑　香の物小蕪沓鉢

菓子栗饅頭　酒器粉引徳利銚子等々　口切とてお献立にハ不自由な折にも入念であり食器にも割山椒を初め名器配合されている。さて食事が終るとお炭直し　炭斗　瓢　羽根鶴、火箸時代桑柄　灰器ノンコウ　香合無地呉須台牛　と云ふ名香合にて香一炷正客ハかねてお噂を聞きし香合は噂以上の名器　さてさて羨しき事、之れ一品丈でも交通難などイトイかねまじき宝器と激賞された。さもあるべくこの香合ハ加賀に有りし頃より有名にて、正客兼而嘱望の物でありしと、炭がすんで中立ハ　林間牀几に程なく銅羅の引入に聞入る　禾日翁ハ、銅羅打ちの名手丈耳をすまして曰ク、銅羅の新物にハ困るナート

後席はと見れば　胡銅尊式花入　に白玉を活けらる　水指曲　茶入宇治文琳　茶杓氏郷　茶碗有楽井戸と云ふ豪壮

振りにお一同感極り緊張裡に　お濃茶一巡　拝服す　已上堂々たる道具組から見ても耳庵翁の僅か六七年間一流茶家に倍し何ら遜色なき進展せられし勇猛さは驚異と言ふべく数寄者間にも異類である　要するに其の性格の現でもある。この道具に対すル連客の羨望に拝見お時を過し主人の進に広間に通ると

床に信実歌仙の伊勢の図が懸り　東大寺旧蔵古鼓を　と云ふ之又言ふ迄もない名画に古楽の取合せに一同花入に杜鳥一輪　お主人の大奮発を謝し久し振り川越街道を自動車にて　車中畠山さんの曰ク予ハ初めて松永君の茶に今日招かれた。今日ノ茶こそ真の茶、今迄のハ侘び過き茶番式だと畠山さんらしき評。又塩原さんハ器物評価　茂古林の十二万余伊勢の八万某、井戸十二万六千金　台牛香合五万　茶杓二万六千円　文琳一万五千　釜二万金ザットつもりて五十万金近々の内に之れ丈茶道具に奮発は傑い人だと感服されたも愉快であった。

○亀ヶ岡比沙門庵の茶[33]　十一月九日　夜会

p 449

篠つく朝からの雨　寒さも身に沁む日　この雨では畠山家のお茶相伴も主客の難儀を思いやりしに幸い午後から雨も止んだ　今日のお客は松永さん丈ハ承知したが他の方々ハ不明

時刻に般若苑正門より入門　露地を池のほとりから沙那庵に至るとお合客ハ（井上侯爵、加藤正治博士お夫婦　山澄君があり　他ハ松永大人丈　予）

壁床を見ると長闇堂筆宗甫宛　蓋置云々と茶器に対する消息　中柱剛に青貝入短ケイに灯がかすかにてらされている

蒔絵木瓜形の手炉　時代四方の莨盆に火入塩筒　独楽莨壷　敷物等の備へ付に土肥二三在名の自在に釣釜汲出栗時代盆等型の如く

さて時刻ハ過ぎても耳庵翁延着、ドコを戸まどいかと待ちわぶ内、お主人の迎い附に井上侯を先頭に林間の細道を比沙門庵に、この亀ヶ岡は谷をへだてて池田山を望む岳陵、自然のままの庭園とて、閑静そのままの境地、朝からの雨に樹々ハ潤い、風致を添へている。この山道より望む御殿風の大廊下にツラなる般若台への長廊下の構造は堂々たる一大異観

後日この冊を回読すると、誤字と脱字ばかり。当時の戦況が不利敗退の前途不安に加へ、自己の健康亦すぐれず、日誌記入も粗雑なりしを、校正もせずに、其ま[ママ]筆写した為である。いかに其頃が焦心状態であっか[ママ]今更ながら笑止千萬である

雲中庵茶会集　八

p 445

○五島慶太氏邸古写経展の茶　◎昭和十八年十月十八日　夕

p 446

秋晴れの好天気　朝露残る頃　軒端の柿にあつまる目白の群れ、柿をあらされるヲシさより小鳥の囀つる風景に、追い掃ふ気にもなれず、彼らにも餌の乏しさと我草庵に平和を求めているのでは、人間界にハ血腥い死闘を続け、多くの同胞ハ南海の底に沈みつつ国民亦餓にあえぐと何の更りがあろう。柿の甘さにあき、筧をつたい蹲の水に、咽喉をうるおす彼等見るからに可憐な姿である。

今日午後から我ら又このいら立しき時局の一ト時を、五島家の茶に上代人ノ無我の境を信仰に仏陀の披を求めし写経の数々を仰がんと出掛る

途中　中村氏の宅にて耳庵翁と落合い　上野毛山の邸に　予ハ同邸を　訪ふは今日が初めて　玉川の清流を眼下に一望の好場所　東横社長として時めく五島氏邸

広い邸内であるが庭園を見た処でハ、新興財閥らしき石燈籠などが目につく。然し玄関にハ鎌倉朝阿弥陀像、応接間にも乾漆仏頭など写経趣味家らしく見受られた。

然し部屋の装飾にハ不釣合であった　先着ハ伊勢の九鬼紋七氏[32]に田山方南の両氏　椅子間の床ニ南堂、清欲墨跡、「天暦己巳臘月廿五日開福清欲が掛る」「この幅元嵯峨長福寺開祖月林和尚に与しと伝ふ」お主人の案内にて離れの茶席に新席四畳台目　床に印月江墨跡　玖上人（善玖）遊台雁云々より華北以北其行

至正八年秋孟松月老八八十二才春とある横物　花入古瓢ニ鉄仙花　道庵好土風炉ニ四方釜　茶入金地平棗　茶杓鈍翁作　水指瀬戸筒

茶碗ハ粉引写替朝日　菓子栗むし飴かけ　お道具ハ記入の通り之れと言ふ者なきハお主人茶に　趣味の浅い為からで六十に達られんお主人には

あまりに若い夫人のお手前にて濃茶を頂く　迹にて聞けば実業家にあり勝ちの二号愛妻と　この席ハ蓑原君の施行と聞く　水屋詰ハ鈍阿老夫婦

お茶が終り広間にて展観　先つ大休和尚の細字墨跡を初め天平経、紺紙金泥、「寛弘四年の奥書ある金峯山出土経筒内にアリシト言ふ紺紙金泥経の断欠ハ時の関白道長の豪華振りが現れている。この外慈鎮の巻、嵯峨帝の御宸翰、飯室切等々多数　中にハ徳川家康筆南無阿弥陀の経などもあった

さて階上、紫金老人享の奥書ある日本園及蔵主云々の大横物ハ筆致月江に似たる堂々たる上に表裝又豪壮な仕立で　珍重すべき幅を前に食事鯛の甘酢の向汁ハ茄子　椀ハ海老ニ鯛　焼物ハ興津鯛　小芋の串刺味そ掛け　海老の刺身　蒲焼鰻と

次ぎつぎに進られお酒は豊富　若い夫人のお給仕に酒豪の方南和尚を初め耳庵翁も上機嫌　同じ日本人にも一碗の米飯に事かぐ今日の情態に財力次第でこの美食　我らにハ何か

生活の矛盾が感られる。餘りの饗応に耳庵翁より物資入手についての質問に主人ハ得意ケに僕の社ハお承知の通り湘南地方に交通網を持っている　それらの物に命じ物資の不自由はかがぬと、ここにも社会問題がひそむ。大盤振舞にも似ず食器ハ凡ど全部が鈍阿焼であった

憶ふに五島さんが最も難解の写経古墨跡から趣味に入れし点から見ても将来必ず茶器にも其財力と性格の豪胆から他を圧する進展が期待される　我ら今日の眼服は中村、耳庵翁らの賜と厚く友情を謝し渋谷迄送られ九時帰宅した

一斎作　茶碗熊川風のシミ多き替り物にてお茶を頂き、食事ハ至極簡単ながら山上の涼しさは何より　自分ハ携帯の平林寺より持帰り新作せる、片身かわりの自然に割れある尺八花入に　カキ根に残るつるインギンの花を活け　上の草庵にて梅鉢高麗茶碗菓子焼餅に飴かけで一同に一服振舞った　一三氏の如きハこの花入に劇賞せられしは世慣れし挨拶ふり　此夕八代（ママ）　夜雨君下山　予ハ一泊した

朝風呂をあび近くの強羅公園一巡　大の字山にハ朝陽の登る頃公園内既に遊覧客の浴衣姿が目につく程であった　この日宮ノ下富士屋にて土橋老が茶箱にて一服進せたいとの事で耳庵翁に誘れ出掛る前、これも一泊した名古屋横山五郎君の茶箱点があった

山気　こもる強羅の朝茶は格別と娯む。然しその茶箱たる名古屋からこと更箱根迄持出す程でもない軽々しい物であった

さて富士屋に着くと部屋ハ日本間　主人ハ土橋老主人としてハ京坂切っての古兵　言葉は通訳でもなければ解らぬ早口、それ丈愛嬌ある商売上手のこの老人とて茶箱を見るのが娯み

来客はと見れば（これは又財界人錚々たるお連中　小林一三翁　増田義一[26]　松本健次郎[27]、森村男[28]、熊谷直太[29]　松永さん　それらの夫人連十七人と云ふ有閑人のつどい、扨）

掛物ハ　森川如春筆　寒念仏鈍翁讃　茶を云々を　柱に掛ける　鍍金の　経筒　これは偽物、茶箱籠地秋草蒔絵宗達絵と老ハ言ふが之又イカ物、茶入一閑筒これ丈ハ良いよふだが蒔絵あるがウルサク　茶碗　三井泰山翁作黒[30]　替逸翁手造赤　茶碗丈ハ　新作でも、こう言ふ折にハ意義があって無難　已上の如き物にてもこれ丈の顔ふれに茶を進むる玄老の手腕にハ感服する。然し時ニ環境真夏の避暑地無聊には興味を添タ

宮の下さへ今日の暑ハ東京にかわらぬきびしさ、それでも驚く程の人の群、前日からの疲れが身にこたへ木賀塩原さん行きを進められしも辞退し、強羅に帰ると言いながら無談一人り帰京した。予ハそれ程不健康と人に勤める気分が薄らいだ。一ツハ時局の為でもある。

○初秋柳瀬山荘の一日　十月一日

p 442

大東亜戦況ハ　ソロモン群島　附近の　情報ハ我軍ニ有利を報するも、我占領島嶼に敵の上陸を見ても決して楽観を許さぬ時態となり兵力の消耗又夥しく、こんな情態で我らの業界は沈静を辿るばかり、九月一ヶ月は好季節の入りモなす事もなく過した。趣味の茶などあるべき筈なく、只だ柳瀬隠棲の耳庵翁のみ無聊のまま茶友を寄せる位い、それも活動人も出掛けず出入商人か下ッパの閑人のみ

予又久し振り箱根以来初秋の郊外散策旁々食料不足の補給をかね、家内遠子の買出を道連に柳瀬に、数日前から泊り掛けの名古屋横井五郎君相手に悲憤を庭の改造に餘念ない耳庵翁を訪ふ。平林寺敬山老師来遊されしお期に釜が掛られた

床に　琳派の宗説　筆　着色蔸　の画　黄瀬戸の香炉を蒔絵の盆に風炉ハ道安形ヤツレに釜

水指　信楽蹲り　を打破り　ハンネラ蓋を合せし翁の物数寄ぶり面白く　茶入根来薬器　二三銘残月とあるを茶碗ハ黒瀬戸銘源九郎とかわった名ある物にてお茶　菓子ハ　手製栗饅頭で前茶の振舞

食事ハ　胡瓜椎茸　胡摩アえ　椀　唐かん葛掛　焼物　サワラの味噌漬　野菜の　揚物などでお精進風の料理にてそれ程に食料ハ行迫りである

器物ハいつも見慣し品　之れと言ふ見物ハなかったが　面白く　参考にもなった。柳瀬も秋と共に何にか物淋しく感じた。鎌倉刻裏菊判香合丈ハ

四十回

この冊　昭和廿六歳秋十月九日

秋雨燈下に誌き終る

○畠山家沙奈庵[14]の夜会　七月三日

p 438

数日前畠山家お訪問した際茶事の催し中にて幸ひ道具組など拝見しお茶迄拝服したが昨日同家より前日同よふだが今日一度四時半からとのお案内に厚顔しくもお受した

此朝耳庵翁からも今日お招きがありしやとの問い合せもありお合客は凡そ見当もつき参入すると朝からの雨にて連客も延着　間もなく（石井光雄翁[15]　田辺加多丸[16]（ママ）八代幸雄氏来着　松永翁又丸岡同道　天青老も来り　予と　七名）

待合にハ雪舟筆五祖六祖の双幅　土肥二三作竹自在に　瓢形鉄瓶を釣られ　汲出高麗写振出織部耳附　台唐物編物　盆黄銅フク輪付梅花形

雨中とて部屋通る若般苑[17]（ママ）　床に一休筆二行　応無所住而知云々の条幅掛りここにてお懐石食膳ハ半月弁当仕込

向鯛昆布〆、鰤薯製、加賀のゴリなどが色とり良く　汁鳥菜水辛　椀胡摩豆腐　青ササギ　焼物鮎の塩やき備前大鉢に盛り

強魚生ゆば海老芋　唐津手鉢　香の物　お菓子森八製　已上大勢丈に大盤振舞の珍味佳肴ハお当家いつものお馳走振り

食事中から雨も一時止みこれ幸いと庭を一巡、暮色の亀ヶ岡、広庭は雨に潤い幽邃今一入深く芝生を池のほとりより渓流そいに老松の陰腰掛待合に憩ふ

程なくお主人の迎い附に耳庵翁を先頭に石井八代田辺諸氏の順に勝手知ったる予ハお詰の役を買い入席

床に遠州一重切花沙羅　釜梅地文筒　風呂宗次郎土風呂　水指染附十八角　共蓋牛ツマミ　茶入菊桐蒔絵棗利休在判　茶杓石州宗関

茶碗名物長次郎作朝鳥[18]　利休古織の手紙幅添へ　以上にて令嬢のお手点にてお濃茶ならぬ淡茶が進められお主人お相伴でさて一巡終り

加賀横山家より移建され大広間に動坐すると之れ意外過る日山田瓢庵邸に於る雲州家蔵品同家追善茶に用いられし「門無関筆布袋の幅が掛られている」[19]

いつの間にお当家に入りしかこれと共に驚くべきハ同じ雲州家不昧公よりの伝来たる金地宝来山の沈箱が書院に飾られてある。この沈箱は茶人間に保元時代と伝えらる時代蒔絵中貴重な一品にて其の量と云い型と言い平安末期の優品　雲州家にハ此の外片輪車の手筥と共に蝶の手筥の名品あるも其の精致の手法はこの沈筥が秀れている　近来器物法外の高価な折、よくもお求なられたと其の財力と勇敢さを賞揚した　従って連客もお主人の強引さに驚嘆する外はなかった

違棚にハ赤絵共蓋三足香炉等何れも豪華極りなき飾附にて水果子など種々お持成ありしが予ハお主人に向い

お丁重なお振舞は結構であったがこれ程のお道具組にて淡茶で退散ハ心残ですからお濃茶道具を拝見致たい　必ずお用意のあった事と存じますと臆面なく要望した　これは茶ノ道に対す失遜であったかも知れぬが主人は意外にも心よく快諾され、それでは次の間に用意しお覧に供すると飯胴[20]（ママ）に命じられた。

其の品々ハ香合呉須八々鳥　茶入名物冨士肩衝　釜名物芦屋　セメ紐信長所持　茶碗雲州家伝来粉引

五徳宗旦所持　已上の如き名器の数々を特に披展せられし事は此上なき仕合にて一同満足し九時過ぎお暇した。

主人の趣味に一家同和するこそ家庭の平和が望められる　殊に茶家にとりてハ特に其の必用を感ずる　茶には食事と言ふ重要なことがある関係からたとへお出入庖丁があるとしても其の主人の好により主婦の心入なくてハ主客に満足を与え得ない。従って茶家にハ古来一家揃って趣味に親む家庭こそ秀れた茶家があったと思はる

畠山家にハそれらの点が具備せられ殊に夫人に至りてハ此点稀に見るお主人えの内助が顕著であり従って一会の内にも客に対する懈怠なく心よいお家庭である。

○箱根羅草庵の二日間[21]　八月十八日

p 440

強羅避暑中の耳庵翁　茶友ほしさに数度長距離電話の誘い出し　例年の事でもあり東京の暑に苦む身ながら行通ハ難儀　時局ハますます安閑と過されぬこととてお辞退して置きしもタッテ一度登山せよとの急電にて出掛る事にした。品川廻りハ上車困難故小田急線で、これも秦野迄汗臭い満員の立つめ、山に着きしハ十二時過ぎ。

来客既にあり八代[22]（ママ）　横井の両氏　間もなく小林逸翁　京都の土橋老[23]　熊谷鳩居堂主人、中京松尾宗匠、八勝館主杉浦[24]、横山五郎君らが押かけここ又超満員

床に澤庵和尚仲秋の詩など掛ケ豫楽院銘雨後の月とある[25]戸樋の花入　山草を挿け猿地文の釜、水指備前の壷茶入蒔絵ノ棗、茶杓田村

莨盆（手附一閑）　火入赤松　已上蟬耳釜も初夏に適し水指もすがすがしき感じ　斗々屋茶碗ニ一入の出来のよさ　軽妙極りなき景文郭公

の画と共に涼風そそる内に淡茶を頂き御母公の供徳を感銘しお暇せり。

○柳瀬荘初夏之茶　六月九日

P 436

北ハソ満国境中国は全土に渉る（戦線南はビルマ、マレーイ西南嶋嶼と陸に）海の広大な戦場と化（召集に次く応召の壮丁は多少の不健康者でも駆り出され一面軍需工場亦強制的に婦女子迄總動員と云ふ緊迫に直面した戦況は、海軍に山本五十六總司令の戦死と共に敵の潜水艦は我輸送船の激沈次くと云ふ悲観すべき戦局となった）

こう云う不安下に今日耳庵翁の招きにより売出群にもまれ志木駅下車（買出人の迹につき主婦連の食糧不足をかこつ悲痛のさけびを聞きながら大和田田甫迄来ると植上りの苗の虫採）りに女学生の群れを見る　農家に人手不足の為に学生奉仕である

柳瀬荘今日のお客は（田中翁、服部正次氏　加藤正隆　福田の諸氏ニ予）

近来庵主も時節柄（すべて簡略　ただ茶友と一碗を啜りたい為）床ハ（雲州家旧蔵石室善玖）筆（嵯峨清涼寺に対する時の御門より勅額下賜奉答文）

食事ハ（長食机ニ応量器）を用い　向（胡瓜モミ）　汁（小芋）　鰊の甘煮（古染付瓢形）　対州雲丹（祥瑞文字入）　酒器（粉引、黄瀬戸六角）杯

外一　お菓子ハ蕨餅と云ふ献立（応量器を持ひられしハ何の意味か不明なるも）　茶も其毎ことに（趣向の行迫りのあるもの止むを得ぬかな）

中立（間もなく銅羅の音山内に太く細く響く）　田中翁を先頭に　後席ハ（遠州一重切）　権十郎箱（花山ウツギ）　炭ハ略して　香合独楽

風炉（宗次郎釜真形）　水指（備前矢筈）　茶入（盛阿弥棗）　茶杓宗旦（茶碗蕎麦にてお濃茶を振舞れたお茶が終り初夏の庭を春草蘆）

迄散歩　ここにハ（古画牧童の幅が掛り宗祇連歌の巻が飾られ田の面の牧牛と共に場所柄適当なお幅に興味をそそり柳瀬堤に憩ふリク姿の買出人の汗をしぼるも胸せまる）

食料や燃料に迄不足をあえぐ此頃高価な器物に茶を味ふ人　それに連なる我らハ仕合であろうか　戦局非なる今日社会の表裏の差、何か考へられる物がある

○於耳庵山荘（三溪先生　魯堂）　追善茶　七月一日

P 437

まだ梅雨晴と迄（は行かぬが朝から晴れ気味の空を、故三溪翁や亡兄の為追善の催しと云ふ事で不参もならず、日増に途中の難行を排しで出掛る。一ト月たらぬに田甫ハ青田と化し）

困難な食料作る農家ハ懸命（この植附も各家協力なくてハ出来ない人手不足）　合客を見ると（田中（ママ）八代、川面　中村　丸岡と云ふ生残りのバッタ組）

母屋寄付にハ（三溪翁遺墨）　淡彩（蓮池の幅大作が水をふくみしよふ）　奥の新広間にハ（鴻池伝来）茂古林墨跡（表装中茶地印金上下浅黄北絹一風紫　この幅ハ翁所蔵中印金　最高価一一万何千）とお奮発されし名幅　書院に（青磁上耳）三足香炉を（松の木盆ニ飾られ）　ここにてお懐石を

向（鯛昆布〆器ハ寄せ）　汁（地みそ茄子）　椀（そうめん焼魚椎茸）　焼物（岐阜器ハ丹波鮎）　進魚（鯛の白子マグロ平鉢）　器（染附ひさご）　強魚（茄子の揚物赤絵鉢）

已上なかなか入念の献立盆月とてソウメンの椀　鮎ハ三溪魯堂両仏の好物とて食事の中にも故人ゆかり深きお料理にお主人お夫婦のお心入れも嬉しく　柳瀬近頃稀れな佳肴を感謝した。こんな催には

両故人の偲出も一入にて、若し今日在世アらば、如何なる茶事を催されるか或ハこの大戦の浮目を見られぬことが幸福ではあるまいかなど生残りの幸福を忘れこもこもの噂話の中に動坐中立

二三遺構小間に移る　床ニ（三溪翁旧蔵）公任の大色紙（「さつきやみ」）云々」の歌　花入（魯堂旧蔵尹部の筒花夏椿シヤラと云ふゆかりの器物）

宗次郎風炉に　霰釜　水指曲　茶入道安棗　茶杓宗旦　茶碗そば、建水　ハンネラの組合にて古人を憶び濃茶を啜り合ふ

折柄窓外ハ五月雨軒端を打つ　清寂感一入、この雨をつき春草蘆へとさそはる　見おらす田甫に白鷺の群れ　雨に霞む武蔵野ハ絵巻物にもひとしき風

景　床はと見れば（ママ）八代田中我らにも（由縁深き病いの双紙）残欠が掛けられ　釜尾たれ　風炉（鉄やつれ水指薬罐　魯堂旧蔵）

これも三溪翁や

茶碗（魯堂作赤楽）　丸岡老への遺物（にて丸岡老のお手前にて淡茶の振舞あり偲い出深きを味いお主人の厚意を謝し帰路につく）

鉢ハ絵唐津杳　酒器備前井戸の徳利、杯祥瑞交趾　菓羽二重餅　已上戦時にあるまじき献立然も柏屋の腕を振いての

美味佳肴に、連客舌鼓を鳴しながら御祝ひ振舞に驚嘆す。お菓子を頂き元の待合に中立

後席の床にハ遠州作一重切　花浜ナスに都忘の二色がうるわしく挿れ　水指志野の筒　茶入備前　茶杓元伯

茶碗、道入加賀七種ノ内銘香久山　黒江岑箱　と云ふ道具組にてノンコウ香久山は流石七種に取上し物丈によく

若主人にハ侘の組合せに一段と興を添へた　引続き淡茶が点らる　茶器亀絵棗茶杓蓬雪作　茶碗青井戸、替瀬戸唐津

水指青磁耳附獅子のツマミ等濃茶の折りよりハ㊀になったよふ見受るが、之又新機軸とでも云ふべきか広間にて為恭武者絵の幅金襴手水瓶に

花ハ五月節句として最も千萬　水菓子番茶等の持成に預り現お主人一同の将来を祝福しお暇した。

○根津家展観(12)　五月廿九日

p 434

一　蓮池蒔絵経筥小鳥二重鎌倉　一　墨跡、龍巌至順二年辛未徳真「（我元弘元年）　重陽十日寓盧山東林楽間自覚道人老巌徳真書于蘭九」

この龍巌ハ筆力強健実に見事な墨迹である　一　高先㊁の讃ある真山水無款も名画である

経巻にハ「藤原房前天平九年四月十七日薨元興寺ノ奥書アル」天平経、一　茶入、掘正意作瀬戸名物㊃祖　一　名物三芳野井戸

一　伊賀、銘呂渦賓水指　一　名物黄瀬戸獅子香炉等の名器　中にも三芳井戸ハ堂々たる物にてお当家蔵柴田井戸より我らには興味アル

此外古銅器芸阿弥山水など数点陳列され数寄者の垂涎すべき物である

○團家母堂孝養の茶　六月四日　正午過ぎ

p 435

團さんから十一時半のお案内　いつも相伴に恐縮しながら入庭整理せられし邸内も新緑の初夏も爽である

お出入宇田川君の出迎で小間に通ると　（耳庵翁ニ八田君先着　他ハ新喜楽の女将今一人ハ新橋の老妓利栄次と(13)　云ふ五人）

待合に寛永頃の大小名禄高と封土の地図張小屏風ニ銅の瓶掛銀瓶、汲出紅毛、振出木地糸目瓢を丸盆に備えらる　釣棚上ニハ香合螺鈿

お炭ハ省略され　お挨拶に先日柳瀬にて母供養の茶を催すよふ申上げた。今日お遺憾を願った次第との事。

床ハ光広卿の散し書歌三首　題ハ夏㊀麥とあり　歌略す　釜、天明筒霰

風呂との取合よく

間もなくお粗末ながらとお持出しは　信玄弁当八寸、煮物飯組入れ　向　鯛皮附甘酢　器御本開き扇形　朱杯と　云ふ

お膳組、土鍋にヨコゼうどん　人参の汁物、二段重に紅鱒テリ焼　鳥の叩外二色　香の物アチャラ漬器刷毛目四方の鉢

と云ふ献立に青磁寿老　蓋銚子　備前の徳利杯金襴手　唐津の二色にて至極結構なお料理を頂くお主人の主人ぶりも一

段と巧者にお接待と正客耳庵翁に配する其道の猛者女性の　取組に坐中歓談裡に頂戴錦上華と迄行すとも痩せやらぬ往

年の脂粉も漂い、いつか陶然となり中立　お菓子ハお手製の羊かん　専門家も及ばぬお手なみ

後席花入不昧公作銘露時雨　花山法師一名山桑　水指尹部耳附

茶入、利休在判小棗　茶杓、道安作共筒

茶碗、志野筒銘　朝萩(14)　花に山法師をお用いになりしも仏縁あり、水指茶入茶杓迄普通の物より水キワ立見事に ハ殊に志野朝萩に至りてハ名高き名碗にて志

野中の名碗は云ふ迄もなくお先代秘愛の品であった。お濃茶も見事に練られ、其の熟練ぶりは近来お始めとは思へない御進足ハお系統とて今更ながら敬服にたへない。

扨床間の床ニハ景文筆郭公　床脇ニ花入手つき煤竹籠花入に卯の花　唐金風炉　釜芦屋松地文　蝉釛つき

水指御本

茶入金林(マヽ)寺　茶碗斗々屋　替一入黒宗旦在判　内箱宗偏外箱閑事庵宗信　書き附あり

○横井夜雨老の侘茶　五月五日

P 432

先日来一服さし上げたいと電話をしたが、旅行中との事、朝鮮から浅川君[8]も上京　今晩一服差上るからとの案内　浅川氏ハ朝鮮以来会はあいの(ママ)で　夕刻から出掛ると好きな　道とて床に一弦琴に玄旨の短冊を張りかかっている　時代鉄の鳥置物など　袋棚に飾りあり

進められるまま　予が上客　主人も共ニ　夫人のお給仕にて　食事　向　鮭の薫製　三ツ葉筍　芽先煮物筍　稲荷寿司　時期に適した　馳走

これでこそ一会の茶に侘びと心入の誠心がある　物　階下の小間にて茶を床に光広卿　小町百人一首の　色紙

美食必ず美味でなくすべてかくありたい

釜ハ　名古屋の　釜師　加藤忠三郎(ママ)[9]新作　折り柄加藤藤九郎(ママ)君も　馳せ付けた　花ハ　土器　水瓶に芍薬一輪を活てある

水指　朝鮮　壷　打割り　赤絵　ブタ　茶入　曲全作　皮巻　金林寺(ママ)　茶杓　鈍翁　作　茶碗唐津にて濃茶を　菓子手制　草餅

は今日の節句の為の心入れ　続いて奥さんから　お淡　茶碗　瀬戸、渋紙、手　替　唐津　小服　菓子ハ　予が携帯の　大分苞柿

が四方籠に盛られて　猶茶器　ハ島物、ルイ坐　の小壷　の珍物にて一夕の歓をつくした　浅川白教(ママ)君ハ総督府　嘱託陶器専門家

藤九郎(ママ)君又　陶工とて　陶器に関する　朝鮮古陶　瀬戸窯　につき、作家連とて話題も　骨董的ならず一見　解あり面白きつどい

であった。夜雨老　益々侘の極致に入り趣味津々、道具茶ならぬ処に　仕合で　我ら好き茶友を戦時下にもこの交歓ハ　ある

○吉祥寺野水庵の催[10]　五月九日　正午

P 432

井の頭野水庵ハ先代　五郎三郎君の遺業にて年古り広い園内も苔むし幽邃な趣きを添へつつある　先頃来現主人が母堂と共に観音御堂建設中が落慶し其の供養　式を今日行ふとて案内を得た　大勢とて数寄者　宗匠連に同業者多数参会　甘酒屋台緋毛氈の牀几が設けられ

三々五々　さながら園遊会にもひとしく、この戦時下とも思へぬ風景、御堂ハ山の中服に建立　供養式が行はれ設けの茶席に入る

床に　宗達　白描　歌仙の色紙に　黄瀬戸、　香炉　自在ハ　猿に桃の　美作な　金具附に　四方釜を　釣り　水指ハ　信楽筒であるが　餘り感服されず

茶入　備前　底ニ　太郎ト　釘刻　アリ　茶杓　遠　州　茶碗ハ熊川　銘咸鏡道とあるが、何の為なるか南鮮熊川窯　なるに茶入の銘名にハ不可解多く特にこの

熊川ハ土も柔かく、全体シミ多く大振りにて一寸判断しかねる物である

淡茶席ハ戊辰切、伊賀の花入花白雲木が挿られ　宗四郎風炉に真形釜等々にて大寄せ茶は我ら落着きなく飾り附丈を見て退席した　兎角大寄ハ宗匠連の門人連れの　ザワメキにハ老人閉口閉口閉口

○山澄君改名の茶[11]　五月十四日

P 433

不問老死去後享一氏が襲名披露の茶を催しつつあり其のお招きにて時刻浜町邸に

参入すると　松永さんお夫婦　瀬津君に　水戸幸　予の五名

寄附に其角の句、「花の跡たつね鳴とや　郭公　湖中庵　其角」　葉桜のこの頃　申分なき季節に

瓶掛　深草焼ニ　銀瓶　染附　丸紋　汲出　織部の振出　莨盆　桑　手附　火入志野四方　溜　坐　絞り毛せんなど

露地を経入席　床に　西行筆、　神祇　五首切、　釜　磯松　地文　風炉新物　板高台寺　蒔絵　荒目板

主人襲名の　挨拶あり　お懐石　向　鯛昆布〆　九谷丸紋　汁　蕨　水辛　椀　海老シンジーウ　胡麻豆腐　焼物　興津鯛　織部手鉢ニ

強魚　ウド甘煮　ツト豆腐　進め魚　三ツ葉　あへ　器　黄瀬戸　桜ノ印花　湯　針　生ガ　八寸　生貝　空豆　漬物澤庵胡瓜

道潜墨跡ハ目珍しく井戸ハ舟越伊豫の所造なりし　とこの井戸ハ堂々たる物にて其の内にも侘ひあり我らにハ有楽井戸より望ましく思ふ　後藤原家へ渡る

已上の好き名器観賞裡に夫人の点出しにて淡茶を振舞れた　茶碗ハ瀬戸唐津替へ一入黒にてこの唐津ハ予に寄贈された

○柳瀬山荘観賞会　四月一日

p 430

例年より寒い花見月花は堅く時局は急迫人の心も穏かならぬ四月入り庵主から博物館より鷹巣鑑[5]査官が岡山県人にて備前窯に造詣深く且つ鑑識家桂某氏を連れ蔵品観賞[6]に来るから貴老もお出けくたさい。彼らの鑑査にも興味あらんと至急電話に途中の難行をよそに出掛けた。車中ハ日増に大混乱命かけの道中

主人ハ先つ何よりお茶だと床に京都鷹ヶ峰土橋邸にて新作されたと云ふ自作竹の花入に山椿を活け　釜ハコシキ梅地文　水指古備前矢筈口

茶杓宗旦作　茶入道庵好松の棗　茶碗熊川にて濃茶を進られた　茶にハ興味の薄い連中だが一人ハ役目柄器物にハ識見あり其の批評も面白く

出展備前ハこの水指の外　舟の花入魯堂旧蔵　偏壷の花入伊部袋形花入　種壷花入等にて鷹巣君は元より桂君も共に好くこれら古備前物をお集だと

劇賞し主人も至極満足であった。以上の内種壷以外は予が推薦　した物とで主人鼻高々にてお機嫌上々帰路志木迄女中さんに野菜を山程持せられしは落第品のなかりしお褒美ならん

広間に最近入手とかの中峯明本の墨跡など掛られ陶器殊に備前窯に対する桂君の研究談　を聞き五時帰宅した

○赤坂水戸幸正午の茶　四月八日

p 430

戦局は餘[ママ]測を許さぬ先途の不安を偲さる段階となった。緒戦の勝利を揚歌する一部の人々にハ軍部の宣伝に迷される影向さえ見られる。自分ハ此際旅行難を排しても郷里墓詣を決行したく

旅装準備、前日水戸幸主よりの招きに参入すると、耳庵翁お夫婦と予の三名

寄附にハ覚々斎原叟の茶碗の絵に黒にて云々と云ふの幅　懸り　拠は原叟茶碗にて茶を服するを娯みながら　席に移ると　床には

戊辰切　伊房のあすからは若菜つまんと片岡のあしたの原はきよぞやくめる　掛り小清庖丁の懐石にて中立　後席床に

花入軒は掛ケ樋の立て樋ハ 「近衛予楽院の受筒に新古今順徳院御製　雨後の月　秋の雨こよいの村雲跡きへて　あふくあしにのこる月かな」

の一首がいともあさやかに書き入れあり　古人の見立が後世数寄者の友となる娯しさ　予楽院の風流豊さに敬服せざるを得ない。花太郎庵も見事に挿され

侘茶入にアット云はせる主人の意図　茶器ハ別冊趣味日誌に記録したのが、現在行衛[ママ]不明で記入出来ざるを遺憾とす

○郷里九州墓参旅行十日間

p 431

九日から九州旅行も松永さんから寝台券の贈与にて老妻共、途中楽々と車中を続け、翌十日正午頃中間駅着。駅にて親戚共も迎えられ、七八年振りの墓参であった。滞在中ハ町助役議員らの歓迎会や神社伊藤宮詞[ママ]らの歓待、親戚等の招待或ハ古月百穴[7]の遺蹟、又ハ古野中佐の墓参に過し博多太宰府にも参拝し偲い出深き郷里の情景に親みしは、老後意義深き旅行であった。

想えば此の郷里旅行が我らにと最[ママ]後であった　後記

歌銘「年くるるあり明の空月かけに　ほのかにのこるよはのうつみ火」旧暮れには　こ上なき歌かな　茶碗瀬戸織部筒　銘源九郎

菓子焼餅にて敬山老師の茶禅一味の法話を聞き博学の主人との問答に心ゆく迄娯み夕餉のお齋を頂き土鍋に野菜鮟鱇と云ふ寒さの折にハ此上なき馳走にてこの夜一泊す

△翌廿九日早朝霜を踏んで山内疎林を逍遥し武蔵野風景を賞す　田舎にも寒枯れと共に壮丁の出征の為か何となく物淋しく道行く人も老人のみ、ただ多きは朝がけの売出人の姿のみ　静かな中にも寂寞を破るは空の爆音のみ　朝の食事を終ると間もなく主人ハ　お茶の用意　小間に招かれると　床に清拙の墨蹟　銅の花入太郎庵椿

水指古備前矢筈口　茶入時代中次　茶杓慶首座作　茶碗高麗筆洗

松浦家旧蔵魯堂所持　と云ふお道具にて濃茶を振舞れた。雄志を抱いて悠々自適の翁戦局の先途を憂い軍部に対する悲憤より我らの将来に処する心かまえなど色々参考談あり　二日間の有情を謝し蔬菜の土産を背に帰宅す

○東美倶楽部接収名残の茶

二月廿一日

p 428

美術倶楽部も近く海軍省に接収の浮目に遭と云ふ事からこれを名残に青年会主催の茶が催され其案内を受く

会上茶席担当は水戸幸兄弟八田富雄の三氏　先つ寄附広間を囲い床に探幽筆小鳥の幅　炭具飾に光琳風呂先

古画歌仙切張り小屏風で構い広間に「清厳一行　深山雪未消」織部三足香炉

内朱の盆　水指瀬戸筒　棚青漆塗屋面棚　政斎作

香合仁清瓢形　床脇南京赤絵仙盞瓶　棚へハ定家筆恵慶集の帖　古染附鎮紙　蒔絵硯箱なとの飾附　菓子二色砂張大盆にて

茶大衆的点て出し　濃茶席水戸幸寂蓮の席ハ歌切　花入朝鮮唐津

花紅椿　釜霰梅花散し真なり

炉縁半欠作栗　香合織部桐葉形　茶入普斎狂歌つき中棗　茶杓石州作　茶碗黄伊羅保内に一ト刷毛　水指瀬戸渋紙手と云ふ組合せにて

濃茶の振舞ハ席中ハ何れが最後と満員、器物を賞観するよすがもない　行年喜和翁

猶淡茶席茶杓ハ宗中作歌に出陣のときに用ゆるお茶杓くはみかたをすくうためにもありけり　宗中作之

など戦時中とて意儀深く感した。

扨展観席ハ　各家の蔵品にて光琳御祓の画　この幅ハ図様複雑にて光琳の大作と云ふのみ　富豪の喜ぶ物

唐画趙昌筆蓮ノ幅　小点予ハ餘り感服せず　名物茶入銘瀧浪袋遠州緞子白地金らん　流石名物流れ薬の様など銘瀧浪とは尤も至極

茶入名物玉川

袋四ツ添い　同織部澪標

形と云い侘に適する名茶入　「身おつくしこふるしるしにあいきても　めくりあいけるえにはくましふ」

水指古備前火襷

花入古伊賀銘からたち　この二点畠山家出品共に自慢の名器　備前水指ハ国宝指定　花入ハ古伊賀中の絶品である

茶碗にハ三島外花と称する名碗にて内側花文の外高台廻りにも印花文アリ　外二花文アルは稀にて茶家の賞玩する茶碗

この外熊川銘夏山　古伊羅保片身替り　夏山は内部のシミの具合よく如何にも夏の雲を見が如く　伊羅保は高台太きも名茶碗である

空中水指ハ信楽土にて肌合よく　長尾家仁清の壷　藤原家備前の花入　この花入ハ茶に数度用いられるが少々甘い物にて他の出品物にハ劣る物

猶掛物にハ松永家信実筆歌仙巻　頭住吉の画天平の因果経　一段の幅　香合でハ無地呉須台牛　ありしも　この香合ハ松永家蔵に劣る物以上ハ何れも各家秘蔵の品とて此機会に拝見出来しは数寄者の仕合せであった　階上にハ醍醐花見屏風など引めくらし緋毛氈に牀几と云ふ華な席を催られ番茶の接待などあり　倶楽部最後を飾る豪華さこの外八田君の淡茶席ありこんな有様で戦局如何により美術界とも終熄をつげるであろふ　参会者の歓気をそそり倶楽部最後を飾った。

○桜ヶ丘中村家器物観賞

三月廿四日

p 429

好古堂主より二三見せたいからお出掛との事で出掛ると原家蔵品中の一部　大燈国師の墨蹟　宋人道潛好禅国師の墨跡　光悦作名物山樵の硯箱

各物長次郎銘無一物赤茶碗　筒　茶碗名物手、井戸　提招提寺後背仏等の名器　大燈ハ元溝口家蔵大徳寺大仙庵伝来との事

と云ふ横物　水指ハ例年通り瀬戸常什　茶入、高取銘飛鳥川　茶杓覚々斎銘骨皮　釜、松桜地紋　茶碗、古雲鶴筒にて

菓子善哉にて先つ今年初のお釜に清談の内にお濃茶を拝服し　結城氏の揮毫などあり　至極気軽るに一泊した

△翌六日ハ小田原横井飯後庵に招かる　耳庵も飯後庵行きなら私も同行せんと共に出掛た　驚いたハ夜雨君松永さんのお入来は意外と早速茶の用意　主人多少マゴ附気分であったが、そこはお夫婦共お茶人　何の苦もなく用意が出来広間に通ざる　床に百済伝世の聖観音像を時代卓に、この像後背迄具備している

釜、唐、犬、大釜　耳の唐犬に見る為か　唐漆塗棚に水瓶白梅を活け　猶結城蔵相清拙禅師筆　観音菩薩云々の写が掛ら

あるも此日熱海での連絡思い出との意味か　水指南蛮芋頭　茶入唐物大海　袋剣先雨龍　茶杓宗旦三元筒銘旦朝

茶碗掘出雲鶴小筒　にて早速濃茶を進られると云ふお手ぎわ　茶入大海ハ遠州所持との事　我々にハ面白く雲鶴小筒との取合も良く茶興加ふる

猶この新席ハ鈍翁在世の折朝鮮水指と交換され翁より新建造せられしものと　朝鮮水瓶大花入ニお茶が終り旧茶席に移ると床に「江月一行　松下曽見一人懵袋子○」　太郎庵椿と白梅

お淡ハ水指雲鶴壷染附蓋　茶碗堀出井戸　替唐津三島の二ツ　カステーラ　この間夫人より黒豆、数の子、キナコ餅などの馳走を進られお心入を謝す

先日熱海小雨荘の清拙墨跡ハ中古金襴剣菱紋、一文字茶地印金ト云ふ見事の表装にて旧お大名所蔵の質格を備へるも落款に正澄清拙とあるのに香炉印中に中峰とあり浅学の予にハ清拙と中峯ハ別人ではあるまいか識者の教を得たい。

猶この二日の茶に興味を感ずるは自分には夜雨老の茶を揚げたい。年頭から仏像でもと云ふ人あらんも、それは僻事只々少々数の多きが鼻につく感がある

兎角多難な折お茶を頂戴する仕合に深くお両家に謝し正月茶脚行を終る

○敬山管主禅話の茶

二月十八日

p 426

国を賭しての大戦は今や海洋遠く嶋嶼戦となり、米の新兵機の猛反激は我海軍の不利さへ伝られるトキ茶事も一月に入り各家共控え勝ち　町内会隣組の防空演習と、国民只日夜戦時体制戦々恟々、にも拘ず数日前丸岡耕圃老及柏斎老等と最後の堂ケ島行きを思い立、修善寺駅迄ハドーニか無難に着しも土肥行バスは途中軍の演習で運行停止。仕方なく温泉町に出て知合宿野田屋に一泊す　主人は我らの為部屋も良い部屋を宛られ、先代から秘蔵と云ふ古鏡十数個を旅のツレツレに開展してくれた。久し振り山㊟亀久二君にも会い、茶箱で一服を啜る。翌早朝朝餉をかき込み駅に出ると、之又バスハ午後四時より外発車せぬと云ふ事、それも沼津からの海上連絡堵絶の為、陸行客多く既に乗車申込で満員との事で止むなく堂ケ島行きを思切り修善寺から引返すと云ふ、考へもつかぬ程世の中ハ不自由となった。

従って堂ケ島にも修善寺温泉一泊の出来事を連絡して置きしに耳庵翁から其難行を慰める釜を十八日に懸るとの案内で有難よふでもあり途中の苦みを考へると田舎ハ旧正月前東上線の混雑を思ふと、然し翁も去年春以来電力統制問題にて軍政府と衝突一線を陰退後雄志をひそめ悶々の情を茶事に托していられ、茶友を待つ以外にない此頃とて幸ひの好晴に出掛る

志木からの田舎道ハ都会人の食事にあえぐにも拘らず家毎に餅つきの砧の音にも春らしく

藁しひて ほっこや里の児と長閑な風景を胸にひめながら柳瀬荘につく　昼さがりの午後山荘でも餅つきの終った頃であった

床に後醍醐帝お歌二首「にほてるや志賀のはま風ふけゆけは月かけなからこふるうらなみ」書院に白翁能面が飾られ　ゆかしき感じ

まもなく敬山老師平林寺より耕圃老又来着　三人且座席に入席

床に平林寺開祖石室善玖の墨蹟　古銅象耳花入花太郎庵のモロ飾　釜ハ松梅地紋　魯堂旧蔵炭斗荒竹組

香合志野一文字　灰器伊部薄作　お炭が目珍しく行はれた　炉縁松の時代　主人の説明でハ享保年間山崎妙喜庵の松にて奈良の工人の作とやら、数多き久以作も鼻につく折侘びて面白く　水指南ばん芋頭　茶入薩摩　茶杓遠州作共筒

『雲中庵茶会記』翻刻稿 ⑧

後藤　恒

今回は、仰木政斎著『雲中庵茶会記』全二十冊のうち、第七冊途中の昭和十八年（一九四三）正月から、第八冊途中の昭和十九年（一九四四）四月十日条までの記述の翻刻稿を掲載する。

昭和十八年はガダルカナル島撤退、アッツ島での玉砕など太平洋戦争における日本軍の戦局は悪化の一途をたどる。そうした中で仰木は、松永耳庵をはじめとする数寄者たちの茶事に度々招かれては丁寧に記録し、評価、感想を述べている。年が明けると四泊五日の伊勢旅行を敢行、現地で松永らと合流して東邦電力関係者の協力で各地の数寄者のもてなしを受けた様子を十四頁を費やして記録している。各氏への感謝とともに、時局に不相応な贅沢を享受することの後ろめたさを時折吐露している。

昭和十九年四月十日条「柳瀬荘政斎と兵隊の茶」（本稿24頁）では、松永から柳瀬荘への疎開をすすめられる。茶室「春草廬」を住居として貸し、雑品置き場の小屋を別途用意するという松永の厚意に仰木は深く感謝しながらも「予ハ翁の性格も承知であり、我ま物（ママ）の予とて決意もつかず」と複雑な心境を綴っている。

（ごとうひさし　福岡市美術館学芸課長）

凡　例

- 翻刻にあたっては、仰木政斎著・味岡敏雄編の影印本『雲中庵茶会記』（限定版・非売品、平成九年発行）を底本とした。
- 影印本と照合する際の便宜を考え、項目ごとに影印本の当該ページ番号を表示した。
- 漢字は原則として常用漢字に改めたが、常用漢字に含まれない漢字及び一部の人名表記では原文のままとした。
- 変体仮名は現用字体に改めた。
- 踊り字は原則として同音の平仮名表記に改めたが、「々」は原文のままとした。
- 固有名詞の明らかな誤字は訂正した。
- 固有名詞以外の明らかな誤字・脱字や文意が通じない部分は基本的にそのまま表記し、適宜傍らに〔ママ〕を付すか、註記した。
- 原文において著者により文字の訂正がなされた部分は、新たに書かれた文字のみを示した。
- 原文において補記として傍らに加えられた文字は、丸括弧に入れて行内の該当箇所に入れた。
- 区切り符号の位置は原文のままであるが、文意に沿って翻刻者が句点と読点を区別した。
- 判読不能の文字は■で示し、判読困難な文字について推定したものは□で囲んだ。
- 前号までに註記した事項については、註記を省略した。

（影印本上巻の頁番号）

◎昭和十八年

p 424

西欧にハ独伊対連合軍の大戦　東又我が国中華米英との一大激戦　この国難に国を揚げての奮闘　青年ハ前線に日々の出征其の武者振りハ勇しくも悲惨なと云ふが現実のある

新年を迎へたとは云へ乏しい配給所に老いの歳を重ぬるこの正月、去年秋我門を放れし次男卒業一期繰上入営すると云ふ兵の不足、この情態と強敵米英に対し心ある者の先途悲観も漲る折

風流韻事でもあるまいが趣味な道とて控目ながら招るまま折にふれ茶にも列するがいつ迄続くものか、物資ハ日々の食料にも事かぐ交通亦制限と云ふ此頃にては

例年正月早々小田原熱海方面に出掛けたものだが時局逼迫は出掛る勇気もせず、漸く五日熱海小田原え二日間の茶旅行を試みた。

○桃山耳庵翁小雨荘でハ

（日銀の結城豊太郎氏[1]　横井老　丸岡老に　予）

p 425

床に旧冬黒田家入札得物清拙和尚[2]墨跡「浮嵐暖翠接雲容面目蒼然黛色濃待得千峯盡揺落始知冬嶺有孤松　博多円覚中長老別称秀山嘉暦内寅　清拙正澄為述偈□□」

凡例

●各論文中の作家名、作品名等については、福岡市美術館の所蔵作品である場合、同館の所蔵作品データの表記にならった。

●各論文中の著作物については『　』、団体名については〈　〉、作品名については《　》でくくった。

●註の参考文献については概ね下記の順で表記した。

日本語論文　執筆者名「論文名」編著者名『著作物名』（出版社、出版年）引用ページ

欧米論文　執筆者名“論文名”，編著者名，著作物，出版社，出版場所，出版年，引用ページ

●註の中で、既に挙げた参考文献を前掲書として参照する場合は、前掲書（註番号）引用ページと表記した。

福岡市美術館研究紀要
第 12 号

2024年３月８日発行

編集・発行　福岡市美術館
〒810-0051
福岡市中央区大濠公園1-6
電話：092-714-6051
印刷　株式会社西日本新聞プロダクツ
〒812-0881
福岡県福岡市博多区井相田２丁目１－60
西日本新聞製作センター

■ 表紙写真 ■

花格子文様更紗裂、インド、19世紀

福岡市美術館蔵

Fragment, with floral lattice pattern,

India, 19th century

Fukuoka Art Museum

26-Hd-6